合はせながら、此處東京の地にばかり二百に餘る畫工のうち、天晴道の奥を極めて、萬里海外の碧眼玉に、日本固有の技藝の妙、見せつけくれんの腸もつものなく、手に筆は取り習へど、心は小利小慾のかたまり、美とは何ぞ儲け口か、乃至吉原洲崎のちりからたつぼう、品川にも又捨てられぬ代物ありと、口三味線の筆拍子に、なぐり書きしての自慢顔、兎角は金の世の中に、優で御座るの妙で候のと言ふ處が、畢竟は仕切り直段の上に在ること、問屋うけのよき物いつち難有しとは、そも何處より出る詞ぞ、されはこそ賣國の奸商どもに左右されて、又も直下げ又も直下げと、さらでもの痩せ腕ねぢられながら、無明の夢まだ覺めもせず、これでは合はぬの割仕事に、時間を厭ひ費用を減じて、十を以て一に代ふる粗惡濫筆、まだ昨日今日繪具臺に据りて、琴古は居ねぶりの白雲頭を、撲りこかして手傳はする緣がき腰がきの模樣、霞砂子みだれ砂子の亂れ書きに、美といふ字は拭ひさる繪具雜巾の汚れ同樣、さりとは雪がれぬ恥ならずや、此儘ならば今十年と指をらぬ間に、今戸燒の隣りに坐をしめて、荒もの屋の店先に、砂まみれにならんも知れたものでなし、是れほどのこと氣のつかぬ、痴漢ばかりある筈なけれど、時の勢ひは出水の堤、切れかけたも同じこと、我等ふせぎはとんと不得手、先づは高見で見物が當世ぞと、頬杖つきて宙腰の、ぶら〳〵とせし料簡には自己々々が不熱心を、地震

雷鳴おなじ並みに心得て、天だ天だと途方途轍もなき八つ當り、的になる天道さま氣の毒なり、然りながらそれも道理、身は蜻蜓洲幾十萬の頭かずに加はりて、竈の烟の立居にまで、かしこき大御心なやませ奉る、辱なさ心得もせず、大日本帝國の名譽といふ事、揉みくちやにして掃だめの隅に、投げ出すやうな罰あらずが、其處等あたりに珍らしからぬ世の中、憤るほど管なるべし、さりとも我れは我が觀念あり、握り初めたる筆の因果、よし狂といはゝ言へ愚と笑はゝ笑へ、千萬の黄金つんで來るとも換へぬ心を腕にみがきて、輕佻浮薄を才子と呼ぶ明治の代に、愚直の價どれほどのもの、熱心の結果はいかに、斯道の眞は那邊にあるか、よし人目には何とも見よ、我が心滿足するほどの物つくり出して、我れ入江嶺三變物の名を、陶器歴史に殘さんずもの、口惜しや赤貧の身の、空しく志しを抱いて幾年間、此まゝならば胸中の奇計、何に向つて何時描くべき、恨みは是れぞ是れ骨までの恨みぞと、取しむる右の腕手首ぶる〳〵と顫へて、煮えよ腸、熱涙のみ込みつゝ悲憤の聲は現はさねど、離れいふとなく慷慨先生と仇名して、酒席の噂はづれぬ代り、柴のと叩くもの稀々なれば、友なく弟子なく女房なく、お蝶とよぶ妹相手にして、此處高輪の如來寺前に、夕顔垣にからみ蚊やり火軒にけぶる陋住居、溢國扇に紙のゐる暮しをなしけり。

第二回

散る木の葉にすら、笑みぞあまると聞く十六七を、貧にくるしめば月も花も皆なみだの種、同じほどの小娘が、流行の帶に新形染の浴衣きて、姿どこやら嫋やかに、能く見ればよくもなき顏だちも、三割どくの白粉ぬりくり、幾度じれたる癖直しの、お蔭にふくらむ髮つき髷つき、天晴美人と招牌うつて、摺れ違ひに薫る香水の追風まで、ぱッとせし扮粧の夕詣で、何を願ひぞ、神さま嘸やお困りの連中に、顧みられて我が形はづるとなければ、快からねば洗ひざらしの浴衣の肩、我れ知らずすぼめて小走りするお蝶、並ぶ綠日の小間もの店に目もくれず、そぐは一心兄の上ばかり、願ひは富貴でなく榮華でなし、我形この上の襤褸に、よしや繩の帶しめよとまゝ、我れ生涯に來べき運、あらば兄樣の身にゆづりて、腕の光りの世に現はるゝやう、みがく心の滿足されるやう、二つには同じ畫工の侮り顏する奴を、兄さまの前に兩手つかせたく、佛壇のお二方に、お位牌の箔つけて欲しきがそも〳〵の願ひ、手內職の手巾問屋に納むる足を其まゝ、靈驗あらたかなりと人もいふ、白金の淸正公に日參の、こむる心を兄には告げねど、聞かば畜生なげ出して、藝に親切の志、我れまだ其方に及ばずとや言はん、下向は

ことに家のこと氣になりて、心も足もいそぐ道の、とある小路に夥しき人立、喧嘩か物とりか何にもせよ、側杖うたれぬやうと避けて通る、多くの人の袖のあたを、洩れて聞こゆる涙ぐ忘、ふつと耳に止まりて我しらず差のぞけば、憐れや五十あまりの老女、貧にも限りのなきものかな、我れに比べて今一倍あさましき有樣、むかしは由緒ある人か皺める眉目どこか品もあるを、ふびんやこれが商賣の、何燒とかいふ銅の板、うち渡せし小屋臺のかげに頭すりつけて繰りかへす詫こと、相手は三十許の髭むしやくしやと、見るからが憎氣な奴、大形の浴衣胸あらはに着て、力足ふみ立てつ耳も聾よと喚き立るは、何れ金が敵の世の中、元來は懇意づくの、生れながらに顏赤め合ひし中でもあるまじきに、はじめは伏し拜みて受たる恩、返すことのならぬは心からならず、此社會に陷りし身の右左不如意にて、約束せしこと約束のやうにもならねば、我れと恥ぢて心ならぬ留守も遣ひ、果ては言ひたくなき嘘に、一月を延ばし十五日を過ぐせど、其揚句さて何とも成らず、つまりつまりては烏羽玉のやみの夜、家ぬしの垣の外に兩手合はせて拜みながら、不義理不名譽の驅落もすめり、さても此老女その顏ひと覺しく、四邊はづかしくや小聲の言譯、且つは涙ながらの詞とて、首尾全くは聞えぬものゝ、取り集めて察すれば、娘にやあらん杖はしらの子、煩ひて居るかの樣子、それ本復さへなさば又つくべ

き方もあり、今暫時の間まちて給はれと、あはれ腸をぼり盡くす悲しげな聲、聞くお蝶は涙もろの女の身、ましてや同じ情くみて知らぬ事もなければ、何の人事と聞き過ぎられず、さりとはあの男の聞分なさ、百兩のかたに編笠なれど此屋盡おとせといふ、それ取られては私と娘、今日から喰べることが成りませぬお慈悲と合す手を、あれ打ちをつた、憎い奴にくい奴、自分は手前はさして困る樣子も無く、大々しい身躰つきの病ひ氣も無さゝうなに、あの老人の老かも病人抱へて、困苦さこその察しも無きは鬼か夜叉か、有らば彼の横つら金で撲つて、美事老女救つてやりたきもの、それ處ではなき身、此財布の底はたけばとて、何になるものでなし、口惜しや可哀やと、お蝶身悶へする程殘念がり、黒山と立つ人じろり眺めて、切て一人は此中に憐れと見る人ありさうなものと、歎息する折しも、お蝶の肩さき摺るほどにして、猶豫もなくずつと出し男、何者と思ふまもなく、猛りたつ鬼男の前、振あぐる手の肘を止めて、輕くふくむ微笑の色、まづ氣を呑まれて衆目のそゝぐ身姿は如何に、黒紹の羽織に白地の浴衣、態とならぬ金ぐさり角帶の端かすかに見せて、温和の風姿か優美の相か、言ばれぬ處に愛敬もある廿八九の若紳士、老女の方顧みさま詞つき叮嚀に、私通りすがりの身、來歴は何かも知らねど、高が女なり老人に失禮はあり勝ち、あれ御覽ぜよあの通り詫ても居ること、往來は其う

ちにも人の目口うるさきに、洋刀の厄介も御身分がら如何や、何と私に此處の花、もたせては下さらぬかと、青柳のいと優しく出れば、はて扨他人の入らぬ口出し、詫や詞ですむほどなら、我等今頃は手を引く筈なり、濟まぬ次第きゝたしとならば聞かせもせん、我等二月三ヶ月、雨露志のがせた事もある大恩人、その上に彼奴めが口車に乘せられて、五圓といふ大金貸したは此方も商賣づく、五一の利足はよしや天地が倒まにもなれ、一人子の病人死にもせよ、待つてやる約束もなければ、負けてやる覺えもなし、それに何ぞや泣ごとの數々、地藏の顔も方圓のあるもの、利足の形にも不足なれど、何一つでも取るが取り徳、この代物引取つて行かんといふは、餘り無理でも無きつもりと、鼻で笑ふ髭づら憎し、若き男はから〳〵と高笑ひして、何ぞと思ひしに金ですむ事なりしか、さりとては譯もなし、入らぬ他人と言はれど、何れ四海の内輪同志、金は我れ立て換へんと、紙入れ探つて五圓札一枚一圓一顆、これではまだ〳〵御不足ならんが、内實持ち合せは是れ限りなり、何と雨露しのがせるほどの大恩人さま、料簡しては遣はされぬかと、飽まで柔和は粧ひながら、否と言はゝあの純白の拳何處に揮つて、あの髭男微塵になるも知れがたしと、芝居氣のある見物が呶き可笑し、彼の男は掻きさるやうに、金懐中にねぢ込んで、取り出す證書幾通、幾多の人の涙の種を印刷にせし文言名宛て、あれか

これかと搜し出して、よしか慥に渡しましたぞ不足を言はいまだ〳〵なれど、取らぬには餞しこれで算用濟みとすれば、老婆めは大した儲けもの、好い親分見附け出して是れから利の出ぬ金借りらるゝやら、人事ながら慈善家の末が案じられると、冷笑つて拂ふ裘の塵、禮も返さず恥ぢもせず人かき分けてのさりのさり、行くての大地裂けもせず、顚く石の無きも不審し、若き男は老女が陳ぶる禮よくも聞かず、何の〳〵これしきのこと、有つたればこそ役にも立つたれ、無くば我れと其方樣といづれ替らぬ難儀の淵、浮き沈みは浮世の常よ、お禮は其方樣大分限になられし時、此方より御催促に出るまでは、お預けのことお預けのこと、はて名告をする程聞こまても居らぬ名、先づそれも御免なされと、取すがる袖引はなして、悠然と去る後影、光明赫灼として輝くとぞ拜まれぬ。

第三回

歳十三の曉より、繪筆とり初めて十六年、一心斯の道に入江籟三、富貴を浮雲の空しと見れど、猶風前の塵一つ、名譽を願ふ心拂ひがたく、三寸の胸中慾火つねに燃えて、高く掛るべき心鋭くもりといふは是れのみなり、さればとて世に媚び人に媚ぶること、生をかへぬ限りならぬ實、我れより頭下ぐること、金輪奈落いやといふ一點ばりに、頑物の名高くなるほど、我慢と意地は滿身に行わたりて、容れられぬ世と彌々うしろ向きになる心、見をれ此腕なにが住むか、一飛得意の曉にはと、人も聞かぬ大言はきて、纔かに熱腸を冷やすものゝ、扨も諸道のさまたげと言ふ、貧より外に伴侶のなき身、其得意の曉いつとか待たん、彌勒の出世と並べ立てゝ甲乙の無きものよと思ふに、口惜しの念胸をさして、瞼の合はぬ夜半も多かり、寐ぬに明けたる或る朝、おく庭草の露を見て亡師のことふッと思ひ出し、俄かに寺參りしたくなり、垣根の夏菊無造作に折り取つて、お蝶が暫時と止むるも聞かず、朝飯まへに家を出けり、寺は伊皿子の豎町なれば左までには遠くもあらず、泉岳寺わきの生垣青々とせし中を過ぎて、打水すゞしく箒木目のたつ細道を、がらりざらりと百足下駄に力を入れて、纏はる片裾うるさしと、捲くり上ぐるや空脛あらはに、何の見得もなく、身は小男の面ざし醜からねど、色黑々と骨だちて、高き鼻しまりし口、眼ざしぎろりと著く凄く、沈鬱の症何處か淋しく、紺蘚の古手に白兵兒の袋、懷中に建白書相應なれど、右手に持つ夏菊の花の色、流石にやさしき處も見えけり、心とつて見る目には、映るものも映る物も皆その色、細づくりの格子戸まへに、米澤數寄屋の肌つき美くしき人、黑繻子の帶腰つきすつきりとして、芙蓉の面に淡彩の工合、楊柳の髮に根

がけの好み、扨も美かな扨も美かな、此美にすさむ心がけを我が陶爵の上に移して、共に協力の友を得たしと、茫然自失ながめ入ればあれ薄氣味の悪き人と、逃こまれて我れながら、取りとめ無き考へ馬鹿らしく、振むきもせず又五六歩、三歳ばかりの男の子のちよろ〳〵と馳せ出しが、袖なし浴衣の模様は何、雛に菊の崩し形か、それよ今度の香爐にあの書き廻しも面白かるべし、注文は龍田川とか、何の我が腕で我が書くに、入らぬ遠慮弱屈くさし、先師の言附より外は他人の意見容れたこと無き嶺三、身貧に迫つて意を枉ぐるなど嫌な事なり、さりながら我れ頑物の兄故に、世の人並のこともせず、米味噌醤油に追ひ使はるゝお蝶、思へば兄風も吹かされねど、成行と諦らめて居て呉れる樣子、それもそれなり、時運めぐらば何時かは花も咲くものよ、衝門に黒ぬり車出入させて、奥樣と崇められるゝやうに成るも不思議はなし、嗚呼その衝門よりは、天晴の人物えらびて添はせたきものと、何がなしに案じて不圖仰げば、今も想像の衝門に、篠原辰雄といかめしき表札、扨も立派の住居かな、主人公はどんな人、身分はいかに、愛國の志しある人ならば、日本固有の美術の不振、我が畫工疲弊の情、説かば談合の膝にもと、ゆめ知らぬ人に望みを屬す、狂氣の沙汰に心もつかず、彼れを思ひ此を思ひ、何時とは無しに坂も登りぬ、寺門くゞり入れどお僧どの寮坊にや、まだ看經の聲もなく、自から

の寂寞境に、あさ風さつと松に吹いて、身にしみる心地何とも言へず、本堂をめぐりて裏手の墓處へと、手桶の並ぶ閼伽井のもとを過ぎる時、入江樣まばしと呼止める聲、少し覺えのと顧みれば、つか〳〵と馳せ寄つて、物言はず大地に兩手を突く男、怪しや何者と呆れて立つ、足もとに身を縮めて、お見忘れか但し人外の私、お詞も下されまじとか、正路潔白の君に對して、合はすべき面もなく、言ふ詞出處もなき失策、後悔しぬきし改心の今日、我が田へ水の辨解ではなし、懺悔に滅ぼしたき罪のあらまし、聞いて給はる人他になき身、相弟子のよしみ昔なじみ、君を見かけてのお願みと、頭も上げずあやまり入る躰、給足美事に耳うらに二つならぶ黒子、それなり姿こそ變りたれ彼奴新次め、先師が殊に寵愛にて、行々は養子にもと骨折られしを、生地注文にと多分の金引出して、其まゝの行方もれず、師の臨終にもあり合さぬ人非人、今頃此處らを彷徨くこと憎し、何の相弟子失禮至極と、生來の癖癖目尻に現はれて、言ふこと宜くは耳にも入れず、聞きたくなしお默りなされ、相弟子ならば兄弟分、言ふ事あり咎むる事あり責むる事あり、さりながらお前樣と我れ何でもなし、他人も他人見ず知らず、入江嶺三潔白を貴ぶ身の、友とも仰せらるゝな、中々の耳ざはりなり、其處退きて給はれ、露をさながら志しの手向けの花、恙なくも口惜しければと、詞少なに行き過ぎる袂、あわたゞしく

先づと控へて、御尤ながら恨めしきお詞、賞め給へ咎め給へ、罪と知つて苦しき身の上、御折檻の笞にも逢はゞ、却つて身の本懐なるを、捨てゝ顧みぬ他人向きの仰せ、昔の入江樣、今日の入江樣、お人替りしか、お心二つか、我今までの目違か、君を先師の紀念とみて、改心の實も謝罪の情も、君によつて顯はしたき願ひ、さりとは齒餅のお詞かなと、半いはさず振返る頼三、たまれと一聲鬱憂の氣の凝りたる餘り、物あらば當らん破裂の勢ひ、唇ぶる〳〵と顫へて性來の訥辯いよ〳〵訥に、汝新次人非人、恩忘らず義理知らず道忘らず、汝が罪の身を責むるは知らず、我を批難するか、我を批難するか、我頼三昔も今も、正義を立て公道を踏んで、一歩の過ち覺えなき身、どこの何處に何の缺點、言へ聞かん言へ聞かんと、詰寄る眼尻きり〳〵と釣つて、汝不忠不義の奴も、先師寵愛の餘りには、世に其罪を包まれて、知る者は師と我ばかり、我れ一度言はじと定めて十年近く、此口開かねばこそ汝れ安穩に、月日の光り拜むは誰が庇護、頼まれずとも折檻の笞此處にあり、墓前へ手向けん志しの、此花で打つに不思議もなし、打手は頼三精神は先師、口惜しくば身にしみよ骨にしみよと續け打ち、手に持つ菊花投附けて、睨みつむる眼の裡に感じ來れる新次が躰、昔ながらの美顏今一層の品を備へて、あはれ好男子身じろきもせず、瞼にあふるゝ後悔の涙、眉宇に滿つ慚愧の狀、此人先師の愛せし人、我

れに謝罪と思ひ込みし人、憎むが本義か、捨つるが道か、とばかり迷つて判斷の胸うやむやになる時、靜かに頭を上げて言ひ出づる一通り、聞けば過りたり我れ短慮輕忽の所爲、此人の罪罪ならず、偶々岐路に落ちし不幸の身と、先づ憐みの情より聞けば、私元來私慾にあらず、小を捨てゝ大に就く國利國益の策、立てしといふが抑々の破滅にて、思へば料簡が若かりしなり、腕を組みての考へと手を下しての實驗とは、冠屐の相違雲泥の差別、人は我より利口にて、世は思ふまゝならぬものと、つく〳〵歎息するにつけて、正義は人間の至寶といふこと漸々に發明し、才ばしりたる考へ身を離れしは、彌々無一物の曉がた、爾來幾年志しを磨きて、遠國他國に流涙の結果、不思議に人らしく世に言はれて、少しは名をも知らるゝ境界、今歳ゆづらしく歸京の錦、心に飾つて拜顏を樂しみし、師君は此處草陰苔下の人、松風に袂をぬぼつて幾朝くむ閼伽井の水の影見ぬ人に殘念は增りて、一層君のこと懐かしく、墓はしかりし昨日今日、打たるゝも嬉しく罵らるゝも嬉しく、眞の兄弟に逢ふ心地と、保ちかねてこぼす涙一滴、見る〳〵頼三感歎して、大地につく手まづ上げ給へと扶け起して、知らざりし今までの失禮、知りての後悔、打ち割りし意中に物のなきは見え給ふべし、いざ御墓前に申直りせん、心おく事かと光風霽月、引いて立つ手に恨みも殘らず、取なせばこれも先師の導き、ありし朋友なり

相弟子なり、君も訪ひ給へ、お前樣も來て御覽ぜよ、お住居は何處ぞ、此處よりは遠からぬ如來寺前に、引結ぶ庵の草深き處が夫れ、偖は目鼻の我が宿も此坂下、篠原と呼ぶが當時の姓なり、さりとは奇遇よ辰雄殿とは君の事か。

第四回

月に恨み風に憤り、天下を悪魔の巣窟と見て、黑暗々の中に彷徨ひし穎三、何處ともなく一點の光り微かに見えて、前途の希望漸々に大きくなりぬ、以前の新次、今の篠原辰雄と呼ぶ男、有し職人時代には、負けぬ氣象の人受けよからず、師匠の愛の膠しきほど、憎む人さま〳〵の説を搆へ、傲慢と罵り狡猾と嘲りて、交際する者稀なるを、穎三例の弱きもの助けたく、弟のやうに最負せしが、恩は二代の親も同じ、師匠の金持逃するほどの奴、師匠も我れも目違ひと諦めて、愁ひ恥ぢを世に露はさじと、匿み通せし七八年目、何處ぞで悪人の仲間入、今頃は何になりてと、折ふしの思ひ出種、流石に忘れぬ所もありしに、思ひきや今日の身分、變りも變りし立派の紳士になりて、然かも執る主義の高潔さ、話し合ふほど頼母しさ優りて、墓參歸りの半日を篠原のもとに説きつ説かれつ、辰雄今日までの經歷につきても、善事と悪事を洩さ

ず隱さず、篠原と呼ぶ今の家、何某地方の金滿家なりし事、其處に住み込の初より、次第に氣に入られて一人娘に聟養子と成りたる事、其身戸主となりて二年とたゝぬ間に、親女房とも引つゞきて病死せし不幸さ、扨その幾萬の財産指のさしてなく、我が自由になすもつらく、家につきての緣類にゆづりて、身退きたき願ひも、世の人さらに聞き入れてくれず、其まゝ安座逸居の身、我が位置高まるにつけて湧き來る希望のさま〳〵、及ばぬと知つて捨られぬが是れも癖にや、社會の爲の東奔西走、此處東京に計畫ありて、出京の昨日今日、生中此方彼方に名を呼ばれて、稱へらるゝ身汗あゆる心地、昔をおもへば大恩の師に、よしや譯は何にもせよ、重々の不始末もあるを、素知らぬ顔に青天を歩くさへ、日月の手前忍ろしく、世を欺くに似て心安からず、手を置かぬ胸夢おどろきて、人知らぬ罪中々にくるしかりきと、腹ある限り告白して、屑よしとする穎子、表面をつくろひて底にゐる、輕薄者流を厭ふ目には、よくも返りし本善の善、穢なる人よと感じられて、過ぎし過失は美玉のくもり、志かも拭ひ去つて見るに、却つて光りは勝る心地、穎三志きりに憎からずなりぬ、中々物語り靈きもせぬに、交際ひろき人のならひ、訪問者陸續とうるさく、何と入江樣、人氣なき閑靜な處にて、一日ゆるりと御高説承りたし、君はいつもお暇かと問はれて、はて扨貧者に餘裕はなし、氣樂な事いひ給ふ

な、人氣なき處と言はゝ、我れ詫住居の閑靜さ、裏の車井に釣瓶くる音か、表に子守歌きこえる位のもの、此處よりはつひ其處なり、いつぞは來て御覽ぜよ、麥めし炊かせて薯蕷汁位の御馳走はすべしと無造作の詞、さりとは羨ましきかな、世の事聞かず人に交はらず、何事の愛きも宿らねば、胸中いつも清しかるべく、凡界俗境遠く離れて、採る筆一つに樂みを知る御身分、我れ雲泥の相違と歎息する辰雄、籟三引きとりて、何の羨ましき身分か、筆心におかせず業世と合はず、我れと埋もるゝ身のはては、首陽か汨羅か底知らずの境涯、さりとは世の中あても無しと笑つて、遠慮なき昔語りに、胸も開く障子の外に出れば、廊下いく曲りか廣々とせし住居、實に人の身は水の流れと、物言はず顧みれば莞爾と送る辰雄の姿、あゝ人物と心にはめて、下婢が直す百足下駄、是れ特色の愧づる躰なく、喜色雍々門を出でしが、歸宅の後もお蝶相手に此物語、平常は蛇蝎と忌み嫌ふ世の人、兄さまの褒め者とはどんな人、お蝶見たしと思はねど、喜ぶ兄に我も嬉しく、一日ありて二日目の夕がた、軒ばの榎に茅蜩の鳴き出づる頃、手仕事叮嚀に取片づけ、家の廻り奇麗に掃除して、打水いそがしき門口に、入江樣はと音なはれて、誰何と振かへる裸姿を、扨も美形と見るは辰雄、お蝶はッと心附きて、俄にさすや雙頰の紅、色は何の色我れ知らず、見しは清正公の彼の時の彼のお人、何として我家へはと、

騷だつ胸に是れよりや知る懸。

第五回

床のもとの寵馬かたさせと鳴いて、都大路に秋見ゆる八月の末、宮城の南三田のほとりに、人家二三十戸買ひつぶして、新に工事をいそぐは何、押立てし杭の面に、博愛醫院建築地と墨ぐろに書して、積み立つる煉瓦の土臺に、きやりの聲の賑はしきと共、四方に聞えわたる篠原辰雄、浮世のうきを愛きと捨てずして、吉野紙の人情あさましゝと、孤身奮ひ起す愛世濟民の法、我れ微力不肖の身の、斃れて已まば已まんのみ、今日細民困窮のあり樣、見るに腸たえずやある、知らずや錦衣九重の人、埋火のもとに花を咲かせて、面白しと見る雪の日は、節婦こゝえて涙こぼるべく、大厦高樓に岐阜提燈ともしづらねて、風をまつ納涼の夜は、蚊遣火のもとに孝子泣くめり、中に憐れは疾病の災ひ、名醫門にあり、瓦藥ちかきに有つて、まかも求め難く得がたき身、天命ならず定業ならず、救はるべき命見す〳〵の殘念さ、妻の身子の身〳〵くばくぞや、人生れながらに惡意なけれど、迫りては德不德取捨の猶豫なく、天を恨み地を恨み、世範これより亂れて國家の末いと危し、これを救ふこと仁にありと、我れ先づ資産を擲つ

て、一番手を救生の急なるに起し、一方は富國利民の策を講じ、一方は貴顯紳商の門に、協力贊助を求むること切なるに、德孤ならず何某の殿某の長官、意氣投じ所論合つて、甲より乙に美譽を傳へれば、德義を一の名譽と心得る輩、何となしに雷同して、世上の評判赫と高く、見ぬ人聞かぬ人名を慕ひ、天晴仁者と知らぬ者なくなりぬ、其行ひ其言見るにつけ聞くにつけ、交るにつけ睦むにつけ、顧三次第に慕はしく尊く、口腐れ他人に扶助は仰がじと定めし、我慢の角は此人の前に折れて、鬱悶の心まのびがたく、我業疲弊不振の物語りより、斯道挽回の志し一日の休む間なけれど、實をいはゞ勢力なき身の聞き入れて呉れてもなく、生中說くことと嗤笑ひに成りて、はては後指さゝるゝことと口惜し、さりながらそれも道理、我れ此道に入たちて十六年、まだ一度の共進會に名を揭げたることもなく、我れ自由の筆貧ゆゑには縛られねど、中々の直行惡まれて、問屋うけ宜からねば、註文は廉價粗物の外もなく、事心と合せず筆何として揮はるべき、不滿々々の塊まりは、何の世の中あき盲目ども、これ相應と投げ出しものにして、意匠もちひず鍛錬馬鹿らしく、品物の面よごしてやれば、我が血涙を呑みし粗物も、彼れ衣食の爲にする粗物も、見る目に何の變りなく、口ほどもなき駄物師と嘲られて、我名いよ〳〵地に落ちたり、季錬月鍛の筆、經營慘澹の意匠、心に有つて物に描かず、

我れ男子の身の精神一到、猶事成らぬ腑甲斐なさ、世人明なきか我れもし惑へるか、誰れに繰つて語り合さん術なく、冥々の裡に重ねし年幾年、君一度は斯道の流れに立ちし人、汲み知り給ふ事もあるべし、我が爲の名案下し給へと、打明かす意中、辰雄しきりに嘆じて止まず、げによくも合へるものかな、我が國家を見る心その身に出づる事なし、德義の廢頽人情の腐敗、此れを憂ひ彼れを嘆けど、道に立つ人大方は、濁流汚濘に身を投じて、あかも汚れを知らぬ輩、味方少く仇は多し、さりながら捨てぬ處に物は成立ちて、二人三人の正義の士に、知られ初めし昨日今日の事業、憚り多けれど是れ手本とも御覽じて、容れられぬ世を捨て給はず、腕かぎりの品物こしらへて見給はずや、其資金は我れ受けもたん、此事廉直の君が心に屑しと思さぬか知らず、それは君一身の小事のみ、幾多の畫工の睡を覺まして、國益の一助たゆふ所か、吾邦特有の石陶器、價廉といへど品は英佛伊に及ばず、獨り薩州陶器のみは、土質釉料他邦に類なく、天晴名譽の品なるを、惜しや畫工に氣慨なく、問屋に一の精神なく、今日の成行くちをしの思ひ、我れも多年の胸中にありし、不思議に心の合するも自からの時機なるべし、逸し給ふなと熱心に力を添ふれば、類三感涙に眶ぬれて、何分にもと生れて初めての詞、辰雄その後は聞かず言はさず、事一切此處に此處にと胸を打ちけり。

日數隔つること幾日、三田の工事の喧しきと共、斯道薔工の耳峙つること沸き來りぬ、如來寺門前草ふかき處、埋もれものゝ慷慨先生、三年蹇ばず鳴かずの技倆、現はさんとする風說、立つや我れより高き人、挫きたきが此輩の常、陰に陽に批評たくましくすれど、後ろだて確かなる身の、却りては心可笑しく靜かに素がきの筆を下しぬ、生地は素より沈毒官が精製の細璽陶、撰みは穎三かねての好み、三尺の細口にして、蟄附龍耳の花瓶一對、百花これより亂れ咲いて、燦たる金色みるは幾月の後、心未來に先づ馳すれば人物景色眼前に浮かんで、我ならず莞爾と笑む穎三、王侯貴人何のものかは、世塵遠く身を離れて、凌風駕雲の仙に入る心地、經つ日覺えず明けぬ暮れぬ。

第六回

恩に感じ行ひに服して、我れは神とも尊ぶ人の、彼れより心に垣を結はず、睦れらるゝ事勿躰なく嬉しく篠原といふ名知らず聞かずのそもゝ、身にあまみし一事漸々に形づくりて、馴れゆく月日の深きほど、可憐の胸やみに成りぬ、お蝶あくまで優しき姿、萩の下露もろげに見えて、立てし心は現はさねど、思ひ込まば火水の中も、よしや命は假の世と定めて、二つの道は踏まぬ氣象、我身卑賤の敎へもなきに、君樣世上に敬はるゝお身、成ろまじき願ひと我れを叱りて、さていよ〳〵捨てがたく、染みし思ひの是れを友に、我身一生獨りずみと、あはれの觀念さすがに勤ぐは、折ふし耳にする世の評判、宜しと言はれて悅ぶは格別、何某子爵最愛の娘、是非彼の人にと申込みの噂、聞く胸なにか轟いて、[illegible]々兄に問へば、大丈夫と笑つて退けられぬ、されど流石に氣になりてや、其つぎの夜に訪はれし時、穎三其事いひ出して、實かと問へば、虛言ではなし、舊大名の幾萬石とか、聞くばかりも耳うるさく斷り言ひしも五度か六度、未だに仲人殿むだ足に參らるゝ事可笑しとばかり、辰雄心に留めぬ樣子、[illegible]それは何故のお斷り君もまだ年若の、これより獨身にも居られまじ、望み好みの有るは知らず、大方ならば極められたが宜からんにと、穎三心あつて言へば、我れ獨身にて終らんとも思はねど、華族の聟になる願ひなく、姫君樣女房にまたくなし、香花茶の湯に規則どほりの容儀とゝのひて、お役目の學問少少ばかり、何になるものでなし、世路の困難ふんでも見ず、一人立ちの交際もならぬやうな、木偶的の神さま持込まれて、親の光りに頭さぐるなど、厭な事なり、我れ望みは身分でなく親でなし、其人自身の精神一つ、行ひ正しく志し美事ならば、今でもお世話ねがひたきものと、鮮かな詞、穎三片頬ゑみして、お蝶をかへり見ぬ、此處に來て遊ぶ時の辰雄、世に高名の人

ともなく、さながら家人の打とけ物暗、只なつかしく睦まじく、友か親戚か猶一段、頴三たしかの望み出來て、或る時お蝶にほのめかせば、挾くはへて勝手元に逃げしが、其頃よりお蝶いよ〳〵身の行ひつゝしみて、德を修むる事專一と心がけ、姿木綿着のいやしきは恥ぢねど、詞づかひ立ふる舞、家の内の經濟より始めて、世の交際人づかひと、細かに省みれば未だ身に整はぬ事ばかり、繁きが中に慰といふ怪しのもの、折々の波むねに起して、飽かれまじ厭はれまじ喜ばれたし愛されたし、何とせば永世不滅の愛を得て、我れも君樣も幸福の世の過ぐさるべきかと、慾は次第に高まりて、さま〳〵の想像わき來れば、逢ふに嬉しき物がたりの、裏は如何にと枝葉を疑ひ、我れと我れを嘆き身を責めて、一心の半は辰雄のもの、辰雄ありての喜怒哀樂、善も惡も黑白も辰雄が指のさし次第、戀の山口くらくなりぬ、頴三局外に立つ身の、迷ひを捨てゝ見る目には、辰雄の愛の度妹に下らず、彼れも眞情此れも眞情、取ならぶる好一對とこゝろ嬉しく、二人長閑に物がたるを聞けば、百花の園に雙蝶の舞ふ心地、春風其座に吹渡つて我れも陶然の樂み限りなく、右も左も喜びの中に、心障らず意氣軒昂、取る筆いさんで齎圖うごき、唐草模樣割模樣、緣書き腰がき地つぶしの工夫、濃彩淡彩畢生の巧、下燒成つて又一窯、二窯三窯よはいつしか、殘菊落葉ときの間の霜と消えて、煤拂ひの音もち搗きの聲、

北風の空に松や飾り松。

第七回

送る歳くる歳珍らしからねど、心改まれば一段の光り、のぼる初日の影にそひて、汲あぐる若水の車井に、めぐる世の中おもしろく、屠蘇の盃まづ年下よりと、さすも可笑しや一家二人の生活に、内裏儀式のむかしを學びて、三つ組の重ふるきを捨てず、新らしき物は二間四枚の樣がはの障子、切り張りの斑らならず、是れ例年に異りたる處、篠原が庇證なりとて、元旦早々喞は出でぬ、頴三片意地の質、人に受くる惠み快からねど、溺るゝ藝に我れと負けて、二十金の生地二十匁の金箔、此處四五月の費用幾度の繻代、積もりし恩の深きが上、猶心づけの數々もうるさく、其都度に斷るを、新年着の料にとて、贈られし去年の反物、迷惑さ限りなく、遣りつ返しつのとゝの果、さらば妹に頂戴させん、我れは男のよき衣服きて嬉しからずと、兄妹ぶりの一反を返して、殘す一反に人の情無にせじと、お蝶の曠衣に仕立させて、今日の姿つくろひしを見れば、今歳十八の出花の色、玉露の香り馥郁として、一段の見榮え流石に嬉しく、此服裝平生着にさせたくおもへり、人は廻禮に忙しき日も、世捨て人の其苦なく、今日一

日はと仕事休みして、横に轉ぶ肱枕、御慶の聲に夢やぶれて、珍らしや誰れと問へば、常は疎き問屋の何某、末廣に祝詞を籠めて、長々と去年の無沙汰の詫、これよりの懇親、一向たのみて行きしこと、お蝶その通り取次げば、はて扨利慾にくらみし眼は、何處まで喧きか方圓のなきもの、其詞我れへではなし、御本尊は彼方にとて、指すは座敷の花瓶、これ高くなりし評判に、出來上らぬ内より我れ買ひ取らん、いや是非とも私にとせり合ひの申込、一々に跳ねつけて、今歳コロンブス博覽會に出品の計畫、諸事は辰雄の周旋に、悠然搆へる小氣味よさ、穎三いよ〳〵大言を吐きけり、暮れて其日も點燈ごろ、辰雄廻禮の車を其まゝ、交際ひろき身の勞れも厭はず、門に棘棒おろさすれば、春色いと〻長閑になりて、いふ事きく事一々にもしろく、穎三紙鳶の昔を言へば、辰雄廻し獨樂の面白さ忘れずと語り、彼れに移り此れに移り、次第々々に密になりて、幾變遷の今の身、中々にそのかみの無心戯しきばかり、世のこと人のこと目に映りて、彼れも助けたく此れも救ひたく、不相應の事業に身を委ねて、及ばぬ力の我なぶら口惜しく、暗涙を呑むこと誰が業ならねば、訴ふるに處もあらず、凝りにこりし憂鬱の氣の晴るゝは此處に斯く遊ぶ時ばかりと、何故か例に似ぬ詞、穎三聞き咎めて、怪しき事かな君が博愛の德、上に聞え下に渡つて、推尊せぬ人なき筈を、何故の御不滿ぞと問へば、

何事も言はぬが花なり、お互に聞きつ聞かせつ、樂しき事ならば宜けれど、我胸にさへ持切れぬ苦を、君達に分けて成ることか、元來正は邪に押され、直は曲に勝ちがたきが常、何事も問ひ給ふな、腦いよ〳〵亂るゝやうなりと、振あふぐ面氣の故にや、血の氣も見えず蒼く白く、唇を嚙んで沈思の躰、お蝶たまらず兄の袂そと曳けば、穎三少し前に進みて、善き事のみを聞き聞かせの友いくらもあり、喜憂ともにと言ふ處眞實の價値ならずや、これを隱されて悅ぶ者、世の中にはあるか知らねど、我等同胞おもしろくなし、とは不遜の詞なれど、兄弟と思ふ君の事、水火の中にも手を携へたきが願ひ、何と打明かしては下さらぬか、承はられば氣も落附かず、我よりはお蝶何の位心ぼそきか、女は氣の狹きもの、役にも立たずくし〳〵と氣にして、我れも迷惑、可哀さうにもあり、五歩十歩の同じくは、諸ともに苦を分けたしと肚からの詞、お蝶もの言はず打萎れて、組み合はす手を解きつ返しつ、あはれや胸の動悸高かり、辰雄俄かに心づきてや、扨も馬鹿な事言出して、折角の面白さ蓋なしになりぬ、苦あれば樂あり、樂あればこそ苦もあるなれ、循環して行くが奇なものなるを、一々に憂れはしと見る日には、五十年の壽命たまることか、お蝶さま案じ給ふな、今いひしは皆醉の上の譫言、泣上戸の言分何でもなし何でもなし、笑ひ顏みせて我れにも落つかせ給へと、から〳〵と笑つて一物

の殘らぬ樣子、再びもとの話に復つて、更くる夜遲く歸宅せしが、お蝶いよ〳〵心悶へて、寐られぬ枕うくばかり、涙の床につく〳〵と案ずれば、最惜しや君樣、あれほど熱心の計畫に、何ごとの豐いりたるか、談合する友は少く、打とはす仇は多き世の中、口惜しさいかばかりぞや、今宵の詞今宵の顏色、必らず仔細なくては叶はじ、我れに隔ての匿み隱しか、我れに歎きを懸けまじとてか、兎にもせよ角にもせよ、我れは君の妻、君を措きて我が夫なし、見すべき心は斯る時よ、萬人一樣表面は同じ、其皮一重下の下の骨に刻んで忘れぬは何、知らせて知りて喜憂は偕にしたきものと、思ひを曉の鐘にかぞへて、新玉のとしの始め長閑けからず、眼なき戀に身は使はれもの、三ヶ日も過ぎて七種の日に、辰雄誕生日の祝ひながら、新年の宴開きたく、お蝶さま是非借りたしとの文言、我れ悅ばせん爲かあらぬか、當日一式の身の廻り、何處貴顯の席にも恥かしからず、心をこめし贈り物の品々、縞三喜んで許せば、我れも其人の意に背かじと、こらす粧ひは錦上の花、あゝ純粹の淑女さま、此運此姿、見せたきものは亡き親といはれて、お蝶鏡の前に泣きけり。

第八回

百花に魁けて咲くや窓の梅、來鳴け鶯わが宿は、春風ぞ吹く品物の落成、四窯八たびの窯の心配、薪の增減烟の多少、火色に胸をもやし微響にも氣をいためて、壁や入たる流れやしけん、金色の不明繪具の變色、苦を嘗めつくせし此處幾月、思ふこと思ふに叶ひて、新鑄みがきに磨き出せし光澤、耀く光りは我が光り、花瓶の上部見切りの中、正面は龍に立つ浪の丸模樣、周圍に飛ばす菊桐の、あしらひは古代唐草にして、見切りの境界雲形の、上下に描くや東大寺模樣、此處さや形七寶の地つぶしに、帶の菊の丸ありふれたれど、丹誠の筆いやしくもせず、上部終つて枠どりの內の畫は、表面對の金銀閣寺、裏面向ひ合はす淺川稻村が崎、誠意誠心みちみちて、粧ひなす彩色凡筆ならず、枠の周圍は古薩摩風の秋の七草、金模樣の蝶のちらしがき、此地つぶしの雲ぼかし形金梨地、先人未發の工夫をこらして、刻苦の跡いちじるく、壁の描つぶし緣腰のわり模樣、微ならず細ならずと誚らばそしれ、眼を持つものは來て見よ、一打棒にも美はこもる我れ額三不器用の技倆、此品物に止めぬと誇りて、晩酌一杯酒氣さへ添へば心いよ〳〵面白く、篠原に風聽がてら、お蝶まねかれし日の禮も言はんと、立出づる門口に、兄樣ばしと抽ひかへる妹、言はんとして言はんとして躊躇ふを、何ぞ用かと小戾りすれば、何でもなけれど夜風お寒し、風引て給はるなの心づけ嬉しく、それほど遲くはならぬつもり、な

れども醉ざめは油斷がならず、羽織今一つ着て行かんと、立歸つて着重ぬる襟の先、襟に手を添へて折りながら、兄樣大層お髭が生へたり、新年といふに見苦しやと横顔つく〳〵眺められて、何の夜ではあり知れる事か、明るき處で明日剃りて給はれ、先づは品物も出來上りて、小成に安んずるではなけれど、祝ひてもよき事なり、四五日の中に辰雄どの誘ひ出して、三人連れに何處そへ行かん、其約束今宵して來る心、おそくはならねど金目の物、家にあるだけ不用心なり、門の戸さして待ち給へ、さりとは胸に雲もなしあゝ月もよしと立上る兄、其手にすがつて門まで送れば、地上に落つる影二つ、見る〳〵一つは遠くなるを、見送つて立つ影うらかなしく、夜風軒ばの榎に淋し。

むかしは他處にみし表札、やがては弟の門くゞる嶺三、頼む、どうれの玄關向き小うるさく、辰雄の居間は豫て知る、庭口の戸を押せば明きたり、霜に志めりし芝生の上、踏むに音なき袖がき隱れ、聞こゆる聲は高からねど、影は障子に二人三人、聞きたし何の相談會と、引き立つる耳に一言二言、怪しや夢か意外の事ども、某の子爵たまに遣ひて、何某長官に歎願さへせば、此事必らず成立つべし、某の殿の證印は柳橋のに握らせ次第、金穴は例の大盡、氣脈は豫て通じ置きたり、跡は野となれ、山師ともいへ詐僞とも言へ、愚者に持たせて不用の財、引上

げる事世の爲なり、思ふも腹筋は洋行がへりの才子どの、何の活眼知れたものよ、魔睡劑は入江の妹、此間の宴會に眼尻の角度見て取りぬ、彼の頑物に說きつけがむづかしけれど、恩といふ獄屋入り、八重からげも同じこと、女は況て懷中そだちの世間見ず情の深きだけ丸め易し、おろす元手の細工は粒々、嶺三といふ奴おもひの外、遣ひ道不向なれど、飼つて置かば何にかなるべし、楠どの〻泣き男、人間に不用もなきもの、博く愛する是れも仁かと不敵の詞、聲は辰雄歟おのれとばかり、奮然立上つて更に摩する腕の無念さ、内にはいつか話絶えて、玉笛の聲嘵々と聞え出でぬ。

第九回

此人の一笑に無限の喜びを知り、此人の一涙に萬斛の憂ひを酌み、形より濃き影の如く、起居に心はまたがふ其人、玉をのべし容顏愁ひを含んで、志み〳〵との物語り、何の契りの君と我れ、宿世あやしく忘れ難く、國家の爲めに盡す心、半分は君に取られて、人に言はれぬ物をも思ふ身、はかなしやお心も知らず、天下に妻は又なしと定めて、何の子爵の娘、振むく處か、にべもなく斷りしが蟻の一穴、貧を言はゝ我が所爲わるかりし、其子爵殿今までの一臂にて、

支出の金に事も欠かず、事業運びかけし今日になりて、俄かに破約の申込み、此途たえて復事成らず、怨みを呑んで我れ此まゝに退かんか、遺す譏りも嘲りも君故と知れば惜しからぬど、何と成るべき世の中にや、國家の末を思ひいたれば、殘懷山のごとく此胸やぶるゝばかり、此事誰れに語らるべき、隔てぬ中の君にさへ、言はれぬは斯る譯、外にとる術なきでもなけれどそれいよ〳〵心苦しくと、言ひはてぬ詞猶もどかしく、此眞情まだ見えずやと打うらめば、さりとは其眞情、見えて悲しきは事君が上なり、成否はいづれお心一つ、今日賓客の一人彼れ有力の貴顯、我が爲金穴たらんと言ふ、心はと問へば、苦しきは此處、君の噂を如何に聞きしか、一意妹と思ひ込みて、達ての所望つらからずや、君を他人にゆるして我れ、國家の爲と斷念られず、よし我れ慾を離るゝとも、この事何として我が口より言はるべきと、愛しや戀人斷腸のけしき、可憐の少女魂を奪はれ膽を消されて、貴を我が身の上に負へば、操を破つて操をたてんか、人知らぬ罪わが心の裡にあり、さりとて我れ故君が名まで、世に滅ぶるを他處に見んこと、恩を仇なる畜類の所爲、あれも辛しこれも憂し、何とせんとばかりの胸、智慮分別の及ばぬ末は唯死の一つ、影あり形のある世なればぞ、障り多く妨げ多し、生れぬ昔の空無量、我れお蝶といふ身がなくば、何方へ義理なく憚りなく、此戀圓滿にあるべき筈、よし是れも天命

なり、病ひに死ぬも戀に死ぬも、命は一つよ二たびは行かぬ路、天地にも恥づる所あらず神佛もとがめ給はじ、兄さまもゆるし給へよ我れも悔む所なしと、決心するどく未練なく、あはれお蝶潔白無雙の身、濁りに染まじ亂れじの行ひ、寐る夜の夢のさばしも忘れず、富貴に眼をとゞ貧賤に心をみがきて、今歳十八年くもりなき美玉、打くだく大魔王は戀といふ胸の一物、形を辰雄に假り聲を篠原にかりて、或時は誘ふ春風花ひらく園、ある時は指さす秋雲月くらき天、喜憂を包みし袂のさき、引きて伴ふ果ては何處ぞ、東西南北かげもなく形もなく、愛らしかりし双頰の靨いづくに往きし、なつかしかりし遠山の眉いづくに往きし、星の眼蕾の口、復燦かず復開かず、黑漆の髮雪白の肌、あれも無しこれも無し、寒風ふきしきる夜半の月に、追へども見えず呼べども答へず、形見は留むる一封の文に、殘す手蹟のうるはしきも涙。

第十回

どつかと坐す花瓶の前、あふれ出る熱涙はらひもあへず、にらみつむる眼光火と散つて、取りしむる腕、くだけよ此骨、寧ろ生れながらに指まがり筋つまりてあらば、斯道にと志ざすこともなく、入立たぬ昔に何をか願はん、なまなか陶畫の粹と呼ばれし、先師の畫工塲に一と稱へ

られて、我れは賣らねど自からは人も知る名、貧ゆゑうづもるゝ事口惜しの念、我れ潔白の心に沸きて、願ふまじき名譽ねがひしは何故、たのむまじき人頼みしは何故、喰ふまじき不義の食この口に食みしは何故、許すまじきお蝶、不義の人に許せしは何故、汝れ汝れ此腕此藝、心をまどはし目を眩まして、見えず覺らず今月今夜、お蝶不幸の家出は誰が業、磨きし多年の筆故に、最愛の妹ころさするか、ねりし心の苦みは、汚濁を我身に浸みこませしか、冷笑ひし辰雄、嘲りし辰雄、聲は彼れよ罪は汝よ、交りを斷つて悪聲を出ださぬ、我れ君子の道は知らねど、受けし恵みの泰山蒼海、無念骨髄に徹れど恩は恩なり、彼れ奸悪の秘事この耳にして、世ことと聞き捨てにすべきならず、世の爲人の爲正義の爲、揮ふべき拳こゝにあり、秘藏の短劍ひらめかして、あの胸もとを貫くも容易、さりとは無念や此品物、此恩此恵み身をまばりて、向くべき刃なく揮ふべき拳なし、思へば恨みは我れにあり、腕にあり藝にあり此花瓶にあり、惜し口惜し仇め敵め大悪魔め、汝れを碎いて辰雄も刺さん、汝れなくば何の恩何の恵みと、拳をかためて突立上り、見れば見れば月明りに、浮きて見ゆる金銀閣寺、砂子一つ筋一本心をこめぬ處もなく、まして周圍の金なし地、嗚呼幾年の苦の名殘、描きも描きたり我れながら、天晴斯道の妙の妙、この筆たえて繼ぐ人ありや、我れ道に入りて十七年、惜みに惜みし名を記して、

見よや海外の碧眼玉、來れ萬國の陶器畫工、日本帝國の一臣民、入江緑三自まんの筆と、心に誇りし瀟足の品、これ何として碎かるべきこれ何として碎かるべき、兎にも角にも世に合はぬ身の、一生の思ひ出これに止めて、入らんか深山のそれも口惜し、お蝶ふたゝび還りもせば、辰雄に邪心の無くもあらば、此品保存り成るべきをと、雙手に抱いてためつすがめつ、眺め入る心惚として、我れ畫中に入りたるか、畫圖我が身に添ひたるか、お蝶もなし辰雄もなし、我慢もなし意地もなし、金光我が身に輝いて、四方に湧く喝采の聲、莞爾と笑めば耳ちかく、類三愚物のつかひ道なしと、聞え出づるは篠原か、汝れと振仰ぐ袖ひかへて、お風めすなと優しき聲、嬉しやお蝶かへりしか、兄さま彼處へ諸共にと、指す方は金閣寺銀閣寺、咲くや秋草胡蝶飛んで、立わたる霧さりとては、我が金なし地にさも似たり、面白し面白し、蛟龍つひに池中の物ならず、湧き來る雲形のうちに立涙の丸模樣、登り龍下り龍龍の丸、蝶の丸花の丸鳳凰の丸、をどり桐くるひ獅子二葉葵、源氏車槌車ぼたん唐草菊から草、吉野龍田の紅葉に花に、あれも美なりこれも美なり、お蝶も美なり辰雄も美なり、中に就て我が筆美なり、これを棄て何處に行かん、天下萬人みな明きめくら、見すべき人なし見せて甲斐なし、我が友は汝よ、汝が友は我れよ、いざ共に行かんと抱きあげて、投げ出だす一對庭石の上、戛然のひゝき大笑

のひゞき、夜半の鐘聲とほく引きて、殘るものは片々の金光一輪の月。

闇櫻

(上)

隔ては中垣の建仁寺にゆづりて汲かはす庭井の水の交はりの底きよく深く軒端に咲く梅一木に兩家の春を見せて薫りも分ち合ふ中村園田と呼ぶ宿あり園田の主人は一昨年なくなりて相續は瓦之助廿二の若者何某學校の通學生とかや中村のかたには娘只一人男子もありたれど早世してのち一粒ものとて寵愛はいとゞ手のうちの玉かざしの花に吹かぬ風まゞいとひて願ふはあし田鶴の齡ながゝれとにや千代となづけし親心にぞ見ゆらんものよ栴檀の二葉三つ四つより行末さぞと世の人のほめものにせし姿の花は雨さそふ彌生の山ほころび初めしつぼみに眺めそはりて盛りはいつときまつの葉ごしの月いざよふといふも可愛らしき十六歳の高島田にかくるやさしきなまこ絞りくれなゐは園生に植てもかくれなきもの中村のお嬢さんとあらぬ人にまでうはさゝるる美人もうるさきものぞかしさても習慣こそは可笑しけれ北風の空にいかのぼりうならせて電信の柱邪魔くさかりし昔は我も昔と思へど瓦之助お千代に向ふときはありし雛遊びの心あらた

まらず改まりし姿かたち氣にとめんとせねばとまりもせず良さん千代ちやんと愛もなき談笑に果ては引き出す喧嘩の糸口もう來玉ふな何しに來んお前樣こそのいひじらけに見合さぬ顔もわづか二日目昨日は私が悪かりし此後はあのやうな我儘いひませぬ程におゆるし遊ばしてよとあどなくも詫びられて流石にをかしく解けではあられぬ春の氷イヤ僕こそが結局なり妹といふもの味おらねどあらば斯くまで愛らしきか笑顔ゆたかに袖ひかへて良さん昨夜は嬉しき夢を見たりお前樣が學校を卒業なされて何といふお役か知らず高帽子立派に黒ぬりの馬車にのりて西洋館へ入り給ふ處をといふ夢は逆夢ぞ馬車にでも挽かれはせぬかと大笑ひすれば美しき眉ひそめて氣になる事おつまやるよ今日の日曜はもう何處へもお出で遊ばすなと今の世の教育うけた身に似合しからぬ詞も眞實大事に思へばなり此方に隔てなければ彼方に遠慮もなくくれ竹のよのうきと云ふ事二人が中には葉末におく露ほども知らず笑ふて暮らす春の日もまだ風寒き二月半ば梅見て來んと夕暮や摩利支天の縁日に連ぬる袖も温かげに。良さんお約束のもの忘れては否よ。あゝ大丈夫忘れやしない併しコート何だッけねえ。あれだものを出がけにもあの位願つておいたのに。さう〳〵おぼえて居る八百屋お七の機關が見たいと云つたんだッけ。あら厭嘘ばつかり。それぢや丹波の國から生捕つた荒熊でございの方か。何うでもようございますよ妾はもう歸りますから。あやまつた〳〵今のはみんな嘘何うして中村の令嬢千代子君とも云はれる人がそんな御註文をなさらう筈がない良之助たしかに承はつて參つたものは。ようございます何も入りません。さう怒つてはこまる喧嘩しながら歩くと往來の人が笑ふぢやないか。だつてあなたが彼樣な事ばッかしおつしやるんだもの。それだからあやまつたと云ふぢやないかサア饒舌て居るうちに小間物屋のまへは通りこして仕舞つた。あらまあ何うしませうねえ未だ先にもありますか知ら。何うだかぞんじませんたつた今何も入らないと云つた人は何處に。もうそれは言ひッこなしと止めるも言ふも一筋道横町の方に植木は多しこちへと招けば走りよるぬり下駄の音カラコロリ琴ひく盲女は今の世の朝顔か露のひぬまのあはれ〳〵粟の水飴めしませとゆるく甘くいふ隣にあつ焼の鹽せんべいかたきをむねとしたるもをかし。千代ちやん鳥渡見玉へ右から二番目のを。はあの紅梅がいゝことねえと餘念なく眺め入りし後より。中村さんと唐突に背中たゝかれてオヤと振り返れば束髪の一群何と見てがおむつましいことゝ無遠慮の一言たれが花の唇をもれし言葉か跡は同音の笑ひ聲夜風に殘して走り行くを千代ちやんあれは何だ學校の御朋友か隨分亂暴な連中だなァとあきれて見送る良之介より低頭くお千代は赧然めり

（中）

昨日は何方に宿りつる心とてかはかなく動き初めては中々にえも止まらずあやしや迷ふぬば玉の闇色なき聲さへ身にしみて思ひ出づるに身もふるはれぬ其人戀しくなると共に耻かしくつゝましく恐ろしくかく言はゞ笑はれんかく振舞はゞ厭はれんと假初の應答さへはか〳〵しくは言ひも得せずひねる臺の塵よりぞ山ともつもる思ひの數々逢ひたし見たしなどあらはに云ひし昨日の心は淺かりける我が心我と咎むれば お隣 とも云はず良樣とも云はず言はねばこそくるしけれ涙しなくばと云ひけんから衣胸のあたりの燃ゆべく覺えて夜はすがらに眠られず思に勞れてとろ〳〵とすれば夢にも見ゆる其人の面影優しき手に背を撫でつゝ何を思ひ給ふぞとさしのぞかれ君樣ゆゑと口元まで現ゝの折の心 ならひに言ひも出でずしてうつぶけば聽し給ふは隔てがましし大方は見て知りぬ誰れゆゑの戀ぞうらやましと憎や知らず顏のかこち言餘の人戀ふるほどならば思ひに身の痩せもせじ御覽ぜよやとさし出す手を輕く押へてにこやかにさらば誰をと問はるゝに答へんとすれば曉の鐘枕にひゞきて覺むる外なき思ひ寐の夢鳥がねつらきはきぬ〳〵の空のみかは惜しかりし名殘に心地常ならず今朝は何とせしぞ顏色わろしと尋ぬる母はそ

の事さらに知るべきならねど面赧らむも心苦し壹は手すさびの針仕事にみだれその亂るゝ心緒ひとゝめて今は何事も思はじ思ひてなるべき戀かあらぬか言ひ出して爪はじきされなん恥かしさには再び合す顏もあらじ妹と思せばこそ隔てもなく愛し給ふなれ終のよるべと定めんにいかなる人をとか望み給ふらんそは又道理なり君樣が妻と呼ばれん人姿は天が下の美を盡して糸竹文藝備はりたるをこそならべて見たしと我すら思ふに御自身は猶なるべし及ぶまじきこと打出して年頃の中うとくもならば何とせんそれこそは悲しかるべきを思ふまじ思ふまじ他し意なく兄樣と親まんによも憎みはし給はじよそながらも優しきお詞きくばかりがせめてもぞといさぎよく斷念めながら聞かず顏の涙頬につたひて思案のより糸あとに戻りぬさりとては其おやさしきが恨みぞかし一向につらからばさてもやまんを忘られぬは我身の罪か人の科か思へば憎きは君樣なりお聲聞くもいや御姿見るもいや見れば聞けばまさる思ひによしなき胸をもこがすなる勿躰なけれど何事まれお腹立ちて足踏ふつになさらずは我れも更に參るまじ願ふもつらけれど火水ほど中わろくならばなか〳〵に心安かるべしよし今日よりはお目にもかゝらじ物もいはじお氣に障らばそれが本望ぞとて膝につきつめし尺ゆるめると共に隣の壁を其の人と聞けば決心ゆら〳〵として今までは何を思ひつる身ぞ逐ひたしの心一途になりぬさりながら心は心の

外に友もなくて良之助が目に映るもの何の色もあらず愛らしと思ふ外一點のにごりなければ我戀ふる人世にありとも知らず知らねば憂きを分ちもせず面白きこと面白げなる男心の淡泊なるにさしむかひては何事のいはるべき後の世つれなく我身うらめしく春はいづこぞ花どもいはで垣根の若草おもひにもえぬ

(下)

千代ちゃん今日は少し快い方かえと二枚折の屏風押し明けて枕もとへ坐る良之助に亂せし姿恥かしく起きかへらんとつく手もいたく痩せたり。寢て居なくではいけない何の病中に失禮も何もあつたものぢやないそれとも少し起きて見る氣なら僕に寄りかゝつて居るがいゝと抱き起せば居直つて。良さん學校が御試驗中だと申すではございませんか。アゝ左樣。それに妾の處へばつかし來て居らつしやつてよろしいんですか。そんな事まで氣にするには及ばない病氣の爲にわるいから。だつて何うもすみませんもの。すむのすまないのとそんなこと氣にするより一日も早くよくなつて呉れるがいゝ。御親切に難有うございますですが今度は所詮癒るまいと思ひます。又馬鹿なことを云ふよそんな弱い氣だから病氣がいつまでも癒りやしない君が心細い

事を云つて見たまへお父さんや阿母さんがどんなに心配するか知れません孝行な君にも似合はない。でも快くなる筈がありませんものと果敢なげに云ひて打ちまもる瞼に涙は溢れたり馬鹿な事をと口には云へどむづかしかるべしとは十指のさす所あはれや一日ばかりの程に痩せも痩せたり片靨愛らしかりし頬の肉いたく落ちて白きおもてはいとゞ透き通る程に散りかゝる幾筋の黒髪綠は元の綠ながら油けもなきいたゞしさよ我ならぬ人見るとても誰かは腸斷えざらん限りなき心のみだれ忍艸小紋のなへたる衣きて薄くれなゐのおごき帶前に結びたる姿今幾日見らるべきものぞ年頃日頃片時はなるゝ間なく睦み合ひし中になど底の心知れざりけん小き胸に今日までの物思ひはそも幾千ぞ昨日の夕暮お福が涙ながら語るを聞けば熱つよき時はたえず我名を呼びたりとか病の原はお前樣と云はるゝも道理なり知らざりし我恨めしくもうらさぬ君も恨めしく今朝見舞ひしとき痩せてゆるびし指輪ぬき取りてこれ紀念とも見給はゞ嬉しとて心細げに打笑みたる其心今少し早く知らば斯くまでには衰へさせじをと我罪恐ろしく打まもれば。良さん今朝の指輪はめて下さいましたかと云ふ聲の細さよ答へは胸にせまりて口にのぼらず無言にさし出す左の手を引き寄せて玄つとばかり眺めしが。私と思つて下さいと云ひもあへずはろ〳〵とこぼす涙其まゝ枕に俯伏しぬ。千代ちゃんひどく不快でもなつたのかお顏

藥を飲まして呉れないか何うした大變顔色がわるくなつて來たおばさん島渡と瓦之助が蹙に飽かされて次の間に祈念をこらせし母も水初穂取りに流し元へ立ちしお福もあわたゝしく枕元にあつまればお千代閉ぢたる目を開き。瓦さんは。瓦さんはお前の枕元にそら右の方においでなさるよ。阿母さん瓦さんにお歸りを願つて下さい。何故ですか僕が居ては不都合ですかえ居てもわるいことはあるまい。福やお前から瓦さんにお歸りを願つておくれ。貴嬢は何をおつしやいます今まであれ程お待遊ばしたのに又そんなことをお心持がおわるいのならお藥をめしあがれ阿母さまですか阿母さまはうしろに。こゝに居るよお千代や阿母さんだよいゝかえ解つたかえお父さんもお呼申したよサアしつかりして藥を一口おあがりエ胸がくるしいアゝさうだらう此まあ汗を福やいそいでお醫師様へお父さんそこに立つて居らつしやらないで何うかしてやつて下さい瓦さん島渡其の手拭を何だとエ瓦さんに失禮だがお歸り遊ばしていたゞきたいとあゝさう申すよ瓦さんおきゝの通ですからとあはれや母は身も狂するばかり娘は一語一語呼吸せまりて見る〳〵顔色蒼み行くは露の玉の緒今宵はよもと思ふに瓦之助起つべき心はさらにもなけれど臨終に迄も心づかひさせんことのいとをしくて屏風の外に二足ばかり絲より細き聲に瓦さんと呼び止められて何ぞと振返れば。お詫は明日。願わなき軒端の櫻ほろ〳〵ととぼ

れて夕やみの空鐘の音かなし

たゞ樂

（一）

をかしがるべき世を空蟬のと捨て物にして今歳十九年、天のなせる麗質、をしや埋木の春また ぬ身に、青柳いと子と名のみ聞ても姿しのばるゝ優しの人品 それも其筈昔をくれば系圖の卷 のこと長けれど、德川の流れ末つかた波まだ立たぬ江戸時代に、御用お側お取次と長銘うつて、 席を八萬騎の上座に占めし青柳右京が三世の孫、流轉の世に生れ合はせては、姐と呼ばれしと ともなけれど、面影みゆる長襦袢の縫もやう、母が形見か地赤の色の、褪て殘るもあはれ痛ま し、住む處は何方、むかし思へば忍が岡の名も悲しき上野のうしろ谷中のさとに形ばかりの枝 折門、春は立どまりて御覽ぜよ、片枝さし出す垣ごしの紅梅の色ゆかしと伸びあがれど、見ゆ るは萱ぶきの軒端ばかり、四邊はめぐらす花闘に秋は鳴かん蟲のいろ〳〵、天然の籠中に收め て月に聞く夜の心きゝたし 扨もみの虫の父はと問へば、月毎の十二日に供ふる茶湯の主が其 れ、母も同じく仲塩の上にとかや、孤獨の身は霜よけの無き花壇の菊か、添へ竹の後見ともい

ふべきは、大名の家老職背負てたちし用人の、何之進が形見の息松野雪三とて歳三十五六、親 ゆづりの忠魂みがきそへて、二代の奉仕たゆみなく、一町餘りなる我が家より、雪にも雨にも 朝夕二度の機嫌きゝ怠らぬ心殊勝なり、妻持たずやと勸むる人あれど、何の我がことと措き給 へ、それよりは嬢さまの上氣づかはしゝ、甘歳といふも今の間なるを、盛りすぎては花も甲斐な し、適應の聖君おむかへ申したきものと、一意專心主おもふ外なにも無し、主人大事の心にく らべて世上の人の浮薄輕佻、才ある人は多し能あるも少からず、容姿學藝すぐれたればとて、大 事の御一生を托すに足る人見渡したる世上に有りや無しや知れたものならず、幸福の生涯を送 り給ふ途、そも何とせば宜からんかと、案じにくれては寐ずに明す夜半もあり、嫁入時の娘も ちし母親の心なんのものかは、疵あらせじとの心配大方にはあらざりけり、雪三かくまで熱心 の聖えらみも、糸子は目の前すぐる雲とも思はず、良人持たんの念慮、何として夢さら〳〵あ らんともせず、樂みは春秋の園生の花、ならば蝴蝶になりて遊びたしと、取とめもなきこと言 ひて暮しぬ、さるほどに今年も空しく春くれて衣ほすてふ白妙の色に咲く垣根の卯の花、こゝ にも一つの玉川がと、泄水の流れ細き處に影をうつして、風なくても涼しき夏の夕暮 いと子 湯あがりの、逍遙に、打水のあと輕く庭下駄にふんで、裝とる片手は透し骨の塗柄の團扇に蚊

を拂ひつゝ、流れに臨んで立たる姿に、空の月恥らひてか不圖かゝる行く雲の末四邊俄に暗くなる折しも、誰が思ひにか比す螢一つ風にたゝよひて只眼の前、いと子及ぶまじと知りても只はあられず、ツト團扇を高くあぐればあなや螢は空遠く飛んで手元いかゝ綴びけん、團扇は卯の花垣越えて落ちぬ、こは何とせんと困じ果てゝ、垣根の際よりさしのぞけば、今しも雲足きれて新に照らし出す月の光りに、目と目見合して立たる人、何時の間に此處へは來て、今まで隱れてゞも居しものか、知らぬことゝて取亂せし姿見られしか、見られしに相違なしと、顏俄にあつくなりて、夢現うつゝ、細く清しき男の聲に、これは其方さまのにや返上せんお受取なされよと、垣ごしにさし出す我が團扇、取らんと見あぐれば恥かしゝ美少年、引かんとする團扇の先一寸押へて、思ひにもゆるは螢ばかりと思召すかと怪しの一言、暫時は糸子われか人か、有無の間に迷ひし心、本の心に還りし時は、卯の花垣に照る月高く澄んで、流れにうつる影我一人に本もぬ、さるにても彼の人は誰ならん、隣家は植木屋と聞たるが、思ひの外の人品かなと、其方を眺めて佇立めば、風に傳はる朗詠の聲いとゝ床しさの數を添へぬ、糸子世は果敢なきものと思ひ捨てゝ、盛りの身に紅白粉よそほはず、金釵玉帶なんの爲の飾り、入らぬことぞと顧みもせず、過ぎし心に恥かしや、我れ迷ひたりお姿今一度見まほしゝと伸び上がれば、

モシと控へらるゝ袂の先、誰れぞオ、松野か何として此處へは、否何時の間にと詞有哉無哉、

離滅裂

（二）

丸窓にうつる松のかげ、幾夜ながめて月も闇になるまゝにいと子の心その通り、打あけては問ひもならぬ、隣の人の素性聞たしと思ふほど、意地わろく誰れも告げぬのかそれとも知らぬのか、よりや植木屋の息子にてはあるまじく、さりとて誰れ住替りし噂も聞かねば外に人のある筈なし、不審さよの底の心は其人床しければなり、用もなき庭歩行にありし垣根の際、幾たびか顧みて思へば、さてもはした無きことなり、氏も知らず素性も知らず、心情も何も知れぬ人に戀ふとは、我れながら淺ましきことなり、定めなき世に定めなき人を願む、婦人の身はかなしと思ひ絶えて、松野が忠節の心より、我大事と思ふあまりに様々の苦勞心痛、大方ならぬ志は知るものから、それすら空ふく風と聞きて、耳にだに止めんとせざりし身が、何ぞや跡もかたも無き戀に磯の鮑の只一人もの思ふとは、心の問はんもうら恥かし、人知らぬ心の惱みに、昨日一昨日は雪三が訪問さへうるさくて、詞多くも交はさゞりしを、如何に聞て如何ばか

り案じやしけん、氣の毒のことしてけるよ、いで今日の日も暮れなんとするを、例の足音する頃なり、日頃くもりし胸の鏡すゝしき物語に晴らさばやとばかり、垣根の近邊たちはなれて、見返りもせず二三歩すゝめば遣水の流れおと清し、心こゝに定まつて思へば昨日の我れ、恍惚として何ゆゑに物おもひつる身ぞ、廣き園生は我が爲めに四季の色をたゝかはし、雅やかなる居間は我が爲めに起居の自由あり、風に鳴る軒ばの風鈴、露の志たゝる釣荵、いづれをかしからぬもなきを、何をくるしんでか、要なき胸は痛めけん、恐しさよと一人笑みして、竹樣のはしに足を休めぬ、晩風涼しく袂に通ひて、空に飛かふ蝙蝠のかげ二つ三つ、それすら漸く見えず成ゆく、片折戸を靜かに音なふは聞なれし聲音なり、いと子厨のかたに聲をかけて、玉よ雪三が參りたりと覺ゆるに、燈火とくと命令ながら、ツト立て門の方うち見やりしが、闇にも志るき白き手を擧げて、稚兒が母よぶやうに差まねぎつ、座敷にも入らではるかに待てば、松野は徐ろに歩みを進めて、早く竹樣のもとに一揖するを、糸子かるく受けて莞爾に、花莚の半を分けつゝ團扇を取つて風を送れば、恐れ多しと突く手慇懃なり、此ほどは御不快と承りしが、最早平日に復らせ給ひしか、お年齢には氣鬱の病ひの出るものと聞く、例の讀書は甚だわろし、大事の御身等閑におぼしめすなと、知らねばこそあれ忠實なる詞にうら耻かしく、面すこし打

赤めて、否とよ病氣はもう癒りたり、心配かけしが氣の毒ぞと我れ知らず出る詫の言葉に、何ごとの仰せぞ、主從の間に氣の毒などゝの御懸念ある筈なし、お前さまのおん身に御病氣その外何事ありても、それはみな愚生が罪なり、御兩親さまのお位牌さては愚生が亡父母に對して雪三何の申譯なければ、假令身にかへ命にかへても盡し參らする心なるを、よしなき御遠慮はお措き下されたしと恨み顔なり、これ程までに思ひくるゝ、其心知らぬにもあらぬを、この頃の不愛想我が心の悶ゆるまゝに、詞交はすが懶くて、病氣などゝありもせぬ僞りは何ゆゑに言ひけん、空おそろしさに身も打ふるへて、腹たちしならば雪三ゆるしてよ、隔つる心は微塵もなけれど、主の家來の昔は兎もあれ、世話にこそなれ恩も何もなき我身が、常日ごろ種々の苦勞をかける上にこの間中よりの病氣、それ程のことでもなかりしを何故か氣が鬱ぎて、心にもなき所置ありしかも忘れず、それがつひ氣の毒にて言ひたるなれど、心に障らば二度とは言はじ、汝に捨られて我れ何としてか世には立つべき、心稚ければ目にあまる事もあらん、腹立しきことも多ならんが、外に寄る邊のなき身なるを、妹とも娘とも斷念めて、敎へ立られなば嬉しきぞと、松野が膝ゆり動かして涙ぐめば、雪三身を退りて頭を下げつゝ、分にあまりし仰せお答への言葉もなし、お心細き御身なればこそ、愚生風情に御叮寧のお頼み、お前樣御存じ

はあるまじけれど、往昔の御身分おもひ出されてお痛はしゝ、我れ後見まゐらする程の器量なけれど、眞心ばかりは誰れ人にまれ劣ることかは、御心やすく思召せよ世にも軼れし聟君迎へ參らせて花々しきおん身にも今なり給はん、烏滸がましけれど雪三が生涯の望はお前さま御一身の御幸福ばかりと、言ひさして詞を切りつ糸子が面じつと瞻めぬ、糸子何心なく見返して、

「我は花々しき身にならんの願ひもなく、まして聟迎へんの嫁入りせんのと、世の人めかしき望み少しもなし、唯汝さへ見棄てずば、御身さへ厭はせ給はずば、我が生涯の幸福そかしとて嫣然とばかり打笑めば、松野じり〳〵と膝を進めて、嬢さまはそれほどまでに雪三を力と思召しか、それとも一時のお戯れか、御本心仰せ聞けられたしと問詰むるを、糸子ホヽと笑ひて松野が膝に輕く手を置きつ、「戯れかとは問ふたけも淺し」親とも兄ともなく大切に思ふものをと、無心に言へば忝なしと一言語尾ふるへて消えぬ

(三)

「洗ひ髪の束髪に薔薇の花の飾りもなき湯上りの浴衣でたち、素顔うつくしき夏の富士の領つき眼に殘りて、世は荻の葉に秋風ふけど盤を招きし塗柄の團扇」面影はなれぬ貴公子あり、駿河

臺の紅梅町に其名も薫る明治の功臣、竹村子爵との尊稱は千軍萬馬の裡にめぐみし、つぼみの花の開けるにや、それが次男に綠とて才識並び備はる美少年、今歳の夏の避暑には伊香保に行かんか磯部にせんか、知る人おほからんは佗しかるべし、牛ながら引入れる中川のやどり手近くして心安き所なからずやと、打うめかれしをお出入の藥師某なるもの承はりて、やつがれが谷中の茅屋せき入れし水の風流やかなるは無きものから、紅塵千丈の市中ならねば涼しきかげもすこしはあり、足を運び給はゝ忍ぶが岡の綠樹の朝つゆ、寐間着のまゝにも踏み給ふべし、螢名所の田畑も近かり、只天王寺の近き爲に、蛟はあまり少からねど、吹き拂ふに足る風十分なり、兎に角思ひ立たせ給へとて、紀の守が迷惑氣にも見えず誘ふにぞ、それ宜からんと て夏のさし入りより、離座敷を假住に三月ばかりの日を消しゝが、歸邸の今日の今も猶存る記憶のもの二つ、隣家に遲咲きの卯の花、都めづらしき垣根の雪の、涼しげなりしを思ひ出ると共に、月に見合はせし花の眉羞ぢて背けしえり足の美しさ、返す團扇に思ひを寄せし時憎からず打笑みし口元なんど、只眼の先に湧き來りて、我れ知らず思案に沈むことあり、さるにても何人の住居にや、人品の高尚かりしは、無下に賤しき種にはあるまじ、妻か娘かそれすらも聞き知らざりし口惜しさよ、宿の主は隣のことなり、問はゞ素性も知るべきものを、空しくはな

ど過しけん、さりとて今更問はんもうしろめたかるべしなんど、迷ひには智慧の鏡も曇りはてや、五里霧中に彷徨ひしが、さすがに定むる所ありけん、慈愛二となき母君に、一日志かく〳〵と打明けられぬ、さはいへど人妻ならば及ぶまじきことなり確めて後斷念せんのみ、浮たる戀に心を盡くす輕卒しさよとも思さんなれど、父祖傳來の奮交ありとて、其人の心見ゆるものならず、家格に隨ひ門地を尊び擇に擇て取る虫喰栗も世には多かり、藻屑に埋もるゝ美玉又なかあはれこの願ひ許容ありて、彼女が素性問ひ定め給はりたし、正しく尺に直なる物計り難く、迷ひし眼に邪正は分け難し、鑑定は偏に御眼鏡に任さんのみと、恥たる色もなく述べらるゝに、母君一度は惘れもしつ驚きもせしものゝ、斯くまで熱心の極まりには、何事を惹出でられんも知るべからず、打明けられしだけ殊勝なり、萬は母が胸にあり任せたまへと子故の闇に、ある夕暮の墓參の戻り、植木屋許くるまを寄せて、入りもせぬ鉢ものゝ買上げ、扨は園内の手入れを賞めなどして、逍遙の端に若し其人見ゆるやと、垣根の隣さしのぞけど、園生廣くして家遠く、萱ぶきの軒端半ば掩ふ大樹の松の滴る如き綠の色の目に立て見ゆるばかり、聲きくよすがも有らざりければ、離亭に澁茶すゝりながらそれとなき物語、この四隣はいづれも閑靜にて、手廣き園生羨ましきものなり、此隣りは誰樣の御別莊ぞ、松ばかりにても見惚るるやうなりとほゝ笑めば、いや別莊にはあらず本宅にておはすなりと答ふ、これを話の端緒として、見惚れ給ふは松ばかりならず、美くしき御主人公なりといふ、然ればよなと思ひながら、故らに知らず顏粧ひつゝ、主は御婦人なるにや、扨は何某殿の未亡人とか、さらずは嬖妾なんどいふ人か、別して與へられたる邸宅かと問へば、いや然らず昔をいはゞ三千石の末流なりといふ、さらば旗下の娘御にや、親御などもおはさぬか、獨住みとは痛はしきことなりと、早くも其の人ふびんになりぬ、此處の主も話好にや咳勿躰らしくして長々と物語り出でぬ、祖父なりし人が將軍家の覺え淺からざりしこと、今一足にて諸侯の列にも加へ給ふべかりしを不幸短命にして病沒せしとか、或は其頃の威勢は素晴しきものにて、今の華族何として足下へも寄らるゝものでなしと、口滑らして遽しく唇噛むをかし、それに較べて今の活計は、火の消えしも同じことなり、あれほどの地邸に公債も何ほどかは持ちたまふならんが、それも嬢さまが身じんまくだけ漸々なるべしと、我れ入立つて見しやうな話なり、老爺は何として其樣に委しく知るぞと問へば、いややつがれは皆目知る筈なけれど、一昨年歿亡りし嬢さまの乳母が、常日頃遊びに來ての話なりといふ、お歳は十九なれどまだ〳〵十六七としか見えず、それから思へば松野どのは大層に老けられたりと我一人呑込顏、その松野殿とかは娘御の何ぞと問はれ

て、成程々々御存じは無き筈なりとて、更に松野の爲に腕志ばらく働かせぬ、されば暮やすき秋日の短時間に、糸子主從が動靜のあらましは、早くも竹村夫人が胸中に宿りける

（四）

心は變化するものなり、雪三が往昔の心裏を覗はゝ、糸子に對する觀念の潔白なること、其名に呼ぶ雪はものかは、主人大事の一筋道、振むく方もなかりしものゝ、寄る邊なき御身憐れやとの情漸う長じては、我れ一人をば天が下の頼もし人にして、一にも松野二にも松野と、隔てなく遠慮なく甘へもしつすねもしつ、睦れよる心愛らしさよと思ひしが、そも〳〵流れに塵一つ浮ぶ初めにて、此心退へども去らず、澄まさんと思ふほど搔きにごりて、眞如の月の影は何處、朦々朧々の淵ふかく沈みて、目に遮るは唯いと子が花の顏のみなり。かゝりけれども猶一片貞忠の心は雲ともならず霞とも消えず、流石に顧みる其折々は、慚愧の汗背に流れて悔悟の念胸を刺しつゝ、こは魔神にや魅られけん、有るまじき心なり、我れに邪心なきものと思せばこそ、幼稚の君を托し給ひて、心やすく瞑目し給ひけれ、亡主に何の面目かあらん、位牌の手前もさることなり、いでや一對の鴛君選み參らせて、今世の主君にも來世の主君にも、忠

節のほど顯したし、然かはあれど氣遣はしきは言葉巧みに誠少きが今の世の常と聞く、誰人か心より我が敬する主君の半身となりて、生涯の保護せらるべきにや、おもへばいとも覺束なきことなり、我れに主從の關係なくば、青柳いと子の手を取りて、一生を偕にせんもの雪三の外に又とあるまじ、さりながらこは叶ふべきことならず、假にもかゝる心を持たんは恐ろし、いで今よりは虛心平氣の昔に返りて何事をも思ふまじと、覺悟いさましく胸すゞしくなるは、青柳家の門踏まぬ時なり、糸子が愛らしき笑顏に喜び迎へて、やさしき言葉かけらるゝ時には、道に背かば背け世の嗤笑にならばなれ、君故捨つる名志んぞ惜しからず、今日は思ふ心ならさん、明日は胸の中うち明けんかと、雪直なる人ほど戀は苦し、斯るおもひの幾筋を撚り合はされし身なるものから、糸子が心は春の柳、そむかず靡かずなよ〳〵として、無邪氣の笑顏いつも愛らしく、雪三よ菊塢の秋草盛りなりとか聞くを、此程過ぐさず伴ひては給はらずやと搔口說きしに、何の違背のある筈なく、お前さま御都合にて何時にてもお供すべしと、松野は答へぬ、秋雨はれて後一日今日はと俄に思ひ立て、糸子例の飾りなき扮裝に身支度はやく終りて、松野が來る間まち遠しく雪三がもと我れより誘ひぬ、と見れば玄關に見馴れぬ履一足あり、客來にやあらん折わろかりと歩を回せしが、さりとも此處まで來しものを此まゝ歸るも無益しゝ

と、庭よりまはりて縁に上れば、客間めきたる處に話し聲す、やをら次の間にかいひそまりて聞くともなしに耳たつれば、客はそも誰れなるにや、青柳といふこゑいと子と呼ぶ聲折々に交りぬ、さても何事を談ずるにや、我れにも關係ありげなるをと、襖に寄りて靜かに聽けば、斷れつ續きつ物語の意味明瞭ならねど、大方は知れ渡りぬ、聞く人ありとは知らぬものゝ詞あまりは高からず、松野に向ひて坐したるは竹村子爵が家從の某、主命に依りて糸子縁談の申込なるべし、其時雪三決然とせし聲音にて、折角の御懇望ながら糸子さま御儀他家へ嫁したまふ御身ならねばお心承はるまでもなし、雪三斷然お斷り申す御歸邸のうへ御前躰よろしく仰せ上げられたしと言放てば、左樣仰せあらんとは存ぜしなり、然らば聟君としては迎へさせ給はずやといふ、否とよ兎に角に御身分柄つり合はず、末のほど覺束なければと言ひかゝるを打けして、そは御懸念が深すぎずや、釣合ふとつり合ぬは御心の上のことなり、一應いと子さまの御心中お伺ひ下されたし、其お答へ承はらずば歸邸いたし難し平にお伺ひありたしと押返せば、それ程に仰せらるゝを包むも甲斐なし、實の事申上げん、糸子さまには最早定まる人おはすなりそれ故のお斷りぞと莞爾と笑めば、家從は少し身を進ませて、始めて承はりたり何方への御縁組にや若しからずば仰せきけられたしと雪三の面屹と見れば、糸子も間の襖の際にぴつ

たりと身を寄せつあやしのことよと耳そばだつれば、松野例に似ぬ高調子に然らば聞かし參らせん御歸邸のうへ御主君、殊に縁君にお傳へ願ひたし、糸子が契約の夫人とは、誰れにもあらず、松野雪三即ち斯くいふ愚生

（五）

戀は一方に強く一方に弱きものと聞くは偽り孰れすてられぬ花紅葉の色はなけれど松野の心根あはれなり、さりとて竹村の君が優しき姿一度は思ひ絶えもあたれ、淺からぬ御志の忝なさよ、斯く思ふは我れに定操の無ければにや、脆き情のやる方もなし、扨も松野が今日の詞、おどろきしは我のみならず竹村のお使者もいかばかりなりけん、立歸りて斯々なりしとも申さんに、何は措きて御さげすみ恥かしゝ、陸まじかりしも道理、主從とは名のみなりしならんなど、彼の君に思はれ奉らん口惜しさよ、これも誰ゆゑ雪三故なり、松野が邪心一つゆゑぞ、然はあれどもお使者歸路につき給ひし後、身を投げ出しての詞今も忘れ難し、御身は竹村をゆかしと思すか、縁どのとやら甚はしく思ひ給ふか、さらばいかばかり雪三憎しと思すなるべし、さりながら往日の御詞は偽りなりしか、汝さへに見捨ずば我が生涯の幸福ぞと、忝けなき仰せ

承はりてよりいとゞ狂ふ心留がたく、口にするは今日始めてなれど、盡したる心はおのづから御覽じあるべし、姿むくつけく器量世に劣りしとて厭はせ給はゞ、我れも男のはしなり、きかれ參らせずとて徒やはある、よその眺めの妬ましきよりはと、花に吹く嵐のおそろしき心もて我れ知らず起らんにや、許させたまへとて戀なればこそ忠義に鍛へし、六尺の大男が身をふるはせて打泣し、姿おもへば扨も罪ふかし、六歳のむかし、我れ兩親に後れし以來、伸びし背丈は誰の庇護かは、幼稚の折の心ならひに、愼みもなく馴れまつはりて、鐵石の心うごかせしは、搆へて松野の咎ならず我心のいたらねばなり、今我れ松野を捨てゝ竹村の君まれ誰れにまれ、寄る邊を其處と定めなばあはれや雪三は身も狂すべし、我幸福を求むるとて可惜忠義の身世の嗤笑にさせらるゝことかは、さりとてこれにも從ひがたきを、何として何とせば松野が心の迷ひも覺め、竹村の君へ我が潔白をも表されん、いづれにまれ憎き人一人あらば、斯くまで胸はなやまじを、果敢なの身やどうち仰げば空に澄む月影きよし、肱を寄せたる丸窓のもとに何の咽きぞ風に鳴る荻の友ずり、我が蔭言かあはれ耻かし、見渡す花園は夜の錦を月にはこりて、轉ぶ白玉の露うるはしゝ、思へば誰れも消ゆる世なるを、我身一つなき物にせば、いづくに何の障りかあるべき、我れ浮世の厭はしきは今はじめたることならず、捨てんは豫てよりの願ひ

なり、歎くべきことならずと嫣然と笑みて靜かに取出す料紙硯、墨すり流して筆先あらためつゝ、書きながす文誰々が手に落ちて明日は紀念と見ん名殘の名殘

五月雨

(一)

池に咲く菖蒲かきつばたの鏡に映る花二本ゆかりの色も薄むらさきか濃むらさきならぬ白元結きつて放せし文金の高髷も好みは同じ丈長の櫻もやう淡泊として色を含む姿に高下なく心に隔てなく墻にせめぐ同胞はづかしきまで思へば思はるゝ水と魚の君さまなくば我れ何とせんイヤ汝こそは大事なれと頼みにしつ頼まれつ松の梢の藤の花房かゝる主從の中またとありや梨本何某といふ富家の娘に優子と呼ばるゝ容貌よし色白の細おもてにして眉は霞の遠山がた花といはばと譬喩を引くもこちたけれど二月ばかりの薄紅梅あは雪といふか何か知らねど濃からぬほどの白粉に玉虫いろの口紅を品よしと喜ぶ人ありけり十九といへど深窓の育ちは室咲きも同じこと世の風知らねど松風の響きは通ふ爪琴のしらべに長き春日を短しと暮らす心は如何ばかり長閑けかるらん頃は落花の三月盡ちればぞ誘ふ朝あらしに庭は吹雪のしろ妙も流石に袖は寒からで蝶の羽うらのうら〳〵どせし雨あがり鰐椽先に飼猫のたま輕く抱きて首玉の絞り放し結ひ換

ふるものは侍女のお八重とて歳は優子に一つ劣れど劣らず負けぬ愛敬の片靨誰れゆゑ寄する目元のしほの莞爾として手を放しつ不圖見返りて眉を寄せしが又殊更にホゝと笑つて嬢さま一寸御覽遊ばせ此まあ襟子の可笑しいことよと面白げに誘はれて何ぞとばかり立出づる優子お八重は何故に其襟なことが可笑しいぞ私には何ともなきをと惱ましげにて子猫のぢやれるは見もやらで庭を眺めて茫然たり嬢さま今日もお不快う御坐いますか否左襟もなけれど何うも此處がと押して見する胸の中には何がありやおもふ思ひを知られじとか詞をかへて八重やお前に問ふことがある春につきての花鳥で較べて見て何が好きぞ扨も變つたお尋ねそれは心々でも御坐いませうが歸雁が憐れに存じられますさりとては異なことぞ都の春を見捨てゝ行く情なしがお前は好きか憐れといへば深山がくれの花の心が嘸かしと察しられる世にも知られず人にも知られず咲て散るが本意であらうか同じ嵐に誘はれても思ふ人の宿に咲きて思ふ人に思はれたら散るとも恨みはあるまいもの谷間の水の便りがなくば流れて知られる頼みもなしマアどの位悲しからうと入らぬ事ながら苦勞ぞかしとて流石に笑へばテモ嬢さまは花の心を能く御存じ私が歸雁を好きと云ふは我身ながら何故か知らねど花の山の曉月夜さては春雨の夜半の床に啼て過ぐる聲の別れがえみ〳〵と身にしみて悲しいやうな淋しいやうな又來る秋の契りを思へば頼母しいや

うにもあり故郷へ歸るといふからして亡き親の事が思はれますと打しをるればそれは道理わたしでさへも乳母の事は少しも忘れず今も居たなら甘へるものをと何ぞにつけて戀しければ子の身では如何ばかり心ぼそくも悲しくもあらうなれど及ばずながら私は力になる心姉と思ふてよと頼むは可笑しけれど歳上なれば其約束ぞいつも〳〵云ふことながら私は眞實の同胞と思ひますと慰められて嬉しげに御縁あればこそ親どもばかりか私までめぐり廻つて又の御恩海とも山とも口には何うも申されねどお前さまのお優しさは身にしみて忘れませぬ勿躰なけれどお主樣といふ遠慮もなく新參の身のほども忘れて言ひたいまゝの我儘ばかり兩親の傍なればとて此上は御座いませぬさりながら口惜しきは性來の鈍きゆゑ到底も御相談の相手にはなされて下さる筈もなし別ものに遊ばすと知りながらお恨みも申されぬ身の不束がうらめしう存じますとホロリとこぼす膝の露を優子訝しげに打まもりて八重は何が氣に障つてか思ひもよらぬ怨み言つもりて見よかし何の隔てゝ隱しだてをするものぞ母さまにさへ申さぬこともつひに話さぬ時はなきを今日に限つて其やうな事いはれる覺えは何もなけれどまあ何と思ふてぞといふ顔じつと打仰ぎてそれ〳〵それが矢張お隔て何故其やうにお隱し遊ばす兄弟と仰しやつたはお僞りか、僞りではなけれど隱すとは何を、デハ私から申しませう深山がくれの花のお心と言ひさして莞爾

とすれば、アレ笑ふては言はぬぞよ

（二）

思ひ入る路は一筋なれど夏引きの手引きの糸の亂れぐるしきは戀なるかや優子もとより才はたけならず柔和しけれど利發にて物の道理あきらかに辨へながら闇きは晴れぬ胸の雲にうつ〳〵として日を暮らすをお八重しかぞと見て取りぬ我れも思ひのなき身ならねば他人ごとなりとも悲しきを假初ならぬ三世の緣おなじ乳房の寄りし身なり山川遠く隔たりし故郷に在りし其の日さへ東の方に足な向けそ受けし御恩は斯々云々母の世にては送りもあへぬに和女わすれてなるまいぞと衆もの語に言ひ聞かされ幼心のそも〳〵より胸に刻みしお主の事ましてや續く不仕合に寄る方もなき浮草の我れ孤の流浪の身の力と頼むは外になし女子だてらに心太く都會の地へと志ざし其目的には譯もあれど思ひはいすかのはしも無く尋ぬる人を引かへて尋ねぬならねど身に恥づれば我れとは訪はれぬお主のもとへ又見出されて二度の恩あるが中にも取分けて嬢さまの御慈愛は山の中の嶺たかきが上も高く海の中の沖深きが上も深しお可愛や誰れ人を彼のやうに思しめして御苦勞なき身の御苦勞やら我身新參の勝手も知らずお手もと用のみ勤めれば

出入のお人多くも見知らず想像には此人かと見ゆるもなけれど好みは人の心々何がお氣に染みしやら言はで思ふは山吹の下ゆく水のわき返りて胸ぐるしさも嘸なるべしお愼み深きはさることなれど御病氣にでも若ならば取かへしのなるべきならず主は誰人えぞ知らねど此戀なんとしても叶へ參らせたし嬢さまほどの御身ならば世界に苦もなく憂ひもなく御心安くあるべき筈をさりとては又苦の世の中やと我身に比べて可憐がり心の限り慰められ優子眞實たのもしく深くぞ染めし初花ごろも色には出でじとつゝみしは和女への隔心ならず有やうは打明けてと幾たびも口元までは出しものゝ恥かしさにツイ言ひそゝくれぬ和女はまだ昨日今日とて見參らせし事も無きならんが婢女どもは蔭口にお名は呼ばずて光氏さまといふとかやお姿は察せよかしそれに引かれてゞはなけれど彼の人は父さま無二の御懇意とて恥かしき手前に薄茶一服參らせ初しが中々の物思ひにて袱紗さばきのしづ心なく成りぬるなり扨もお姿に似ぬ物がたき御氣象とや今の世の若者に珍らしとて父樣のお褒め遊ばす毎に我ことならねど面赤みて其座にも得堪へぬど羞はしさの數は倍りぬさりながら和女にすら言ふは始めて言はぬ心は描かぬ畫もおなじ事御覽じ知る筈もあらねば若やの頼みも無きぞかし笑はるゝか知らねども思ひそめし最初より此願ひ叶はずば一生一人で過ぐす心愛きに送る月日のほどに思ひこがれて死ねばよし命が若しも無

情くて如何に美はしき夫人むかへ給ひぬとも愛らしき兒生れ給ふとも聞く身のつらさが思はるるぞとてほろ〳〵と打泣けばお八重かなしく身を寄せてお前さまは何故そのやうに御心よわい事仰せられるぞ八重は素より愚鈍なり談してからが甲斐なしと思召しでか馴れぬ御使ひも一心は一心彼方さまどのやうな御情ならずであらうとも貫かぬといふ事あるやうなし何ともしてお望み屹度叶へさせますものを御内端すぎてのお物思ひくよ〳〵ばかりあそばせばこそ昨日今日は御顏色もわるし御病ひでも遊ばしたら御兩親さまは更なる事なり申すも慮外ながら妹と思ふぞとての御慈愛に身は姉上を儲けし心お前さま大切なほどお案じ申さずには居りませぬを忌はしや何ごとぞ一生一人で世を送るの死んで思ひを脫れたしのと突きつめた御心に必らずおなり遊ばすなと宥める身さへ眼はうるみぬ、堪忍せよかし和女にまで苦をかけてあらぬ思ひに心を盡くすが我身ながら口惜しきなりさりとても彼の人の事斷念めがたきは何ゆゑぞ言はで止まんの決心なりしが親切な詞きくにつけて日頃の愼みもなくなりぬと漸々せまりくる娘氣に涙に咽びて稍ありしが、八重さぞ打つけなと呆れもせんが一生の願ひぞよ此心傳へては給はるまじや嬉しきお返事聞きたしとは努々思はねど誰れ故みぢかき命ぞとも知られて果てなば本望ぞかしと打惑るれば、又しても其樣なこと御前さま此れ〳〵とお傳へ申さば好きお返事は知れた事な

りもうくよ〳〵とは思しめすな、いや〳〵それは八重が知らねばぞ杉原さまは其やうな柔弱な放埒なお人で無ければ申出してからが心配なり不埒者いたづら者とお怒りにならば何とせん、それは餘りのお取越苦勞岩木の中にも思ひのなきかは無情き仰せのある筈なし扨も御戀人は杉原さまとや、お名は何とぞ、三郎さまと申すなり此頃來給ひしは和女が丁度不在の時よ一足違ひに御歸宅ゆゑ知らぬのは道理と云ひかけてお八重の顏さしのぞき此願ひ若し叶はゞ生涯の大恩ぞかし尊うは言はぬ心は是れよと合はす手に嬉しき色はあらはれたり

（三）

雲雀のあがる麥生なゝめに見渡しながら岡のすみれを摘あらそひし昔は何の苦か有りし野川の岸に菊の花手折るとて流れ一筋かち渡りし給ふ時我はるかに歳下の身のこましやくれにも君さまの袂ぬれるとて袖襟かけて參らせしを如何に人にも笑はれけん思へば其頃が羨まし君さま東京へ歸り給ひし後さま〳〵綴く不仕合に身代は亂離荒廢あるが上に二親引つゞきての病死といひ憂きこと重なる神無月袖にもかゝる時雨空に心のしめる我れを捉へて郡長の悴づらが些少の恩眞にかけての無理難題やり返して遣りたけれど女子の身は左樣もならず柳にうけるを宜きことにして金やらん妾になれ行々は妻にもせんと口惜しき事の限り聞くにつけても君さまのことなつかしく或る夜にまぎれて國を出でつ漸う東京へは着きしものゝ當處なければ御行方さらに知るよしなく樣々の憂き難難も御目にかゝる折の褒められ種にと且は心に樂しみつゝ賤しき仕業も身は清し行ひさへ汚れずばと都乙女の錦の中へ木綿衣服に菅笠脚袢はづかしや女子の身不似合の菓物賣りも偏に生計の爲のみならず便りもがな尋ねたやの一心なりしが繰しあやしく引く方ありて不圖呼び入れられし黑塗塀お勝手もとに商ひせし時後にて聞けば御奢古がへりとや嬢さまの召したる車勢ひよく御門内へ引入るゝとて出んでとする我と行違ひしが何に觸れけん我がさしたる櫛車の前にはたと落ちしを知らず曳きしかばなど堪るべき微塵になりて恨みを地に殘しぬ嬢さま御覽じつけて氣の毒がり給ひ此そこねたるは我身に取らせよ代りには新らしきのを取らすべしとの給ひしかど素より落せしは我が粗忽なり曳かれしも道理損ねしとて恨みもあらず況てや代りをとの望みもなし是れは亡母が紀念のなれば他人に奉るべき物ならずとて拾ひ集めて懷にせしをいとゞしく御ふびんがり扨は親も無き人か憐れのことや先庭口より我が部屋まで來よ身の上も聞きたしとて連れ給ひぬ今こそ目馴れたる御座敷の結搆お庭のたゝずまひ華族さまにやと疑ひしは一に嬢さまの御舉止にも依りしものか其お美くしき嬢さま御親切にも

女子同志は互ひそとて御優しき御詞我もしきりに嬉しくて尋ぬる人ありとこそ明さゝりしが種〳〵との物語に和女の母、御は斯〳〵の人ならずやと思ひ寄らぬ御問ひ寔に然かぞ何として御存じと云へば忘れてなるべきか和女と我れとは姉妹ぞかし我れは梨本の優なるをとて手を取りての御喜び扨は母が乳を參らせたる君なりしか御目にかゝりし嬉しさに添へて落ぶれし身はづかしと打泣きしに榮枯は時なるものを歎くことかは萬は我れに委せよかし悪きやうには爲すまじければ今日より此處に身を落つけずや母様には我れ願はんとて放し給はず奥様も又くれ〳〵の仰せに其まゝの御奉公都會なれぬ身とて何ごとも不束なるを彼は彼此は此と陰になりてのお指圖に古參の婢女も侮らず昨日の我れ忘れしやうな樂な身になりたるは嬢さまの御情一つなり此御恩何として送るべき彼の君さまに環會はゝ二人共々心を合せてお話し相手に成るべきをと何につけても偲ばるゝは又彼の人の事なりしが思ひきや嬢さま昨日今日のお物思ひ命にかけてお慕ひなさるゝ主はと問へば杉原三郎どのとや三輪の山本走るしは無けれど尋ぬる人ぞと知る悲しさ御存じ無ければこそ召使ひの我れふし拜みてのお頼み嬢さま可憐やと思はぬならねど彼の人何として取持たるべき受合ひては立ちしものゝ此文には何の文言どういふ風に書きてあるにや表書きの常磐木のきみまゐるとは無情き人へといふ事か岩間の清水と心細げには書き給へど扨も

扨も御手のうるはしさお姿は申すも更なり御心だてと云ひ御學問と云ひ缺け處なき御方さまに思はれて嫌とはよもや仰せられまじ我れ深山育ちの身としてくらべ物になる心はなけれど今日までの憂き苦勞は何ゆゑぞ逢はんと思ふそれ一つに萬の願ひをかけ置きしに今目の前に逢ふ日は來ても逢ふが悲しき事儀に成りぬ嬢さまの御恩は泰山の高きも物の數かはよしや蒼海に珠を捜れと仰せらるゝともそれに違背はすまじけれど我が戀人取持たんこと何う諦めてもなる事ならず御恩は御恩これは是なり寧お文取次いたる躰にして此儘になすべきかいや〳〵それにては道がたゝず實は斯〳〵の中なりとて打明けなば嬢さま御得心の行くべきか我こそはそれで宜けれどあれほどまでに思召し入れたもの然らばと云ひてあきらめのつく筈なし我身の願ひが叶へばとて現在お心知りながらそれも辛しこれも憂しと迷ひに心も夕暮の空お八重つく〳〵ながむれば明日も晴日か西の方のみ紅の雲たな引きぬ

(四)

男も女も法師も童も容貌よきが好きぞとは誰れ色好みの言の葉なりけん杉原三郎と呼ばるゝ人面ざし清らかにけにくからず誰が目に見ても美男ぞと見ゆればこそは罪つくりなれ我故に人二

人まで同じ思ひに苦むともいざやまら桎の若葉の露風に散る夕暮の散歩がてら梨本の娘病氣にて別莊に出養生とや見舞てやらんとて柴の戸音づれしにお八重初めて對面したり逢はゝいはんの千言百言うさも辛さも胸に呑みて思ども言はず義理とも言はず沸かへる涙も人事にしておいとしや孃さま此程よりのお煩ひのもとはと云はゝ何ゆゑならず温和しき御性質とて口へとては出し給はぬほど猶さらに御いとほしお心は中々我が言ふやうなものにはあらず此お文御覽ぜばお分りになるべけれどお前樣つれなきお返事若し遊ばされなばあのまゝに居給ふまじき御決心ぞと見る目は如何につらからぬことか久し振にて御目にかゝりし我身の願ひこれ一つなり叶へさせ給はゝ嬉しかるべきをとて取次ぐ文の思ひ切りても涙ほろ〳〵膝に落ちぬ義理といふもの世になかりせば言ひたきことといと多し別れしよりの辛苦は如何に或時はあらぬ人に迫られて身の遁れぬばの無かりし時操はおもし命は鵞毛の雪の夜に刃手に取りしこともありけり或時はお行方たづね詫て恨みは長し大河の水に沈む覺悟も極めしかど引かれし後髪の千筋にはあらで一筋に逢ふといふ日を頼みにして今日までも過せし身なりと言ひたけれど孃さまの戀も我が戀にも淺さ深さのあるべきにあらず我れまだ其事を口にせねば入鄙御存じなきこそよけれ御恩がへしには望み叶へさせまして悅び給ふを見るが樂みぞと我れを捨てゝの周旋なるを仇しごとは思ふ

まじさるにても君樣のお心氣づかはしと仰ぎ見れば端なくも男はじつと瞰め居たりハッと俯く櫨紅葉のかげ美はしき秋の山里に萱がりして遊びし昔は蝶々鼠の夢とたちて姿やさしき都風たれに劣らん色なるかは愁を含めど愛らしき雨の撫子ゑをれて床し三郎の心何と知らねど優子の文を手にとりつ淺からぬお心辱けなしとて三郎喜びしと傳へ給へ外ならぬ人の取次殊更に嬉しければ此文は賜はりて歸宅すべしとて懷中に押いれつゝ又こそと坐を立つに扨は孃さまの心酌とり給ひてかと嬉しきにも心ぼそく立上る男の顏そと窺ひてほろりとこぼす涙を隱し孃さまにも無お喜び我身とても其通りなり御返事屹度まちますと云へば點頭ながら立出づる廻り椽樓端の橘袖に薰りていつしか月に中垣のほとり吹のぼる若竹の葉風さら〳〵として初ほとゝぎす待つべき夜なりとやをら降立つ後姿見送るものはお八重のみならず優子も部屋の障子細目に明けて言はれぬ心々を三郎一人すゝしげに行々吟ずる詩きゝたし

（五）

便りまつ間の一日二日嬉しきやうな氣づかひな八重に遠慮は入らぬものゝ又言ひ出すかと思はるゝも恥かしく云つとてとらゆる返事の安否もしやと思へばもしやになるなり八重は大丈夫と受

合へどそれは氣やすめの詞なるべしあの文とても御受取になりしやならずや其場で其まゝ御突戻しになりたるを我れに力落させまじとて八重の繕ひて居るにはあらずやいや〳〵八重として其襟の事ある筈なし人を疑ふは罪ふかき事なり一日二日待給へ好き御返事の參るは定ぞと言ひしに違ひは無かるべし若しさうならば何とせん八重は上もなき恩人なれば何事なりとも氣に入ることとして悅ばせたし歳は下なれど分別ある人とて言寡なゝれば願ひはあるや望みはなしや知れ難きを何とせん扨も人妻となりての心得は娘の時とは異なるものとか御氣に入らばよけれど若し飽かれなば悲しき事よ先づそれよりも覺束なきはあの文のお返事なり御覽にはなりたりとも其まゝ押さろめ給ひしやら却つて御機嫌をそこねもして愛想づかしの種にもならば言はぬにまさる辛さぞかし君さまこそ無情しとも恩ふ心に二つは無し不孝か知らねど父様母さま何と仰せらるゝとも他處ほかの誰れ良人に持つべき八重は一生良人は持たずと云ふものから我が身とは自から異なりて係はることなく心安かるべし羨ましやと羨まるゝ我をば知らで吐息をもらしぬお八重はつく〳〵有し日の事を思ふに男心の頼みがたさよ我れ周旋する身として事調ふは嬉しけれど餞子どのゝ心よく見えたり三郎喜びしと傳へ給へとは餘りといへば昔を忘れ給ひしお詞なりとおもふは我身の妬みにやお主様ゆゑには身を殺して忠義を盡くす人さへあるを我一人

にて愛きをきのばゝ何處も事なく治まるべきなり何氣なき嬢さまが八重や八重やと話相手に遊ばすを御恨み申すは罪のほども恐ろしゝ何ごとも殘さず忘れてお主さまこそ二代の御恩なれ杉原三郎といふお人もとよりのお知人にもあらず況てや契りし事も何もなし昨日今日逢ひしばかり併かもお主さまの戀人に未練のつながる筈はなし御縁首尾よく整へて睦まじく暮らし給ふを見るが切めての樂みなり我れは望みとて無き身なれば生涯この家に御奉公して御二方さま朝夕の御世話さては孩見さま生れ給ひての御抱き守り何にもあれ心を責めて仕へんかそれは何としてもなる事ならず兎ても角ても愛き世なれば人訪はぬ深山の奥にかき籠りて松風に耳を澄まさば宜かるべけれどそれすら彼の人見棄てゝは入り難かるべしとてつく〳〵と打歎けど人に見すべき涙ならねば作り笑顔の片頬さびしく物案じの主慰めながら我れ先づ亂るゝ尊の戀はくるしきものなるにや成るとは見えて覺束なき人の便りをまつとは云はず杉原さまはお廿四とやお歳よりは老けて見え給ふなり和女は何と思ふぞとて臙氣なこと言ふて見る心や流石に通じけんお八重一日にこやかに嬢さまお喜び遊ばす事あり當てゝ御覽じろと久し振の戯れ言さりとは餘りに廣すぎて取處が分らぬと微笑めばさらば端を少し聞し參らせんお前さま何より何よりお嬉しと思召す事あるべしそれなりとて容易くは言ひもせずそれぞとは知れど猶も知らぬ顔ゝ八重が

常に似ぬことよ先づ言ふて聞かしても宜さゝうなと打怨ずれば其やうにおいそぎなされますなと打笑ひながら彼の君より御返事が參りしなりこれがお嬉しからぬ事かと呵かれて耳の根くわつと熱くなりつ胸とゝろかれて噛む袖の下に密と置く藻しほぐさ俄には手にも取らぬをお八重察して侑めつゝ取まかなひて封を切らすに文にはあらで一枚の短冊なりけり兩女ひとしく見る雲形

茂りあふわか葉にくらき迷ひかな
みるべきものを空の月かげ

意味の存する所いづこぞや茫として闇きわか葉のかげいとゞ迷ひは茂り合ふばかり晴るゝよしなき空の月の心々に判じて見れど何れ眞意と得ぞわき難く喜ぶべきか歎くべきかお八重はお八重優子は優子斯く云はれなば斯くせんの決心互に堅けれど思ひの外なる返しには何と定めて何とせん未練は流石ありそ海のおきて見つ又取りて見つながめに飽かねど吐息されて八重はアア何と思ふぞと人の詞を待ちて見るあな覺束なの三十一文字や

(十八)

怪しや三郎の便りふつと聞えずなりぬ待つには一日も詫しきを不審しかりし返事の後今日や來給ふ明日こそはと空だのめなる日を重ねて十日半月さては廿日憂き身につらき卯月も過たり五月雨ごろのながめり勝に軒の忍は我がたぐひの引きては昔かねど池のあやめの根ながき思ひにかき暮らされて袖にも水かさの增さりやすらん此處は別莊の人けも少く氣に入りの八重を措ては別莊守りの夫婦のみなれど最愛の娘病氣との事なり本宅よりの使ひ絶間なければ事によそへて杉原のこと問はするに本宅にも此頃さらに參り給はずといふさるにても何とし給ひしにや我心稚くてうちつけに文など參らせたるを如何に厭はしと思しながら返しせざらんも情なしとてあれよりはそれとなく御出のなきか此頃のお歌の心は如何に茂るわか葉の今こそは闇けれど時節を待たば空の月の逢みるべきぞとならば嬉しけれど若しやの願ひに左樣見ゆるにや寧つらからば一筋ならで頼みのあるだけ惑はるゝなり扨もお便りの聞えぬは何故我れ厭はせ給ひなば此處へこそ御入來なくとも本宅へまで御疎遠とは訝しゝそれほどまでに御嫌ひになるほどなら優しげな御詞なぜ仰せおかれけん八重が思ふも恥かしきまであの時は嬉しかりしを此まゝに見返りもし給はずば今さら面も向けがたし悲しき事よと娘氣に頼みをかけて見つ又ときつ思案にもつるゝ撚糸の八重が歎きは亦異なり茂る若葉の妨げと仰せられしは我が事ならずや闇き迷ひ

と歎じ給へどそれ悟りたればこそのお取持なれ思ひ合ふ中のお二方に我が生涯の望みも頼みもお譲り申して思ひ撥くこと聊かなきを何はゝかりての御遠慮ぞや身を覩ずればお恨みも未練も何もあらずお二方さま首尾とゝのひし暁には潔よく斯々して流石は節操を立つるとだけ君さまに知られなばそれを思出の我れなるに此身ある故に嬢さまの懲叶はずどせば何とせん身退くは知らぬならねど義理ゆゑ斯くと御存じにならばお情ぶかき御心として人は兎もあれ我よくばと仰せらるゝものでなしさらでもお弱きお性質なるにいかに突詰めたお覺悟をも遊ばすまじきものならず御最愛のお一人子とて八重や何分たのむぞとむづかしい大旦那さまさへ我身風情に仰せらるゝはお大事さのあまりなるべし彼につけ此につけ氣づかはしきは彼の人の事よ有りし日の對面の時此處に居給ふとは思ひがけず郷里のことは我れ聞きたり辛苦さこそなるべけれど奉公大事に勉め給へと仰せられしが耳に殘りて忘られぬなりあれほどにお優しからずばこれほどまでにも歎かじと斷ち難き絆つらしとて人見ぬ暇には部屋のうちに伏沈みぬいづれ劣らぬ雙美人に慕はるゝ身嬉しかるべきを何を厭ふてか三郎かき絶えて影も見せず疑念は重なる五月雨の雲薄らぐべき由もなくて世をうみ梅子の落つる音もそゝろ淋しき日を幾日小晴き窓のあけくれにをち返りなく山時鳥の唐紅にはふり出でねど涙に袖の色かはるまで同じ歎きを別に知る

主從の思ひさても果敢なし優子はいとゝ世を知らぬ身のお八重が素振り得も察せず氣の毒や我身大事にかけるとて痩せ見ゆるほど心配させし和女の情は忘れぬなりさりながら如何ほど盡くしてくるゝとも成るまじき願ひぞとは漸うに斷念めたりそれにつきて又別に父様母さまへの御願ひあれど御二方なり和女なりに歎きをかくるがつらきぞとてしみ〳〵と物語りつお八重の膝に身をなげ伏して隱しもやらぬ口説ごとにお八重われを忘れて抱き合ひ詞もなくよゝと泣きしがお前さまに其やうなお覺悟させますほどなら此苦勞はいたしませぬ御入來の無きは厭しけれどつれなき御返事といふにもあらぬを早まつてのお考へはお前様のやうにもなし今志ばしの御辛防ぞ其うちには何ともして屹度お喜ばせ申すべし八重が一心を憐れとも思召して其やうな悲しいことお聞かせ遊ばすなとて力を添へぬ優子嬉しく手に手を取りて前の世では何でありしやら姉妹にもなき親切この後とも頼むぞやこれよりは別しての事何ごとも汝の異見に從はん最う今のやうな事言ふまじければ免してよと詫らるゝも勿体なく待てば甘露と申しますぞやと輕げに云へど義理は重し袖に晴れ間は見えぬものゝ限りあればにや今日珍らしく鳥啼きて雨のなごりに軒ばの露に照る日あたらしく玉をみがきて庭の木かげも心地よげなるを垂籠てのみ居給ふは御體にも毒なるものをとお八重さま〳〵に誘ひて邊りちかき野の景色田面の庵の詫たるも又

をかしかるべし御覽ぜずやとわりなくすゝめて柴の戸めづらしく伴ひ出でぬ人の心のうやむやは知らずや茂る木立すゝしく袖に吹く風むねに欲しゝ植わたす小田の早苗青々として處々に鳴き立つ蛙の聲さま〳〵なるあれも歌かや可笑しとてほゝ笑む主に我も嬉しく彼處の萱ぶき此處の垣根お庭の中に欲しきやうなりあの花は何ならんと小走りして進み寄りつ一枝手折りて一輪は主一輪は我れかざして見るも機嫌取りなり互の心は得ぞしらず畔路づたひ行返りて遊ぶともなく暮らす日の鳥も寐に歸る夕の空に行く雲水の僧一人たゝく月下の門は何處ぞ羨ましの身の上やと見送れば見かへる笠のはづれ兩女ひとしくオ、と叫びぬ

別れ霜

第一回

莊子が蝶の夢といふ世に義理や誠は邪魔くさし覺め際までは引しむる利慾の心の秤には黃金といふ字に重りつきて增す寶なき子寶のうへも忘るゝ小利大損いまに初めぬ覆車のそしりも我が梶棒には心もつかず握つて放さぬ熊鷹主義に理屈はいつも筋違なる內神田連雀町とかや、友嘲りの喧しきならで客足もげき吳服店あり、賣れ口よければ仕入あたらしく新田と呼ぶ苗字そのまゝ暖簾にそめて帳場格子にやに下るあるじの運平不惑といふ四十男赤ら顏にして骨たくましきは薄醬油の鰡鰈に育ちて世のせち辛さなめ試みぬ附け渡りの旦那株とは覺えざりけり、妻はいつ頃なくなりけん、形見に娘只一人親に似ぬを鬼子とよべど鳶が產んだるおたかとて今年二八のつぼみの花色ゆたかにして匂濃やかに天晴れ當代の小町衣通ひめと世間に出さぬも道理か荒き風に當りもせばあの柳腰なにとせんと仇口にさへ噂し連れて五十稻荷の緣日に後姿のみも拜し得たる若ものは榮譽幸福上やあらん卒業試驗の優等證は何のものかは國會議員の椅

子にならべて生涯の希望の一つに數へいる、學生もありけり、さればこそ一たび見たるは先づ慄かれ再び見たるは頭やましく駿河臺の杏雲堂に其頃腦病思者の多かりしこと一つに此娘が原因とは商人のする掛直なるべけれど兎に角其美は爭はれず、姿形のうるはしきのみならで心ざまのやさしさ情の深さ絲竹の道に長けたる上に手は瀧本の流れを汲みてはしり書うるはしく四書五經の角々しきはわざとさけて伊勢源氏のなつかしきやまと文明暮文机のほとりを離さず、さればとて香爐峯の雪に簾をまくの才女めきたる行ひはいさゝかも無く深窓の春深くこもりて針仕事に女性の本分を盡す心懸け賊に殊勝なりき、家に居て孝順なるは出でゝ必らず貞節なりとか、これが所天と仰がれぬべく定まりたるは天下の果報の一人じめ前生の功德いか許り積みたるにかと世にも人にも羨まるゝはさしなみの隣町に同商中の老舗と知られし松澤儀右衞門が一人息子に芳之助と呼ばるゝ優男、契りは深き祖先の緣に引かれて樫の實の一人子同志、いひなづけの約成立しはお高がみどりの振分髪をお烟草盆にゆひ初むる頃なりしとか、さりとては長かりし年月、ことしは芳之助もはや廿歲今一兩年經たる上は公に夫とよび妻と呼ばるゝ身ぞと思へば嬉しさに胸をどりて友達の嬲ごとも恥かしくわざと知らず顏つくりながらも潮す紅の我しらず掩ふ袖屏風にいと〻心のうちあらはれて今更泣きたき事もあり人みぬひまの手

習に松澤たかとかいて見て又塗隱すあどけなさ利發に見えても未通女氣なり同じ心の芳之助も射る矢の如しと口にはいへど待つ歲月はわが爲に弦たゆみしやうに覺えて明かし暮らす程のまどろかしさよ、高殿に見る月の夕影を分つはいつぞとしのび花の下ふむ露のあした双ぶる翅の胡蝶うらやましく用事にかこつけて折々の訪おとづれに餘所ながら見る花の面わが物ながら許されぬ一重垣にしみ〴〵とは物言交すひまもなく兎角うらめしきは月日なり隙行く駒に形もあらば我れ手綱を取り鞭を揚げていそがさばやとまで思ひ渡りぬ、されども天は美人を生んで美人を惠まず多くは良配を得ざらしむとかいへり、彌生の花は風必ずさそひ十五夜の月雲かゝらぬはまことに稀なり、覺束なしや才子佳人かゝなへて待つ歡びの日のいつか來べき、あし分船のさはり多き世なればこそあれ親にゆるされ世にゆるされ彼も願ひ此も請ひよしや魔神のうかがへばとてぬば玉の髪一筋さしはさむべき間も見えぬを若此緣結ばれずとせばそは天災か將た地變か。

第二回

隴を得て蜀を望むは夫れ人情の常なるかも、百に至れば千をと願ひ千にいたれば又萬をと諸願

休む時なければ心常に安からず、つら〳〵思へば無一物ほど氣樂なるはあらざるべし、大抵が五十年と定まつた命の相場黄金を以て狂はせる譯には行かず、花降り樂きこえて紫雲の來迎する曉には代人料にて事調はずとは誰もかねて知れたる話、鶴千年龜萬年人間常住いつも月夜に米の飯ならんを願ひ假にも無常を觀ずるなかれとは大福長者と成るべき人の肝心肝要かなめ石の固く執つて動かぬ所なりとか、そも松澤新田らが祖先と聞えしは神風の伊勢の人にて夙に大江戸に志を立て、羅呉服の見るかげもなかりしが六間間口に黑ぬり土藏時のまに身代たち上りて男の子二人の内兄は無論家の相續弟には母方の絶えたる姓を興させて新田とは名告らすれど諸事は別家の格に准じて子々孫々の末迄も同心協力事を處し相隔離すべからずといふ遺旨かたく奉戴して代々交りをかさね來しが當代の新田のあるじは家につきての血統ならず一人娘に入夫の身なりしかば相思ふの心も深からず且は利にのみ走る曲者なればかねては松澤が隆盛をたのみてあやにかけたる許嫁のえにし親なり子なり同眞同士なり不足の品あらば持ち給へと彼方にばかり親切を盡さして引入れし利も少なからず世は塞翁がうまき事して幾歳すぎし朝日のかげ昇るが如き今の榮は皆松澤が庇護なるものから咽元すぐれば忘るゝ熱さ斯く對等の地位に至れば目の上の瘤うるさくなりて獨りつく〳〵案ずるやう徑十町を距てぬ處に同商業を

營むが上に彼れは本家とて世の用ひも重かるべく我とて信用薄きならねど彼方に七分の益ある時こゝには僅かに三分の利のみ我が家繁榮長久の策は彼れ松澤の無きにしかず且つは娘の容色世に勝れたれば是とても又一つの金庫芳之助とのえにし絶えなば通り町の角地面持參の聟もなきにはあらじ一舉兩得とはこれなんめりと思ふ心は娘にも秘め同氣求むる番頭の勘藏にのみ劃て明かせば横手を拍つて贊成し主從日夜頷をあつめて其方法を講じ居たりき、時なる哉松澤はさる歳商法上の都合に依り新田より一時借り入れし二千許の金ことしは既に期限ながら一兩年引つゞきての不景氣に流石の老舗も手元豐ならず殊に織元その外にも仕拂ふべき金いと多ければ新田は親族の間柄なり且は是迄我が方より立かへし分も少からねばよもや事情打あけて延期を乞はゞゆるさじと言ひもすまじ他人に内兜を見すかされ機械仕掛のあやつり身上松澤もゝう下り坂よと囃されんは口惜しく脊なる新田は後廻し腹の織元其他へ有金大方取あつめて仕拂ひたる噂こそ耳よりのことなれと平生ねらひすませし的彼方より延期をいひ出さぬ間に、切て放して急催促に言譯すべき程もなく忽ち表向きの訴訟沙汰とは成れりける素松澤は數代の家柄世の信用も厚ければ僅〻千や二千の金何方にても調達は出來得べしと世人の思ふは反對にて玉子の四角まだ萬國博覽會にも陳列の沙汰をきかねど晦日に月の出る世の中十五夜の闇もなくて

やは奥は朦朧のいかなる手段ありしか新田が蹇窮極めて妙にしていさゝかの融通もならず示談を請はゝやと奔走せしかどそれすらも調はずして新田は首尾よく勝を制し凱歌の聲いさましく引揚げしにそれとかはりて松澤が周章狼狽まこと寂耳に出水の騒動おどろくといふ暇もなく巧みに巧みし計畧に爭ふかひなく敗訴となり家藏のみか數代續きし暖簾までも皆かれが手に歸したれば木より落たる山猿同樣たのむ木蔭の雨森新七といふ番頭の白鼠去年生國へ歸りし後は十露盤玉と筆先に帳尻つくろふ溝鼠のみなりけん主家一大事の今日も申合せたるやうに富士見西行きめ込み見返るものさへあらざれば無念の涙を手荷物にして名のみ床しき妻戀坂下同朋町といふ處に親子三人雨露を凌ぐばかりの家を借りて辛く膝をば入れたりけり、海ならず山ならぬ人世の行路難今初めて思ひ當り淵瀨ことなる飛鳥川の明日よりは何とせん、もと富家に人となりて柔弱にのみ育ちし身は是れと覺えし藝もなく手に十露盤は取りならへど物に當りし事なければ時の用には立ちもせず坐して喰へば空しくなる山高帽子半靴と昨日かざりし身の廻りも一つ賣り二つ賣りはては晦日の勘定さへ胸につかふる程にもなりぬ。

第三回

一人並の男になりながら何の腑甲斐ない車夫風情にまで落魄ずともの事外に仕樣のあらうものをと大言吐きし昔の心の恥かしさよ誰れが好んで牛馬の代りに油汗ながし塵埃の中馳せ廻るものぞ仕樣摸樣の竭きはてたれば之も恥も外聞もなひまぜにからめて捨てた身のつまり無念も殘念も饅頭笠のうちに包みて參りませうと聲低に勸める心いらぬとばかりもぎどうに過ぎ行く人それはまだしもなりうるさいはと叱りつけられて我知らずあとじさりする意氣地なさまだ霜こほる夜嵐に辻待の提燈の火の消えかへる迄案じらるゝは二親のことなり馴れぬ貧苦に實めらるゝと懷奮の情のやる方なさとが老躰の毒になりてや涙がちに同じやうな煩ひ方それも御尤もなり我さへ無念に腸の沸え納まらぬものを胸さける程にも思召すなるべし憎きは新田なり恨めしきは運平なりよしや血をすゝり肉をつくすとも嬰るべき奴ならずと冷凍る拳握りつめて當處もなしに睨みもしつ思ひ返せばそれも愚痴なり恨みは人の上ならず我れに男らしき器量あらば是れ程までには弱しもすまじァゝと歎ずれば吐く息しろく見えて身を切る夜風に破れ屏風の内心配になりて絞つて歸るから車賃布のものゝ少き程苦勞のたかの多くなりてまたぐ我家の

閾の高さ、オヽお歸りかと起き返る母、お父さんは御寢なッてゝすかさぞ御不自由で御座いましたらう何もお樂りは御座いませんかと裏問ふ心は疵もつ足、オヽお前の留守に差配どのが見えられてといひさしてまばたゝく瞼の露白岡鬼平といふ有名の無慈悲もの悪鬼よ羅刹よと蔭口するは澁團扇の絲はなれぬ店子共が得手勝手家賃奇麗に拂ひて盆暮の砂糖袋甘き汁さへ吸はしぢかば下ぐる目尻と諸共に眉毛の名によぶ地藏顔にも見ゆべけれど今の身の上には憎し剛慾も、の事情あくまで知りぬきながら知らず顔の烟草ふか〳〵身に過りあればこそ疊に額ほり埋めての歎願も吹出だす烟の輪と消して、言譯きく耳はなし家賃をさめるか店を明けるか道は一つぞ何方にでもなされとばんとはたく其煙管で打わつてやりたい面がまち目的なしに今日までと日を延べしは重々此方が悪けれど母上とらへて何言居つたかお耳に入れまいと思へばこそ樣々の苦勞もするなれさらでもの御病氣にいとゝ重さを添へたやうなものはて困つたと言ひはせで低頭く心思案にくれぬ、差配どのが見えられてと母は詞を繰返して何か譯は知らねど今直ぐに此家を立て一寸の猶豫もならぬとそれは〳〵畜にもかゝれぬ談じやうお前にも料簡あることゝやう〳〵に言延べて歸ります迄と頼んでは置いたれどァァどうしたら宜からうか思案して見てくだされと小聲ながらもおろ〳〵涙お案じなされますな何うにかなります今夜は大分更けましたから明日早々出向きまして談合ひをつけませうナニ少しの行違ひでそれほどの事では御座いませんと我が親にまでいつはるとはさても後のよ恐ろしゝ、寢ぬに明くる夜明け烏もこうと鳴きて反哺の敎となるものを生甲斐なや五尺の身に父母の恩荷ひ切れずまして暖簾の色むかしに染めかへさんはさて置きて朝四暮三のやつ〳〵しさにつく〳〵浮世いやになりて我身捨てたき折々もあれど病勞れし兩親の寢顔さし覗くごとに我なくば何とし給はん勿躰なしと思ひ返せど沸くは涙か藥鍋の下炭火とろ〳〵と消え勝の活計とて良醫の手にもかゝられねば見す〳〵重り行く心ぐるしさよ思へば天も地も神も佛も我爲には皆仇か今この場合を見すぐしにするとは何の事ぞ新田こそ運平こそ大悪人の骨頂なれ娘ばかりはよもやと思へどそれもこれも心の迷ひかゑこそ詞こそやさしけれ瓜の蔓に生らぬ茄子父親と同じ心になつて今の我身に愛想が盡きてか人傳の文一通それすらもよこさぬとは外面如菩薩、内心はあれも如夜叉め。

第四回

他人はとまれお前さまばかりは高が心御存じと思ふたは空だのめか情ないお詞お前さまと緣きれて生存へる私と思召すか恨みを申さば其お心が恨みなり父樣が悪計それお賞め遊ばすにお答

への詞もなけれど其くやしさも悲しさもお前さまに劣ることかは人知らぬ夜の夜具の襟何故にぬるゝものぞ涙に色のもしあらば此袖ひとつにお疑ひは晴れやうもの一つ穴の獣とは餘りの仰せつもりても御覽ぜよ繋がれねど身は籠の鳥も同じこと風呂屋に行くも稽古ごとも一人あるきゆるされねば御目にかゝる折もなく文あげたけれど御住所誰れに問ひもならず心にばかり泣て泣て居りましたを薄情もの義理しらずと押くるめてのお詞お道理なれど御無理なり此身一つに科があらば打たれもせん突かれもせん膝ともといふ談合相手に遊ばしてよと涙ながら控へる袂を鋭く拂つてお高どの詞ばかりは嬉しけれど眞實やら何やら心まで見る目は芳之助あやにく持たず父御の心も大方は知れてあり甲斐性なしの我れ嫌になりて縁の絶ちどが無さに計略三昧かかりし我等は罠のうちの獣ぞ手を打て笑はるゝ筈を何の涙お化粧がはげては氣の毒なり牛に乘換へるうまき話も内々は有ることならんを家藏持參の薬平男に見せ給ふ顔我等づれに勿躰なしお退きなされよ見たくもなしとつれなしや後むき憎らしき事の限り並べられても口惜しきはそれならず無けぬ心にあらはれぬ胸うらめしく君様こそは何とも思召すまじけれど物ごゝろ知る其頃よりさま〳〵のこと苦勞にして身だしなみ物學び彼れか此れかお氣に入りたや飽かれまじと心のたけは君様故に使はれて片時安き思ひもせずお友達遊びも芝居行きもお嫌ひと知れば大

方は斷りいふて僻物と笑はれしは誰れの爲をさな遊びの昔は知らず睦しき中にも恥かしさが楯に成りて思ふこと思ふまゝにも得いはざりしを淺き心と思召すか假令どのやうな事あればとて仇し人に何のその笑顔見せてならうことかは山ほどのお恨みも受くる筋あれば詮方なし君様に愛想つきての計略かとはお詞ながら餘りなり親につながるゝ子罪は同じと覺悟ながら其名はかりはゆるし給へよしや父様にどのやうなお憎しみあればとて濫らぬ心の私こそ君様の妻なるものを何とげ〳〵しい他人あしらひ聞えぬお心やといひたさを押ゆる涙袖に覆さてモシと止めれば振拂ふ羽織のすそヱ、何さるゝ邪魔くさし我はお前さまの手遊ならずお伽になるは嬉しからず其方は大家の娘御暇もあるべしその日暮しの身は時間もをしく離れぞ相手をお探しなされと振はらへば又すがり芳さまそれは御眞實かと見上ぐる面睨みかへして嘘いつはりはお前さまなどのなさること義理人情のある世ならよもやと思ふ生正直から飼ひ犬同様な人でなしに手をかまれて暖籠に見る耻は誰れゆゑぞ原を正せば根分けの菊親子の中に知らぬといふ道理はなしよし知らぬにせよ知るにせよそれは其方の御勝手なり仇敵の子を妻にもせられず嫁にもすまじ言ふこともなし聞くことも無し恨みつらみを並べ立てなば力車に牛の汗何の積み戴せきれるものかは言はぬが花ぞお前さまは盛りの身春めき給ふは今の間なるべし薦かぶりながら見送らん

と詞叮嚀に氣込あらく齒の根きり〳〵と喰ひしばりて釣り上ぐる眉根おそろしく散髪斜めに拂ひあげて白き面に紅の色さしも優しき常には似ず止めれば振きる袖袂まづ今志ばしと詫びつ恨みつ取りつく手先うるさしと立蹴にはたと蹴倒されわつと泣く聲我れとわが耳に入りて起き返るは何處、平常の部屋に倚りかゝる文机の湖月抄こてふの卷の果敢なく覺めて又思ひそふ一睡の夢夕日かたぶく窓の簾風にあほれる音も淋し。

第五回

お珍らしやお高さま今日の御入來は如何いふ風の吹まはしか一昨日のお聲古にも其前にもお顏つひにお見せなさらずお師匠さまも皆さまも大抵でないお案じ日がな一日お噂して居りましたと嬉しげに出迎ふ碧古朋輩錦野はな子と呼ばれて醫學士の妹博愛仁慈の聞えたかき兄を見真似か温順しづくり何某學校通學生中に萬綠叢中一點の紅と稱へられて根あがりの高髷に被布扮粧廿歳を越しての肩縫あげ可愛らしき人品なりお高さま御覽なされ老人なき家の埒のなさ兄は兄とて男の事家内のことはとんと棄物私一人が拍つも舞ふもほんに埃だらけで御座いますと笑ひて誘ふ座淸國の上おかまひ遊ばすなと沈み聲にお高うやむやの胸の關所たれに打明けん相手も

なし朋友の誰れ彼れ睦ましきもあれどそれは春秋の花紅葉對にして挿丁簪の造物ならねど當座の交際姿こそはやさしげなれ智慧宏大と聞くは此人すがりて見ばやとこれも稚氣さりながら姿に知れぬは人の心笑ひものにされなばそれも耻かし何とせんと思ふほど兄弟ある人羨ましくなりてお兄樣はおやさしいとかお前さま羨ましと口を洩るれば花子少し笑みを含んでこればかりは私の幸福さりとて喧嘩する時もあり無理な小言いはれまして腹立ち合ふこともあれど跡もなし先もなし海鼠のやうなと笑はれます此頃は施療に暇がなうて芝居も寄席もとんと御無沙汰その内にお誘ひ申します兄はお前さまをといひかけて笑ひ消す詞何としらねどお施しとはお情深い事さぞかし可哀さうのも御座いませうと思ふことあれば察しも深し花子煙草は嫌ひと聞きしが傍の煙管とりあげて一服あわたゝしく押やりつそれはもうさま〳〵ツイ二日許前のこと極貧の裏屋の者が難産に苦みまして兄の手術に母子とも安全ではありましたれど赤子に着せる物がないとか聞きませば平常の心に承知がならず其の夜通して針仕事着るもの二つ遣はしましたと得意顏の物語り德は陰なるこそよけれとか聞きしが怪しのことよと疑ふ胸に相談せばやの心は消えぬ花子さま〳〵の患者の話に昨日往診し同朋町とやら若しやと聞けばつゆ違はぬ樣子なりそれほどまでにはよもやと思へど正しくならば何とせん實否くはしく聞きたしと思へど咎

むる心に詞つまりて應答何やらうろ〳〵になりぬお高さま御ゆるりなされ今兄も戻りまする先それよりはお目に懸けたきもの往日お話し申せし兄が秘藏の畫帖イエお前さまに御覽に入るゝに賞められこそすれ何として小言聞くことではなしお待遊ばせよと待遇ぶり詞滑かの人とて中々に歸しもせず枝に枝そふ物がたり花子いとゝ眞面目になりて斯う申してはをかしけれどお前さまはお一人子私とても兄ばかり女の同胞もちませねば淋しさは同じこと何かにつけて心細し御不足かは知らねど妹と思召してよと底にものある詞遣ひそれは私より願ふことゝいふ詞聞きも畢らずそれならばお話ありお聽き下さりますかと怪しの根問ひお高さまお前さまのお胸一つ伺へば譯のすむ事外でもなし實の姉さまにおなり下さらぬかと決然いはれて御申戯私こそ實の妹と思召してと言ふを遮りそれでは未だ御存じの無きならん父御さまと兄との中にお話し成立つてお前さまさへ御承知ならば明日にも眞實の姉樣お厭か〳〵お厭ならばお厭でよしと薄氣味わろき優しげの聲噓か實か餘りといへば餘りのこと、亂るゝ心を流石に靜めて花子さま仰せまだ私には呑込めませぬお答へも何も追てのこと今日は先づお暇と立たんとするを強ても止めず然らばお歸りか好きお返事お待申しますと送り出す玄關先左樣ならばを跡になして乘り出す車の掛聲に走り退く一人の男あれは何方の藥取憐れの姿やと見返れば彼方よりも見返る顔オヽ

芳さま詞の未だ轉び出でぬ間に車は轆轤として轍のあと遠く地に印されぬ。

第六回

中硝子の障子ごしに中庭の松の姿をかしと見し絹布の四布蒲團すつぱりと炬燵の内あたゝかに、美人の酌の舌鼓うつゝなく、門を走る樽ひろひあれは何處の小僧どん雪中の一つ景物おもしろし、とても積らば五尺六尺雨戸明けられぬ程に降らして常闇の長夜の宴、張りて見たしと紐れ舌に諺言の給ふちろ〳〵目にも六花の眺望に別は無けれど身にしむ寒さは降かゝりての後ならで知れぬ事なり、うそ寒しと云ひしも二日三日朝來もよほす薄墨色の空摸樣に頭痛もちの天氣豫報相違ごく西北の風ゆふ暮かけて鵞毛か柳絮かはやちら〳〵と降り出でぬ、入相の鐘の聲陰に響きて塒にいそぐ友烏今宵の宿りの詫しげなるに誰が空せみの夢の見初め、待合の奥二階に爪彈きの三下り籟を洩るゝ笑ひ聲低く聞えて思はず停る行人の足元、狂ふ煩惱の犬の尻尾、ぢまつたりと飛び退きて畜生めとはまことと踏みつけの詞なり、我が物なれば重からぬ傘の白ゆき往來も多くはあらぬ片側町の薄ぐらきに悄然とせし提燈の影かぜに瞬くも心細げなる一輛の車あり、齒代の安さ顯はれて剝げたる塗り破れし母衣、夜目なればこそ未しもなれ畫はづかし

き古毛布に乗客の品も嘸と知られて多くは取れぬ痩せ田作り米の代ほど有りや無しや九尺二間の煙の綱あはれ手中にかゝる此人腕力おぼつかなき細作りに車夫めかぬ人柄華奢といふて賞めもせられぬ力役社會に生ひ立つた身とは請取れず履歴は如何に聞きたしと問ふ人なければ我れと唇開きもならず、アヽと出る溜息を嚙しめる齒の根寒さにふるひて打仰ぐ面を見れば扨も美男子色こそは黒みたれ眉目やさしく口元柔和に歳は漸く二十か一か繼々の筒袖着物糸織そろへに改めて帶に巻く金鎖りきらびやかの姿させて見たし流行の花形俳優何として及びもないと大家の若旦那それ至當の役なるべし、さりとては是れ程の人品備へながら身に覺えた藝は無きか取上げて用ひる人は無きか憐れのことやとは目の前の感じなり心情さら〳〵知れたものならず美くしき花に則もあり柔和の面に案外の所爲なきにもあらじ恐ろしと思へばそんなもの、贔負目には雪中の梅春待つまの身過ぎ世過ぎ小節に關はらぬが大勇なり辻待ちの眼に原書繙いて居さうなものと色眼鏡かけて見る世上の物映るは自己が眼鏡がらなり、夜はまだ更けねど降りしきる雪に人足大方絶々になりて戸を下す商家こゝかしこ、遠く引く按摩の聲に近く交る犬の子の叫びそれすらも淋しきを路傍の柳にさつと吹く風になよ〳〵と靡いて散るは粉雪、物思ひ顔の若者が襟のあたり冷いやりとして、ハッと振拂へば半面を射る瓦斯燈の光蒼白し、行く人はなし乘る人は猶更なからんを何を待つとか馬鹿らしさよと他目には見ゆるものからまだ立去りもせず前後に目を配るは人待つ心の絶えぬなるべし、凍る手先を提燈の火に暖めてホッと一息力なく四邊を見廻し又一息此處に車を下してより三度目に聞く時の鐘、今はと決心の臍固まりけんット立上りしが又懐中に手をさし入れて一思案ア、困つたと我知らず歎息の詞唇をもれて其儘に身はもとの通り舌打の音續けて閉えぬ、雪はいよ〳〵降り積るとも歇むべき氣色少しも見えず往來は到底なきことかと落膽の耳に嬉しや足音辱しと顧みれば角燈の光り雪に映じ巡回の査公怪しげに目を注いで行き過ぎられし後に又人音この度こそはと見れば情なし三軒許手前なる家に入りぬ、流石に氣根も竭果てけん茫然として立つくす折しも最少し參ると御座いませうと話し聲して黒き影目に映りぬ、天の與へ人こそ來つれ外すまじと勇み立て進み寄ればはて何とせん、過たるは及ばざる二人連とは生憎や、車は一人乘りなるを。

第七回

心背られのさるゝものは散會過ぎて來ぬ迎ひの車と歎へ入れたし、待たせて置きても宜かりしを供待の雜沓遠慮して時間早めに吩咐て還せしもの何としての相違ぞやよもや忘れて來ぬには

あらじ家にても其通り何時まで迎ひ出さずには置かれまじ、例の酒癖何處の店にか醉ひ倒れて寢入りても仕舞しものかそれなればいよ〳〵困りしことなり家にても無お案じ此家へも亦氣の毒なり何とせんと思ふ程より積る雪いと〻心細く燭涙ながるゝ表二階に一人取殘されし新田のお高、げにも浮世か音曲の師匠の許に然るべき會の催し斷りいはれぬ筋ならねどつらきものは義理の柵是非と待たれて此日の午後より、飾る錦の裏はと問はゞ涙ばかりぞ薄化粧に深き苦勞の色を隱して友が無邪氣の物語りを笑ふて聞く胸ぐるしさ思ひに痩し手首に取りすがりてお淡ましやお高さまのお手の細さよお酢めし上りしか御傳授聞きたしと眞面目に問ふ人可笑しくはなくて其心根羨ましくなりぬ其の人々歸り果てゝより一時間許待つには長き時間ながら車の音門にも聞えず捨置かれなば未だしもなれどお茶參らせよお菓子あがれ夜はまだそれほど深くもなしお迎ひも今參らん御ゆるりなされと好遇さるゝ程猶更氣の毒さ堪へ難くなりて何時まで待ちても果て見えませねば憚りながら車一つ願ひたしと婢女に周旋のほど頼み入ればそれは何の造作もなきことなれどつひ行き違ひにお迎ひの參るまじとも申されず今少しお待なされてはと澁々にいふは車もとめに行くがつらさになるべし、それも道理雪の夜道押してとは言ひかねて心ならねど又暫時二度目に入れし茶の香り薄らぐ頃になりても音もなければ今は來ぬものか

來るものか當てにもならず當てにして何時といふ際限もなし行き違ひになるともそれはよし兎に角車願ひたしと押かへして頼み入るゝに師匠實にもと氣の毒がりて然らばお止め申すまじとてもお歸りなさるゝに夜が更けてはよろしからず車大急ぎに申して來よと主の命令には詮方なくてや恨めしげながら承はりて梯子あわたゞしく馳せ下りしが水口を出づる大黑傘の上に雪つもるといふ間もなきばかり速かに立歸りて出入の車宿名殘なく出拂ひて挽子一人も居りませねばお氣の毒さまながらと女房が口上其まゝの返り事に然らば何とせんお宅にお案じはあるまじきに明早朝の御歸館となされよなど親切に止められれど左樣もならず、雪こそふれ夜はまだそれほどにも御座りませねばと歸り支度とゝのへるにそれならば誰ぞ供にお連なされお歩行御迷惑なから此邊には車烏渡むつかしからん大通り近くまでは御難澁なるべし家内にてすら火桶少しも放されぬに夜氣に當つてお風めすな失禮も何もなしこゝより直にお頭巾召せ誰れぞお肩掛お着せ申せと總掛りに支度手傳はれて憚りさまといひも敢へず更けぬ内にお急ぎなされなまなかお止め申さずば是れ程に積るまいものお氣の毒のことといたしたりお詫はいづれと送り出す門口犬の子の聲恐ろしけれど送りの女中が骨たくましきに心強くて軒下傳ひ三町ばかり御覽なされませあの提灯は屹度車今少しの御辛防と引く手も引かるゝ手も氷りつくやうなり嬉しやと

近づいて見ればさても破れ車モシと聲はかけしが後送りする送りの女中ソッとお高の袖引きてもう少し參りませうあまりといへばと跡は小聲なり折しも降しきる雪にお高洋傘を傾けて見返るともなく見返る途端目に映るは何物蓬頭亂面の青年車夫なりお高夜風の身にしみてかぶる〳〵と震へて立止りつゝ、此雪にては先へ行きても有るか無きか知れませねば何にてもよし此の車お頼みなされてよと俄に足元重げになりぬあの此樣な車にお乘しなさるとかあの此樣な車にと二度三度お高輕く點頭きて詞なし我れも雪中の隨行難儀の折とて求むるまゝに言附くる那の車さりとては不似合なり錦の上着につゝれの袴ひき合したやうなと心をかしく挽出すを見送つて御機嫌よう車夫さんよくお氣をつけ申して。

第八回

馳せ出す車一散、さりながら降り積る雪車輪にねばりてか車上の動搖する割に合せて道のはかは行かず高世橋に來し頃には鐵道馬車の喇叭の聲はやく絶えて京屋が時計の十時を報ずる響空に高し、萬世橋へ參りましたがお宅は何方と軾を控へて佇む車夫、車上の人は聲ひくゝ鍋町までと只一言、車夫は聞きも敢へず力を籠めて今一勢と挽き出しぬ、皚々たる雪夜の景に異りは

なけれど大通りは流石に人足絶えず雪に照り合ふ瓦斯燈の光り皎々として、肌をさす寒氣の堪へがたければにや車上の人は肩掛深く引あげて人目に見ゆるは頭巾の色と肩掛の派手摸樣のみ、車は如法の破れ車なり母衣は雪を防ぐに足らねば、洋傘に辛く前面を掩ひて行くこと幾町、鍋町は裏の方で御座いますかと見返れば否鍋町ではなし、本銀町なりといふ、然らばとばかり馳せ出す又一町、曲りませうかと問へば、眞直にと答へて此處にも車を止めんとはせず日本橋迄行きたしといふに何かは知られど詞の通り、河岸につきて曲りてくれよ、とは何方右か左か、左へいや右の方へと又一横町、お氣の毒なれど此處を折れて眞直に行て欲しゝと小路に入りぬ、何の事ぞ此路は突當り、外に曲らん路も見えねば、モシお宅はどの邊でと覺束なげに問んとする時、何とせん道を間違へたり引返してと復跡戻り、大路に出れば小路に入らせ小路を縫ては大路に出で走幾走、轉幾轉、蹴立る雪に轍のあと長く引てめぐり出れば又以前の道なり、薄暗き町の片角に車夫は茫然と車を控へて、仰の通りに參りましたら又以前の道に出ましたが若しやお間違ひでは御座いますまいか此角を曲ると先程の糸屋の前眞直に行けば大通りへ出て仕舞ひますたしか裏通りと仰せで御座いましたが町名は何と申しますか夫次第大抵は分りませうと問掛けたり、車上の人は言葉少に兎に角曲つて見て下され、たしか此道と思ふやう

なりとて梶棒を向きかへさせぬ、御覽なされまし矢張りこゝは元の道これで宜しう御座いますかと訝しみて問ふ車夫の言葉にほんにこれは違ひたりもう一つ跡の横町がそれなりしかも知れずと曖昧の答へ方、さればといふて挽き返す一横町こゝにもあらず今少し先へといふ提燈搖り消して商家に火を借りしも二度三度車夫亦道に委しからずやあらん未だ此職に馴れざるにやあらん同じ道行返りて困じ果てもしたらんに強くいひても辭しもせず示すが儀、の道を取りぬ、夜は漸々に深くならんとす人影ちらほらと稀になるを雪はこゝ一段と勢をまして降りに降れど聽れぬものは鍋燒温飩の細く哀れなる聲戸を下す商家の荒く高き音、さては按摩の笛犬の聲小路一つ隔てゝ遠く聞ゆるが猶更に淋し、さても怪しや車上の人萬世橋にもあらず銀町も過ぎたり日本橋にも止まらず大路小路幾筋幾通りそも何方に行かんとするにからず洋行して歸朝の後に妻を忘るゝ人ありとか聞きしがこれは又いかに歸るべき家を忘れたるか歳もまだ若かるを笑止といはゝ笑止思へば扨も訝しき事なり、今度は京橋へと急がせぬ、裏道傳ひ二町三町町名は何と知れねど少し引き入りし二階建てに掛行燈の光り朧々として主はありやなしや入口に並べし下駄二三足料理番が欠伸催すべき見世がゝりの割烹店あり、車上の人は目早く認めて、オ、此處なり此家へ一寸と俄の指圖に一度勇ましく引入れる車門口に下ろす梶棒

と共にホット一息内には女共が口々に入らつしやいまし。

第九回

勢ひよく引入れしが客を下ろして扨おもへば恥かしゝ、記憶に存る店がまへ今の我が身には往昔ながら世の人は未だ昨日といふ去年一昨年、同商中の組合會議或は何某の懇親會に登りなれし梯子なり、それと知れば俄に肩すぼめられて見る人なけれど遠しく片蔭のある薄暗がりに車も我も寄せて慙ひつ、靜かに顧みれば是れも笹原走るたぐひ、誰が目に覺えて知るものぞ松澤の若大將と稱へられて席を上座に設けられし身が我れすらみすぼらしき此服裝よしや面に覺えが有ればとて他人の空肖、それもあるならひなり況してや替りたる雪と墨おろかなこと雲と泥ほど懸隔のおびたゞしさ如何に有爲轉變の世とはいへ是れほどの相違誰れが何として氣のつくべき心の鬼に見知り越しの人目厭はしく態と横町に道を避けて見られじとする氣あつかひも他人は何の感じもなく摺れ違つて見合はす眼の電光、ハッと思ふは我れればかり、態とつくるかまことと見忘れてか知らず顔に過ぎ行かれて、撫で下ろす胸にむら〳〵と感じるはさても人情こそ薄きものなれ紙といはゝ吉野紙見えすいたやうな世の中なり、知り顔して欲しきにもあらず

詞かけられては身の置場もなけれどそれにも何か色のあるもの、物いはゞ振切らんず袖がまへ、嘲るやうな尻目遣ひ口惜しと見るも心の僻みか召使ひの者出入のもの指折れば少からぬ人數ながら誰れ一人として我れ相談の相手にと名告出づるものもなし、富貴には寄る親類顔幾代先きの誰樣に何の縁故ありとかなしとか猫の子の貰ひ主までが實家あしらひのえせ追從、櫛で掃く庭石の周旋を手はじめに引き入れる工夫算段はじいて見ねば知れぬものゝ割りにも合はぬ品いくら冠せて、上穏は自己が内懐中ぬく〳〵とせし絹布ぞろひは誰れ故に着し物とも思はずお庇護に建ちましたと空拝みせし新築の二階造り其の詞は三年先の阿房鳥か、今の零落を高見に見下して全躰意氣地が無さすぎると言ひしとか酷と思ふは心がらなり、他人が聞けば適當の評といはれやせん別家も同じき新田にまで計らるゝ程の油斷のありしは家の運の傾く時かさるにても憎きは新田の娘なり、うつくしき顔に似合ぬは心小學校通ひに紫袱紗對にせし頃年上の生徒に喧嘩まけて無念の拳を我れ握る時同じやうに涙を目に持ちて、口惜しげに相手を睨みしこともありしがそれは無心の昔なり我れ性來の虚弱とて假初の風邪にも十日廿日新田の訪問懈れば彼處にも亦一人の病人心配に食事も進まず舊古ごとに行きもせぬとか、お前さまお一人のお煩ひはお兩人のお惱みと婢女共に笑はれて嬉しと聞きしが今更おもへば故らに言はせしか知れたものならず此頃見しは錦野の玄關先うつくしく粧ふた身に比べて見て我れより詞は掛けられねど無言に行過ぎるとは不埒ならずや身こそ零落たれ許嫁の縁きれしならずまこと其心なら美くしく立派に切れてやりたし切れるといへば貧乏世帶のカンテラの油、今宵の用ひだけありしか如何に、さらでも御不自由のお兩親が燈火なくば嘸お困り早く歸りて様子知りたきもの、今の客人の氣の長さまだ車代くれんともせず何時まで待たする心にやさりとてまさかに促りもされまじ何としたものぞとさし覗く奥の方廊下を歩む足音にも面赫と熱くなりて我知らず又蔭に入る、思へば待たるゝやうな待たれぬやうな萬一車代を渡す人知りし顔の女中ならば何とせん詞かけられなば何といはん恥の上塗りは要なきことなり車代といふも知れたもの受けずともよし此まゝに歸らんか否是れ欲しければこそ雪の夜を二時三時恥も外聞も親には換へられたものならず、はて誰れでも出て來よ此姿に何として見覺えがあるものかと自問自答折しも樓婢のかなきり聲に、池の端から來た車夫さんはお前さんですか。

第十回

それは何そのお間違ひなるべし私お客樣にお懇親はなし池の端よりお供せしに相違は無けれど車代賜はるより外に御用ありとは覺えず其譯仰せられて車代の頂戴お願ひ下されたしと一歩も動かんとせぬ芳之助を誘ふ樓婢は笑みを含み、お間違ひやら何やら私等の知る事ならねど只お客さまの仰せには今の車夫に用事がある足を洗はせて此室へ呼びたしと仰せられたに相違はなし兎に角お上りなされよと洗足の湯まで汲んでくるゝはよも串戯にはあらざるべし僞りならずとせば異以て奇怪、何人が何用ありて逢ひたしといふにや親戚朋友の間柄にてさへ面背くる我に對して一面の識なく一語の交りなき然かも婦人が所用とは何事逢たしとは何故人違ひと思へば譯もなけれど彼處といひ此處といひ乘り廻りし方角の不審しさそれすら事の不思議なるに頼みたきことあり足を洗ひて上りくれよとは扨も意外わからぬといへば是れ程わからぬ話はなし何とせば宜からんかと佇立たるまゝ躊躇へば樓婢はもどかしげに急がしたてゝ、お客さまも嘸お待ちかねお逢にならば、譯はどの道知れる筈なり先づお出なされよと手をとらへて引立つるに然らば參るべしお手お放しなされ大方は人違ひと思へどお目にかゝりし上ならではお疑ひ晴れ難からん御案内お願み申すと明瞭に答へながら心の裡は依然濛々漠々、靜かに足を浄め了りていざとばかりに誘はれぬ、洗石なり商賣がら、燦として家内を照らす電燈の光りに鑑穢の針

の目いちじるく見えて時は今極寒の夜ともいはず背に汗の流るゝ苦しき、お客さまはお二階なりといふ伴はるゝ梯子の一段又一段浮世の憂きといふ事知らで昇り降りせしこともありし其時の酌取り女我が前離れず囁々しく欵待したるが彼の女もし居らば彌々面目なき限りなり其頃の朋友今も遊びに來んは定の物何ぞのはしに我がこと引き出して斯々云々とも物語りなば何處まで知らるゝ恥ならん思へば何故に登樓たるか今更に詮なき事してけりと思ふほど胸さわがれて足ふるひぬ、案内はかねて知る梯子を登り果てゝ右手の小座敷、お客さまは此處にと示したるまゝ樓婢は急ぎ下り行きたり障子の外に暫時たゆたひしが果つべきことならずと身を低くして靜かに明くる座敷の内これは如何に頭巾に見えざりし面肩掛につゝみし身今ぞ明らかに現はれぬ、寵寐にも離れず起居にも忘れぬ我が後來の半身二世の妻新田が娘のお高なり、芳之助はそれと見るより何思ひけん前後無差別、躍を回してツト馳出づればお高走り寄つて無言に引止むる帶の端振拂へば取すがり突き放せば纏ひつき芳さまお腹だちは御尤もなれども暫時、お長うとは申しませぬ申しあげたきこと一通りと詞きれ〳〵に涙漲りて引止むる腕ほそけれど懸命の心は蜘蛛の圍の千筋百筋力なき力拂ひかねて五尺の身なよ〳〵となれど態と荒々しく突き退けてお人違ひならん其樣な仰せ承はる私にはあらず池の端よりお供せし車夫の耳には何の

ことやら理由すこしも分りませぬ車代賜はる外御用はなき筈御申戯はお措き下されと言ひ拂つてすつくと立てば、あんまりなり芳さま其お心ならそれでよし私にも覺悟ありと涙を拂つてきつとなるお高、オヽおもしろし覺悟とは何の覺悟許嫁の約束解いて欲しゝとのお望みかそれは此方よりも願ふ事なり何の迂りくどい申上ぐることの候の一通りも二通りも入るべとならず後とはいはず目の前にて切れて遣るべし切れて遣らん他人になるは造作もなしと嘲笑ふ胸の内に沸くは何物、お高涙の顔恨めしげにい、お情なしまだ其樣なこと自由にならば此胸の中斷ち割つて御覽に入れたし。

第十一回

又逢ふ場所は某の辻某の處に待給へ必らずよと契りて別れし其夜のこと誰れ知るべきならねば心安けれど心安からぬは松澤が今の境涯あらましは察しても居たものゝそれ程までとは思ひも寄らざりしが其御難儀も誰れがせし業ならず勿躰なけれど我が親うらみなり聞かれぬまでも諫めて見んか否父はともあれ勘藏といふものある以上なまなかの事言出して疑ひの種になるまじとも言ひ難しお爲にならぬばかりかは彼の人との逢瀬のはしあやなく絶もせば何かせん然るべ

き途のなからずやと惑ふは心つゝむ色目に何ごとも顯はれねど出嫌ひと聞えしお高昨日は池の端の師匠のもとへ今日は駿河臺の錦野へと駒下駄直さする日の多かるを不審といはゝ不審もたつべきながら子故にくらきは親の眼鏡運平が邪智ふかき心にも娘は何時も無邪氣の子供伸びしは脊丈ばかりと思ふか若しやの掛念少しもなくハテ中の好かりしは昔のことなり今の芳之助に何として愛想の盡ぬものがあらうか娘はまして孝心ふかし親の命令ること、背く筈なし心配無用と勘藏が注意をさへ取りあげもせず錦野が懇望恰もよし彼れは有德の醫師なりといふ故鄕某の地には少からぬ地所をさへ持てりと聞くに娘の爲にも我が爲にも行末わろき縁組ならずとよりよりの相談を洩れきく身の腹だゝしさ縱令身分は昔の通りならずとも現在ゆるせし良人ある身に忌はしき嫁入沙汰きくも厭なり表にかざる仁者顏は畢竟何事かの手段かも知れたことならず優しげな妹御も當てにならぬよし折々見たこともあり毒蛇のやうな人々信用なさるお心には何ごと申すとも甲斐はあるまじさりとて此盜に日を送らば悲しきことの來んは目の前なり聞かせて心配さするも憂けれど癪むは彼の人の力のみ男の智慧には良き考へもなからずやと思ひたてば心は矢竹、はやるほど猶落附てお友達の誰さま御病氣ときく格別に中の好き人ではあり是非お見舞申したく存じますがと許容を請へば平常の氣だてに有るべき願ひとて疑ひもなく運

平點頭きて然らば疾く行きて疾くかへれ病人の處に長居はせぬもの供には鍋なりと連れて行き
なされと氣をつくればイエそれには及びませぬ裏通りを行けばつい其處なり鍋も家のことが忙
しう御座いますッイ行てッイ歸るに供などゝは大層すぎます支度も何も入りませねば此儘すぐ
にとそこ〳〵身仕度して庭口出でんとする途端嬢さま今日もお出かけか何處へぞと勘藏がぎろ
〳〵目恐ろしけれど臆してなるまじと態とつくる笑顔愛らしく今日もとは勘藏酷いぞや今日は
と言はねばてにをはが違ふ所ぞとほゝ笑みて何氣もなしに家を出でぬ約束の辻往つ返りつ待て
どもまてども今日はいかにしけん影も見えず誰れに聞かんもうしろめたし何とせん必ず訪ひ給
ふな我家知られんは恥かしとて町所つげ給はねど襲に錦野にてそれとなく聞きしはうろ覺え
ながら覺えあり縱しお怒りにふれゝばそれまで、空しく物をおもふよりは寧お目にかゝりしう
へにて兎も角もせんと心に答へて妻戀下とばかり當所なしにこゝの裏屋かしこの裏屋さりとて
は雲掴むやうな尋ねものも思ふ心がしるべにや松澤といふか何か知られど老人の病人二人あり
て年若き車夫の家ならば此裏の突當りから三軒目溝板の外れし所がそれなりとまで教へられぬ
時は夕暮の薄くらきに迷ふ心もかき暮されて何と言入れん戸のすき間よりさし覗く家内のいた
ましさよ頭巾肩掛に身はつゝめど目をもるものは紅の涙

第十二回

さらでも老ては僻むものとか況んや貧にやつれ苦にやつれ人恨めしく世の中つらく明けては歎
き暮れては怒り心晴間なければさまでには無き病氣ながら何時癒るべき景色もなくあはれ枯木
に似たる儀右衛門夫婦待ちわびしきは春ならで芳之助の歸宅の遲さよ好き客ありて遠くまで行
きたるにやそれにしても最う歸りさうなもの日沒まへに一度づゝ樣子見に戻るが常なるを何と
して今日はと頸を延ばす心は同じ表のお高も路次口顧みつ家内を覗きつ芳さまはどうでもお留
守らしく御相談すること山ほどあるをお目に懸らでは戻らるゝことかはさるにても此病人のう
へに此お生計右も左もお身一つに降りかゝる芳さまが御心配は嘸なるべし尋常ならば御兩親の
見取り看護もすべき身が餘所に見聞く苦しさよと沸き返る涙胸に呑みて差のぞかんとする二枚
戸を内より明けて面を出すは見違へねども昔は殘らぬ芳之助の母が姿なり待つ人ならで待たぬ
人の思ひも寄らず佇むかげに慄かされて物をいはず見つむる目元も疎くなりてや不審げに誰何
さまぞと問はるゝもつらしお高頭巾を手早く取りてお忘れ遊ばしたかと取すがりて啼く音に知
るゝ燒野の雉子我子ならねど繋がる緣とて母は女の心も弱くオヽお高か否お高どのか何として

此樣な處へ何う尋ねて知れましたとおろ〳〵涙の聲きゝ附けてや膝行出づる儀右衛門はくぼみし眼にキッと睨みてコレ何を云つて居るぞ夕方は別して風が寒し其うへに風でも引かば芳之助に對しても濟むまいぞやといふ詞の尾に附いてお高おそる〳〵顏をあげ御病氣といふことを人傳に聞きましてお怒りにふれるとは知るも御樣子が伺ひたさに出にくい所を繕つて漸うの思ひで參りましたお父樣にもお執成をと忘は〳〵として言出づるを取次ぐ母が詞も待たず儀右衛門冷笑つて聞かんともせずさりとは口賢くさま〳〵の事がいへたものかな父親に盡陶れては其筈の事ながらもう其手に乘りはせぬぞよ餘計な口に風引かさんより早く歸宅さるゝが宜さゝうなもの賊と思ひて聞くものは此家の內に一人もなし老婆さまも眉毛よまれるなと憎々しく言ひ放つて見返りもせずそれは御尤の御立腹ながら是れまでのこと鑑ばかりも私知りての事はなしお憎しみはさることなれど申譯の一通りお聞き遊ばして昔の通りに思召してよと詫入る詞聞きも致へず何といふぞ父親の罪は我れは知らぬ今まで通り嫁身になりたしとか聞て呆れるなり考へても見よ人非人の運平の娘を妻に持つ芳之助と思ふかよしや芳之助が持つといふとも我れある以上は嫁にすること毛頭ならぬ汚らはしゝ運平の名思ひ出しても胸が沸くなり況てやそれが娘を嫁になんど思ひも寄らぬ〻となり詞かはすも忌はしきに疾々歸らずやお歸りなされヱヽ何を

うち〳〵老婆さま其處を閉めなさいと詞づかひも荒々しく怒りの面色すさまじきを母は見かねてそれはあまりに短氣なりあの子の詞も一通りは聞てお遣りなされませぬかと執成すをハタと睨んで汝までが同じやうに何の囈語最早何事聞く耳もなし汝が追ひ出さずば我れ自身にと止むる妻を突のけつゝ病勞れても老の一徹上りがまちに泣頽れしお高が細腕むづと取りつ力を極めて押出す門口お慈悲に一言お聞き入れをと詫びるも泣くも何の用捨あらくれし詞に怒りを籠めて嫁でなし舅でなし阿伽の他人の來る家でなし何といふともゝう逢はぬぞ、ハタとたて切る雨戸の閾くちしは溝か立端もなくわつと泣く空に闇を縫ひ行く烏の兩三聲。

第十三回

覺悟の身に今更の涙見苦しゝと勵ますは詞ばかり我れまづ拂ふ瞼の露の消えんとする命か扨もはかなし此處松澤新田が先祖累代の墓所蟄猶暗き樹木の茂みを吹拂ふ夜風いとゞ悲慘の聲をそへて梟の叫び一段と物すごしお高決心の眼光たじろがずお心怯れかさりとては御未練なり高が心は先ほども申す通り決めし覺悟の道は一つ二人の身を犧牲にしてとお前さまのお心伺ふ先に生きて還る念はなし父御さまの今日の仰せ人非人の運平が娘を嫁になどゝは思ひも寄らぬ

ととなり芳之助は兎もあれ我れ許さずと御立腹の數々それいさゝかも御無理ならねどお前さまと縁きれて此世何の樂しからずつらき錦野がこともあり所詮は此命一つぞと覺悟の道も同じやうに行逢つてお前さまのお心伺へば其通りとか今更御違背のある筈なし私は嬉しう存じますをと美事に言ひ放つて噛む襠袢の袖、未練などがあることかは我れ男の一疋ながら虚弱の身の力及ばず只にもあらで病ひに臥す兩親にさへ孝養、抱持の不十分さ甲斐なき身恨めしくなりて捨てたしと思ひしは昨日今日ならず我々二人斯くと聞かば流石運平が邪慳の角も折れる心になるは定なり我が親とても其の通り一微の心和らぎ寄らば兩家の幸福この上やある我々二人世にありては如何に千辛萬苦するとも運平に後悔の念も出まじく況してや手を下げての詫ごと何としてするべきならずよしや膝を屈げればとて我親決して肯れはなすまじく乞食非人と落魄るとも新田如きに此口腐れても助けを求むることはせずとそれ平生の詞なるもの盞未來この不和の中解ける筈なし數代續きし兩家のよしみ一朝にして絶やさんこと先祖の遺旨にも違ふことなり世の人は愚とも笑はん痴とも見んさりながら先祖に對し家に對す孝は二人が命なり捨てゝ榮ある身ぞと思へば何處に殘る未練もなしいざ身支度をと最期の用意あはれ短き契りなるかな井筒にかけし丈くらべ振わけ髪のかみならねば斯くとも如何しら紙にあぬ樣こさへて遊びし頃これ

は君さまこれは我今日は芝居へ行くのなり否花見の方が我れは宜しと戯れ交はせしそれ一つも願ひの叶ひしことはなくて待にまちし長日月のめぐり來て見れば果敢なしや世は桑田の海ともならねど變るは現在親の心、ましてや他人に底ふかき計略の淵知るべきならねば陷れられて後の一悔恨空しく呑む涙の晴れ間は無くて降りかゝる憂苦と繋がるゝ情緒に思慮分別も烏羽玉の闇くらき中にも星明りに目と目見合せて莞爾とばかり名殘の笑顔うら淋しくいざと促せばいざと答へて流石にたゆたはるゝ幾分時思ひ定めてツト立よりつ用意の短刀とり直せば後の藪に何やら物音人もや來つると耳を澄ますに吹き渡る風定かに聞えぬ扨は追手にもあらざりけりお高支度は調ひしか取亂さんは亡き後までの恥なるべし心靜かにと誡める身も詞ふるひぬ慘ましゝ可惜青年の身花といはゝ莟の枝に今や吹き起らん夜半の狂風、お高が胸先くつろげんとする此時はやし間一髪、まち給へとばかり後の藪垣まろび出でゝ利腕まつかと取る男誰れぞ放して死なしてと脆弱き身にも一心に振切らんとするをいつかな放さず、いや放しませぬ放されませぬお前さま殺しては旦那さまへ濟みませぬといふは正しく勘藏か、とお高の詞の畢らぬ内闇にきらめく白刃の電光アッと一聲一刹那はかなく枯れぬ蓮理の片枝は。

第十四回

とぼれ松葉の土になるまで二人ともにと契りしものを我ばかり何として後るべきと足ずりして歎きしが命果敢なく止められて再び見んとも思はざりし六畳敷の我が部屋をその儘の座敷牢樣の障子の開閉にも乳母が見張りの目は離れず況してや勘藏が注意周到翼あらば知らぬことと飛ぶ鳥ならぬ身に何方ぬけ出でん隙もなしあはれ又物一つ手に入れたや處は異れど同じ道に後れはせじの娘の目色見てとる運平が氣遣はしさ錦野との緣談も今が今と運びし中に此こと知られなば皆當斷なるべし包まるゝだけはと秘しかくして宥めてみつ賺してみつ異見に手をかへ品をかふれど袖の涙晴れんともせず兎もすれば我も俱にと決死の素振に油斷ならず何はしかれ命ありての物だねなり娘の心落附かすに若くはなしと押しては婚儀をすゝめもなさず去るものは日々に疎しの俚諺もあり日をだに經れば芳之助を追慕の念も薄らぐは必定なるべし心ながく時を待つて春の氷に朝日かげおのづから解けわたる折ならでは何事の甲斐ありとも覺えず離れも〳〵異見は言ふな心の浮く話に氣をなぐさめて面白き世をおもしろしと思はするのが肝要そと我先立ちて機嫌を取りつ慰めつ一方は心を浮かせんと力め一方は見張りを嚴にして細ひも一筋小刀

一挺お高が眼に觸れさせるな夜は別して氣をつけよと氣配り眼配り大方ならねば召使ひの者も心を得て風の音をも只には聞かず鼠の荒れにも耳そばだてつ疑心は暗鬼を生ずる奥の間に其人現在坐すを見ながら嬢さまは何處へぞお姿が見えぬやうなりと人騷がせするもあり乳母は夜の目ろく〳〵合さずお高が傍に寢床を並べて浮世雜談に諷諫の意をこめつ可笑しく面白く物がたりながら沈みがちなる主の心根いぢらしくも氣遣はしく離れぬ守りにこれも一つの關所なり如何にしてか越えらるべき如何にしてか遁るべきお高髪とりあげず化粧もせず粧ひし昔の紅白粉は誰れが爲の色ならず君におくれて鏡の影に合す面つれなしとて伽羅の油の香りも留めず亂れ次第の花の姿やつれる身を我と賴母しく、ならば此儘に死にたしと願へど命は心のまゝならず病むともなく煩ふともなくつく〳〵と眺めてつく〳〵と泣く涙と空とを意中の友として送られぬど迎へねど來るものは月改まるは歳ちりて返らぬ君を思へば何ぞ櫻の春しり顏に今歳も咲ける面にくさよ又しても聞く堀切りの菖蒲だより車をつらねて見に行きしはそもいつの世の夢になりて精靈棚の眞こもの上にも表だちては祀られずさりとては世の中うらめしゝ照る月の秋の夜草葉に腮き白玉の露と答へて消えかぬる身を何と御覽じて何とお恨みなさるべきにや過ぎし雪の夜の邂逅に二つなき貞心嬉しきぞとてホロリとし給ひし涙の顏今も眼の前に存るやうなり

さりながら思ふ心は幽冥の境にまでは通ずまじきにや無情く悲しく引止められし命を未練に惜みてとも思召さん苦しさよと思ひやりては伏し沈み思ひ出してはむせ返り笑みとは何ぞ夢にも忘れて知るものは人世の憂きといふ憂きの數々來るものは無意無心の春夏秋冬落花流水ちりて洗れて寄せ返る波の年又年今日は心の解けやする明日は思ひの離れやするあはれ榮花の身に志たし娘にも綺羅かざらせて我れも安心の樂隱居願はくは家運長久なれ子孫繁昌なれ兎角は身の上に凶事あらせじとの親心に引かへし願ひも逆さまながら今日身をすてんか明日こそはと親ふ心に怠りなけれど人目の關守何として隙あるべき此處に七年身はまだ籠中の鳥。

第十五回

お父樣にも勘藏にも乳母には別しての事いろ〳〵と苦勞をかけまして今更おもへば恥かしいやらお氣の毒やら幼心のあと先見ずに程のない無分別さりながら盡きぬ命かや事も無く助かりしを嬉しいとは思ひもせでよしなき義理だてに心ぐるしく芳さまのお跡追ふてと思ひしは幾たびかさりとては命二つあるかのやうに輕々しい思案なりしと後悔して見れば今までの事口惜しくこれからの身が大切になりました阿房らしい死んだ人への操だて何に成ることでもなきを何

時まで獨身で居る心か數へる歳の心細さ是れほどならばなぜ昔お詞そむいて厭ひしか我れと我が身知れませぬ母さまなしのお手一つに御苦勞たんと懸けまして上の上にも又幾年お心休めぬ不料簡不孝のお詫は向後さつぱり芳さまのこと思ひ切つて何方への緣組なれ仰せに違背はいたしませぬ勘藏も乳母も長の間の心づかひ嘸かしと氣の毒な私の心は今もいふ通り晴れてみれば迷ひは雲霧これまでの氣は少しもなし必らず必らず心配して下さるなよと流石に心の弱ればにや後悔の涙を目にたゝへてお高斯くとは言ひ出しぬ歳月心を配りし甲斐に漸くの此詞まづ安心とは思ふものゝ運平なほも油斷をなさず起居につけて目をそゝぐにお高は詞に違ひもなく愁の眉いつしかとけて昨日にかはるまめ〳〵しさ父のもの我がもの云へば更に手代小僧の衣類の世話綴ひほどきにまで氣を用ひて浮々とせし樣子に扨は眞に悔悟して其心にもなりぬるかと落附くは運平のみならず內外のものも同じこと少し枕を安んじけりさるにても厭しきは松澤夫婦が上にこそ芳之助在世の時だに引窓の烟たえ〳〵なりしを今はたいかに其日を送るや可惜若木の花におくれて死ぬべき病は癒えたるものゝ僅か手內職の五錢六錢露命をつなぐ術はあらじを怪しのことよと尋ぬるに澆季の世とは聞くものゝ猶陰德者なきならで此薄命を憐みてや惠むともなき惠みに浴して鹽噌の苦勞は知らずといふなるそは又何處の誰れなるにや扨も怪むべく尊む

べき此慈善家の姓氏といはず心情といはず義理の柵さこそと知るは唯りお高の乳母あるのみ忍び〳〵の貢のものそれからそれと人手を換へて誰れと知らさぬ用心は昔氣質の一こくを立て通さする遠慮心痛おいたはしや右に左に御苦勞ばかり世が世ならばお嫁さまなり奥御なり御孝行に御遠慮は入らぬ筈をと或時泣きしにお高同じく涙になりて私の心知るものは和女ばかり芳さまのことは思ひ切りても御兩親の行末が心配なり明日が日我が身緣に附きなば兎に角自由は叶ふまじ其時たのむは和女ぞかし父さまのお心よく取りて松澤さまとの中昔の通りにして欲しゝ是れ一つがお願みぞとて兩手を合せて伏し拜みぬ失せし芳之助を悼まぬならねど主の身の上猶さらに氣づかはしく陰になり日向になり意見の數々貫きてや今日此頃の袖のけしき涙も心も晴れゆきて緣にもつくべし嫁にも行かんと言出でし詞に心うれしく七年越しの苦も消えて夢安らかに寢る夜幾夜ある明方の風あらく枕ひいやりとして眼覺れば椽側の雨戸一枚はづれて並べし床はもぬけの殼なりアナヤとばかり蹴かへして起つ枕元の行燈有明のかげふつと消えて乳母が涙の聲あわたゝしく嬢さまが嬢さまが。

渝らぬ契りの離れなれや千年の松風颯々として血汐は殘らぬ草葉の緑と枯れわたる霜の色かなしく照らし出だす月一片何の恨みや吊ふらん此處鴛鴦の塚の上に。

雪の日

見渡すかぎり地は銀沙を敷きて、舞ふや蝴蝶の羽袖輕く、枯木も春の六花の眺めを、世にある人は歌にも詠み詩にも作り、月花に並べて稱ふらん羨ましさよ、あはれ忘れがたき昔を思へば、降りに降る雪くちをしく悲しく、悔の八千度其甲斐もなけれど、勿躰なや父祖累代墳墓の地を捨てゝ、養育の恩ふかき伯母君にも背き、我名の珠に恥かしき今日、親は瑕なかれとこそ名付給ひけめ、瓦に劣る世を經よとは思しも置かじを、そもや谷川の水おちて流れて、清からぬ身に成り終りし、其あやまちは幼氣の、迷ひは我れか、媒は過ぎし雪の日ぞかし。

我故郷は某の山里、草ぶかき小村なり、我が薄井の家は土地に聞えし名家にて、身は其一粒ものなりしも、不幸は父母はやく亡せて、他家に嫁ぎし伯母の是れも良人を失ひたるが、立歸りて我をば生したて給ひにき、さりながら三歳といふより手しほに懸け給へば、我れを見ることの實の子の如く、蝶花の愛親といふともこれには過ぎまじく、七歳よりぞ手習ひ學問の師を選みて、絲竹の藝は御身づから心を盡し給ひき。扨もたつ年に關守なく、腰揚とれて細肩つくり、

幅びろの帶嬉しと締めしも、今にして思へば其頃の愚さ、都乙女の利發には比ぶべくもあらず、姿ばかりは年齡ほどに延びたれど、男女の差別なきばかり幼くて、何ごとの憂きもなく思慮もなく明かし暮らす十五の冬、我れさへ知らぬ心の色を何處の誰れか認めけん、吹く風傳へて伯母君の耳にも入りしは、これや生れて初めての、仇名ぐさ懋すてふ噂なりけり。

世は誤の世なるかも、無き名取川波かけ衣、ぬれにし袖の相手といふは、桂木一郎とて我が通學せし學校の師なり、東京の人なりとて容貌うるはしく、心やさしければ生徒なつきて、桂木先生と誰れも褒めしが、下宿は十町ばかり我家の北に、法正寺と呼ぶ寺の離室を假ずみなりけり、幼きより敎へを受くれば、習慣うせがたく我を愛し給ふこと人に越えて、折ふしは我が家をも訪ひ又下宿にも伴ひて、おもしろき物がたりの中にさま〳〵敎訓を含めつ、さながら妹の如くもてなし給へば、同胞なき身の我れも嬉しく、學校にての肩身も廣かりしが、今はた思へば實に人目には怪しかりけん、よしや二人が心は行水の色なくとも、結ふや島田髷これも小兒ならぬに、師は三十に三つあまり、七歲にしてと書物の上には學びたるを、忘れ忘られて睦みけん愚かさ。

見る目は人の咎にして、有るまじき事と思ひながらも、立ちし浮名の消ゆる時なくば、可惜白

玉の瑕になりて、其身一生の不幸のみか、あれ見よ伯母育てにて投げやりなれば、薄井の娘が不品行さ、兩親あればあのやうにも成らじものと、言ひたきは人の口ぞかし、思ふも涙は其方が母、臨終の枕に我れを拜みて。姉樣お願は珠が事をと。微かに言ひし一言あはれ千萬無量の思ひを籠めて、まこと闇路に迷ひぬべき事なるを、引受けし我れ其甲斐もなく、世の嗤笑に爲しも了らば、第一は亡き妹に對し我が薄井の家名に對し、伯母が身は抑も何とすべき。と御壁ひく〳〵四壁を憚りて、口數すくなき伯母君が思し合はすることありてか、しみ〳〵と諭し給ひき、我れ初めは一向夢のやうに迷ひて何事とも思ひ分かざりしが、漸々伯母君の詞するどく。よく聞けよお珠、桂木樣は其方を愛で給ふならん、其方も亦疎はしかるべし、されども此處に規定ありて、我が薄井の家には昔より他鄕の人と緣を組まず、況てや如何に學問は長じ給ふとも、桂木樣は何者の子何者の種とも知らぬを、門閥家なる我が薄井の聟とも言ひがたく嫁にも遣りがたし、よし戀にても然かぞかし、無き名なりせば猶更のこと、今よりは搏へて往來もし給ふな、譬古もいらぬ事なり、其方大切なればこそお師匠樣と追從もしたれ、益も無き他人を珍重にはあらず、年來美事に育て上げて、人にも褒められ我れも誇りしものを、口惜しき濡れ衣きせられしは彼の人ゆゑなり、今までは今までとして、以來は斷然と行ひを悛め、其方が名

をも雪ぎ我心をも安めくれよ、兎角に其方が仇は彼の人なれば、家を思ひ伯母を思はゝ、桂木とも思すな一郎とも思すな、彼の門よぎるとも寄り給ふな。と涙みかけて仰する時我が腸は断ゆるばかりになりて、何の涙ぞ瞼に堪へがたく、袖につゝみて音に泣きしや幾時。

口惜しかりしなり其内心の、いかに世の人とり沙汰うるさく一村擧りて我れを捨つるとも、育て給ひし伯母君の眼に我が清潔は見ゆらんものを、汚れたりとや思す恨めしの御詞、師の君とても昨日今日の交りならねば、正しき品行は御覽じ知る筈を、誰が讒言に動かされてか打捨て給ふ情なさよ、成らば此胸かきさばきても身の潔白の顯はしたやと歎きしが、其心の底何者の潜みけん、駒の狂ひに手綱の術も知らざりしなり。

小簾のすきかげ隔てといへば、一重ばかりもやましきを、此處十町の間に人目の關きびしくなれば、頃は木がらしの風につけても、散りかふ紅葉のさま羨ましく、行くは何處までと遠く眺むれば、見ゆる森かげ我を招くかも、彼の村外れは師の君のと、住居のさま面かげに浮かんで、夕暮ひゝく法正寺の鐘の音かなしく、さしも心は空に通へど流石に誠しめ重ければ、足は其方に向けも得せず、せめては師の君訪ひ來ませと待てど、立つ名は此處にのみならで、憚りあればにや音信もなく、杜絶えし中に千秋を重ねて、萬代いはふ新玉の、歳たちかへつて七日の日

來りき、伯母君は隣村の親族がり年始の禮にと赴き給ひしが、朝より曇り勝の空いや暗くなるまゝに、吹く風絶えたれど寒さ骨にしみて、引入るばかり物心ぼそく不圖ながむる空に白き物ちら〳〵、扨こそ雪に成りぬるなれ、伯母樣さぞや寒からんと炬燵のもとに思ひやれば、いと〻降る雪用捨なく綿をなげて、時の間に隱れけり庭も籬も、我が肱かけ窓ぼそく開けば一目に見ゆる裏の耕地の、田もかくれぬ畑もかくれぬ、日毎に眺むる彼の森さ空と一つの色になりぬ、あゝ師の君はと是れは抑もまよひなりけり。

禍ひの神といふ者もしあらば、正しく我身さそはれしなり、此時の心何を思ひけん、善しとも知らず悪しとも知らず、唯なつかしの念に迫られて身は前後無差別に、のがれ出でしなり薄井の家を。

これや名殘と思はねば馴れし軒ばを見も返らず、心急ぎて庭口を出でしに、嬢樣この雪降に何處へとて、お傘をも持たずにかと慌かせしは、作男の平助とて老實に愚かなる男なりし、伯母樣のお迎ひにと詣はれば、いや今宵はお泊りなるべし、是非お迎ひにとならば老僕が參らん、先待給へと止めらるゝ憎さ、實は此雪に宜くこそと賞められたく、是非に我身行きたければ、其方は知らぬ顔にて居よかしと言ふに、取しめなく高笑ひして、お子達は扨埒も無きもの、さ

らば傘を持ち給へとて、其身の持ちしを我れに渡しつ、轉ばぬやうに行き給へと言ひけり、由縁あれば武藏野の原戀しき習ひ、此一言さへ思ひ出らるゝを、無情りしも我が爲、嚴しかりしも我が爲、末善かれとて盡くし給ひしを、思ふも勿躰なきは伯母君の事なり。

斯く迄に師は戀しかりしかど、ゆめさら此人を夫と呼びて、倶に他鄕の地を踏まんとは、かけても思ひ寄らざりしを、行方なしや迷ひ、窓の呉竹ふる雪に心下折れて我れも人も、罪は誠の罪になりぬ、我が故鄕を離れしも我が伯母君を捨てたりしも、此雪の日の夢ぞかし。

今さらに我が夫を恨まんも果敢なし、都ぱ花の見る目うるはしきに、深山木の我れ立並ぶ方なく、草木の冬と一人しりて、袖の涙に昔を問へば、何ごとも總て誤なりき、故鄕の風の便りを聞けば、伯母君は我が上を歎き歎きて、其歳の秋かなしき數に入り給ひしとか、悔こそ物の終りなれ、今は浮世に何事も絶えぬ、つれなき人に操を守りて知られぬ節を保たんのみ、思へばまことと式部が歌の、ふれば憂さのみ增さる世を、知らじな雪の今歳も又、我が破れ垣をつくろひて、見よとや誇る我れは昔の戀しきものぞ。

琴の音

（上）

空に月日のかはる光りなく、春さく花のゝどけさは浮世萬人おなじかるべきを、梢のあらし此處にばかり騷ぐか、あはれ罪なき身ひとつを枝葉ちり〳〵の不運に、むごや十四年が春秋を雨にうたれ風にふかれ、わづかに殘る玉の緒の我れとくやしき境界にたゝよふ子あり。

母は此子が四つの歳、みづから家を出でゝ我れ一人苦をのがれんとにもあらねど、傾きゆく家運のかへし難きを知る實家の親々が、斯く甲斐性なき男に一生をまかせて、涙のうちに送らせん事いとほし、乳房の別れのつらしとても、子は只一人なるぞかしと、分別らしき異見を女子ごゝろの淺ましき耳にさゝやかれて、良人には心の殘るべきやうもあらざりしかど、我が子の可愛きに引かれては、此子の親なる人をかゝる中に棄てゝ、我が立去らん後はと、流石に血をはく思ひもありしが、親々の異見は漸く義理のやうにからまりて、弱き心の押切らんに難く、霜ばしら今たふれぬべきを知りつゝ、家も此子も、此子の親をも捨てゝ出でぬ。

父は一人ゆきたることもあり、此子を抱きて行きたることもあり、これを突きつけて戻りたることもあり、我れは此まゝ朽はてぬとも、せめては此子を世に出したきに、いかにもして今一たび戻りくれよ、長くとにはあらず今五年がほど、とれに物ごゝろのつきぬべきまでと、頼みつすかしつ歎きけるが、さりとも子故に闇なるは母親の常ぞ、やがては戀しさに堪へがたく、我れと詫して歸りぬべきものをと覺束なきを頼みて、十五日は如何に、二十日は如何に、今日こそは明日こそはと待つ日空しく過ぎて、ばては尋ね行きたりとて、面を合はする事もなく、乳母にや出でけん、人の妻にや成りけん、百年の契りは誠に空しくなりぬ。

斯くて半年を經たりし後は、父もむかしの父にあらずなりぬ、見かぎりて出でにし妻を、あはれ賢しと世の人ほめものにして、打すてられし親子の身に憐れをかくる人は少かりき、それも道理、胸にたゝまるもや〳〵の雲の、走ばし晴るゝはこれぞとばかり、飲むほどに醉ふほどに、人の本性はいよ〳〵暗くなりて、つのりゆく我意の何處にか容れらるべき、其年の師走には親子が身二つを包むものも無く、ましてや雨露をしのがん軒もなくなりぬ、されども父のありけるほどは、頼む大樹のかげと仰ぎて、よしや木ちんの宿に蒲團はうすくとも、温かき情の身にしみし事もありしを、それすら十歳と指をるほどもなく、一とせ何やらの祝ひに或る富家の、

かゝみを拔いていざと並べし振舞の酒を、うまし天の美祿、これを栞りに我れも極樂へと心にや定めけん、飢えたる腹にしたゝかものして、歸るや御濠の松の下かげ、世にあさましき終りを爲しける後は、來よかし此處へ、我れ拾ひあげて人にせんと招くもなければ、我れから願ひて人に成らん望みもなく、はじめは浮世に父母ある人羨ましく、我れも一人は母ありけり、今は何處に如何なる事をしてと、そゝろに戀しきこともありしが、父が終りの悲しきを見るにも、我が渡邊の家の末を思ふにも、母が所業は惡魔に似たりとさへ恨まれける。

父は無きか、母は如何にと問はるゝ毎に、袖のぬれしは昔なりけり、浮世に情なく人の心に誠なきものと思ひ定めてよりは、生中あはれをかくる人も、我れを嘲るやうに覺えて面憎し、いでや、つらからば一筋につらかれ、とてもかくても憂身の果はとねぢけゆく心に、神も佛も敵とおもへば、恨みは誰れに訴へん、漸々尋常ならぬ道に尋常ならぬ思ひを馳せけり。

おどろに亂れし髮のひまより、人を射るやうなる眼のきら〳〵と光るほかは、垢に塗れし面かげの、何處にはいかならん好き處ありとも、凡人の目に好しと見ゆべきかは、恐ろしく氣味惡く油斷ならぬ小僧と指さるゝはては、警察にさへ睨まれて、此處の祭禮かしこの緣日、人山築くが中に忌はしき疑を受けつ、口をしや剪刀よ盜人と萬人にわめかれし事もありき。

人の眼はくもりたるものにて、耳は千里の外までも聞くか、誤り傳へたる事は復びきえず、渡邊の金吾は眞の盜賊に成りぬ、やがては明治の何と肩がきのつくべきほど、おそろしがらるゝ身却りて恐ろしく、此處を離れて知らぬ土地に走らんと思ひたる事もあり、恨みに堪へかねては死なばやと思ひたる事もあり、幾度水のおもてに臨みて、これを限りと眺めたる事もありしが、易きに似て難きものは死なりけり。

捨てはてし身にも猶衣食のわづらひあれば、盡は其處となくさまよひて何となく使はれ、夜は一處不住の宿りに、かくても夢は結びつゝ、日一日とたゝよひにたゝよひて、過ごしゆくほどに、春たけと共にのびゆくは、ねぢけたる心なるべし。

(下)

御行の松に吹く風音さびて、根岸田甫に晩稻かりほす頃、あのあたりに森江しづと呼ぶ女あるじの家を、うさんらしき乞食小僧の目にかけつゝ、怪しげなる素振あるよし、婢女ども氣味わるがりて咡き合ひしが、門の扉の明くれに用心するまでもなく、垣に枝垂れし柿の實ひとつ、事もなくして一月あまりも過ぎぬるに、何時となく忘れて噂も出でずなりしが、主の女が敏き

耳には、少しあやしと聞かるゝ事あり、秋雨しと〳〵と降りて物あはれなる夜、ともし火のもとに獨り手馴れの琴を友として、あはれに淋しき調べを弄びつゝ、上野の森に聞えいづる鐘の、さりとは更けぬるかなと、さしおきて聞けば、軒ばを傳ふ雨しづくのほかに、梢をゆする秋風の外に、物のけはひの聞ゆるやうなること度重なりぬ。

軒ばに高き一もと松、誰れに操の獨栖ぞと問はゝ、斯道にと答へんつま琴の優しき音色に一身を投げ入れて、思ひをひそめしは幾とせか取る年は十九、姿は風にもたへぬ柳の糸の、細々と弱げなれども、爪箱とりて居ずまひを改むる時は、塵のうきよの亂れも何ぞ、松風かよふ絃の上には、山姫きたりて手やそふらん、夢も現も此うちにとほゝ笑みて、雨にも風にも、はたゝめく雷電にも、悠然として餘念なし。

頃は神無月はつ霜この頃ぞ降りて、紅葉の上に照る月の、誰が砥にかけて磨きいだしけん、老女が化粧のたとへは凄し、天下一面くもりなき影の、照らすらん大厦も高樓も、破屋の板間の犬の臥床も、さては埋もれ水人に捨てられて、蘆のかれ葉に霜のみ冴ゆる古宅の池も、篭のおとなひ心細き山した庵も、田のもの案山子も小溝の流れも、須磨も明石も松島も、ひとつ光りのうちに包みて、清きは清きにしたがひ、濁れるは濁れるまに〳〵、八面玲瓏一點無私のおも

かげに添ひて、澄のぼる琴のね何處までゆくらん、うつくしく面白く、清く尊く、さながら天上の樂にも似たりけり。

お靜が琴の音は此月此日うき世に人一人生みぬ、春秋十四年雨つゆに打たれて、ねぢけゆく心は巖のやうにかたく、射る矢も此處にたちがたき身の、果は臭骸を野山に曝して、父が末路のあはれや學ぶらん、さらずば惡名を路傍につたへて、腰に鎖のあさましき世や送るらん、さても心の奥にひそまりし優しさは、三更月下の琴聲に和して、こぼれ初めぬる涙、露の玉か、玉ならば趙氏が城のいくつにも代へがたし、戀か情か、其人の姿をも知らざりき、わづかに洩れ出づる柴垣ごしの聲に、嬉しといふ事も覺えぬ、恥かしさも知りぬ、かねては惡魔と恨みたる母の懷かしさゝへ身にしみて、金吾は今更此世のすて難きを知りぬ、月はいよ〳〵冴ゆる夜の垣の菊の香袂に滿ちて、吹くや夜あらし心の雲を拂へば、又かきたつる琴のねの、あはれ百年の友とやなるらん、百年の悶へをや遣すらん、金吾はこれより百花爛熳の世にいでぬ。

花ごもり

其一

本郷の何處とやら、丸山か片町か、柳さくら垣根つゞきの物淋かなる處に、廣からねども清げに住なしたる宿あり、當主は瀬川與之助とて、こぞの秋山の手のさる法學校を卒業して、今は其處の出版部とやら編輯局とやらに、月給なにほどなるらん、靜かに青雲の曉をまつらしき身の上、五十を過ぎし母のお近と、お新と呼ぶ從妹の與之助には六歳をとりにて十八ばかりにや、をさなきに兩親なくなりて哀れの身一つを此處にやしなはるゝ、此三人ぐらしなりけり、筒井づゝの昔もふるけれど、振わけ髪のをさなだちより馴れて、倶に同胞なき身の睦ましさ一しほなるに、お新はまして女子の身の浮世に交はる友も少なければ、與之助を兄のやうに思ひて、心やすく嬉しき後だてと頼み、よし風ふかば吹け波たゝばたて與之樣おはしますほどはと憑りかゝれる心の憐れに可愛く、此非なく美しき人をおきて、いさゝかも他處に移る心のあらんは我れながらよからぬ業と、與之助が胸に思ふことあり、八つの年より手鹽にかけたれば、

我が親族にはあらねどお近とても憎くはあらで、同じくは願ひのまゝに取むすびて、二人が嬉しき笑顔を見、二人が嬉しき素振を眺め、我れも嬉しき一人になりて、すべての願ひ、望み、年來むねに描きし影を夢なりけりと思ひきり、幾ほどもなき老らくの末を、斯くて此まゝやさしき婆々樣に成りて送らばや、さらばお新が喜びは如何ばかりぞ、與之助とても我れをつらしとは思ふまじけれど、あはれ今一方の人の涙の床に起臥しゝて、悲しき闇にさまよふべきを思へば、いづれ恨みの懸かるべきは我れなり、天より降り來りし如き幸福の眼のまへに沸き出でたるを取らで、はかなき一筋の情に引かるれば、恨みは我れに殘りて、得がたき幸福は天の何處にか行き去るべし、與之助の女々しく未練なるは弱年のならひ、見る目の花に迷ひて行末の慮りなければなるを、これと一つになりて我れさへに心よわくば、辛き浮世になりのぼる瀬なくして、をかしからぬ一生を塵の中にうゞめかんのみ、親子夫婦むつましきを人間上乘の樂みと言ふは、外に求むることなく我れに足りたる人の言の葉ぞかし、心は彼の岸をと願ひて中流に棹す舟の、寄る邀なくして波にたゞよふ苦しさは如何ばかりぞ、我れかしこしと定めて人を頼まぬ心だかさは、ふと聞きたるにこそ尊くもあれ、遂に何ごとを爲すべき場處も無くして、玉か瓦か人見わけねば、うらみを骨に殘して其の下に泣くたぐひもあり、今の心にいさゝか屑からずとも、小を捨てゝ大につくは恥とすべきにも非ず、此ごろ名高き誰れ彼れの奥方の緣にすがりて、今の位置をば得たりと聞ゆるも多きに、これを隨劣しきことゝ誹るは誹る者の心淺きにて、男一疋なにほどの疵かはつかん、草がくれ拳をにぎる意氣地なさよりも、ふむべき爲のかけはしに便りて、をゝしく、たけく、榮ある働を浮世の舞臺にあらはすこそ面白けれ、お新がことは瑣細なり、與之助が立身の機は一度うしなひて又の日の測り難きに、我れはいさゝかも優しく脆く尋常一とほりの婦女氣を出だすべからず、年來馴れたる中のたがひに思ふ事も同じく、瑕なき玉のいづれ不足もなき二人を、鬼ともなりて引分る心は、何として嬉しかるべきぞ、我れになしても思ひしる、お新が乙女心に何ごとの念ひもなくて、はるかに嬉しき夢を見つゝ、與之助をば更なり、我が内心に何者の住めりとも知らで、母が懷中に乳房をさぐるが如き風情の、たちまちにして驚き覺めたらん時は、恨みに詞の窮まりて、泣くに涙も出でざるべし、さても浮世は罪の世の中よな、酌むにあまれるあはれの我が心一つよりこそ、愁ひの眉を笑みにかへて和風こゝに通ふの景色をも見らるべけれど、我が瀬川の家の爲に、與之助が行末の爲に、時の運の我が親子を迎ふるを見て、知りつゝ我れは仇になりて、可愛き人を涙の淵に擠すぞかし、されどもお新はお新の運ありて、與之助に連れ添ふ一生の嬉しき願ひ

はこゝに絶ゆるとも、さるべき緣にまたがひて、さるべき幸福のめぐりも來りぬべきに、我れはお新がことを思ふべきにあらず、可愛しとても、いぢらしとても、振かへりて抱きあぐるは只暫時の心やりにて、遂に右左り分つ袂の宿世なりけるを、我が一日の情は與之助に一日の未練をまさせて、今一方の人に物思ひの數を添へつゝ、其兩親が闇に迷へる悲しみを增さするより外に、功は露ほどもあることならねば、よし鬼ともなり蛇ともなり、つれなく憎き伯母になりて、與之助が心の彼方に向ふべきやう扱ふは我が役なり、嬉しき迎ひは我足もとまで來りけるものをと、お近は瑞雲の我家の棟に棚引ける如き念ひに驕られて、八字の將に威嚴そなはる與之助が、黑ぬり馬車に榮華をほこる面かげまで、あり〳〵と胸のうちに描かれぬ。

其二

世の人よりは柔かに穩かすぎたる良人を持ちて、萬事にもどかしく齒がゆかりし年月も、流石女子の我が一存をふるひ難くて、空しく胸のうちに藏めたりし思ひは、中々に消えんともせず、ともすれば燃え出でゝ抑へ難き炎に身をも燒くめり、お近が願ひは不二の嶺の上もなく立

のぼれるに、身は麓の裡に交れる如く、我れ同列の人々より見れば、やさしく温順に勉强家の聞えさへある子を持ちたるが上に、姪とはいへどこれも子にひとしきお新が、朝夕をいたはり仕へて、行々は樂隱居さまの羨ましき身の上ながら、思ひあがれる心には、此樂みの如何ばかり小く、とるに足らぬ事に覺えて、我腹より出でたるやうにもなく、與之助が世間一通りの働きをなしつゝ、世に拔けいでたる考へのあらぬさへ恨めしく、望みは高くせよ、願ひは大くせよ、落ちて流れて行水の泡となるとも、天命なれば是非もなし、垣の瓢のぶら〳〵として卯の毛の先きの疵もつかで五十年の生涯を送りたりとて、何事のをかしさかあるべき、一人に知らるべき事は百人に、百人に知らるべき事は萬人の目の前に顯はして、不出來も失敗も功名も手柄も、對手を多數に取りて晴れの場處にて爲すぞよき、衆人の讃むべき書物をよみ、衆人のいふべき事をいひ、衆人の行ひたるあとを踏んで、糸もて操らるゝ木偶のやうに、我が心といふものなく、意氣地なくつまらなく、過失もなく誹りもなきは男の身として本意にてはあるまじ、事に臨みては母ありとも思ふべからず、家ありとも思ふべからず。執るべき途の大きなるに寄りて進み給へと、これは平常の詞なりけり。

花にうく露の戀とは何ぞ、をかしやと言ひ消すべきお近が、與之助故に命とこがるゝ人の、あ

はれ玉緒のたえ〳〵になど、取次ぎが言葉のかなしげなるを受けて、此頃の明け暮れ思ひを砕くに理由あり、花ちらす吹雪の風は此處に愛からねど、嫉しき使ひは此戀にのりて來にけり、父は有名の某省次官どの、家は内福の聞え高き、田原何某が愛女と傳へたるにこそ。

移りゆく人の心に倣はぬ花の、今を春べと時しり顔にほゝ笑みそめし垣根の梅の一枝二枝を折りて、お新はむつましき手ならひの師のもとへ清書の直しを乞はんとて、伯母にも與之助にも挨拶もそやかに出で行きし後、輪にふく煙草のむすぼゝれたる思ひにお近は茶の間の火鉢をはなれて、三疊の小座敷に何の書物なるらん文机の上にくりひろげしまゝ、梅が香薫る窓の外をながめて讀むとも見えぬ與之助が傍に、灰がちの火のうそ寒き火鉢をかき起しつゝ、自ら持ち來し座蒲團に悠然と座をかまへて、物いひたき景色は、例のそれなるべしと、聞かぬほどより五月蠅しの素振あらはるれば、與之助、汝はまだ子供のやうと少し笑ひて身を進ませ、思案はまだまとまらぬかの、言ふは汝が胸一つにして、詞に否と應との二つのみなるを、何れにとも定めて、母が胸をも安めては呉れぬか、親とても差嘔はなすまじき縁のことなれば無理にも、とではなし、否ならば否にて、誰れに遠慮の入るでもなければ、決然といふて宜さゝうなもの、母は何れに好悪の念もなく、お新は稚きより手元には置きたれど、末の松山何とちかひの有るでもなければ、これを取分けて可愛しとにもわらず、まして田原の娘は逢ひしこともなく見し覺えも無きに、これに加擔人して是非にも嫁にと願ふ道理はなし、唯可愛く大事に行末までを案じて、明け暮れ胸を痛め思ひになやむは汝が其身一つぞや、父様はやく亡り給ひしより、知れるが如く親族とても悪臭に寄る青蠅のやうに、追ふがうるさきほどの人々なれば力になる者とてもなく、あはれ思ひは雲井にまで登れど、甲斐なき女の手に學士の號とも取らせかねて、猶すくなからぬ借財さへ身にまつはれる苦しさ、かくて汝の行末をおもへば、嬉しき夢は見る夜すくなくして、眠りがたき宵々の老ては殊につらきものぞよ、されば田原がことの呉敢なき筋より出でゝ、媒の女も我が身には嬉しからねど、運は目に見えぬ處にありて、天の機は我々が心に測り難きに、年來ねがひたる念慮の叶ふべき兆かと、母が抛き胸に感じたればこそ言ふなれ、無理とは思すな、もとより汝がためをおもひてなれば厭といはいそれまで、人々の心々一つならねば、浮かべる雲の危きにのぼらんより、八重菰にさし入る月を肱まくらに眺め、我れ一人たのしくはそれにて事の足りぬべしとならば、母もこれより其心になりて、高きと願ひし今までを夢とあきらめ、二間三間の借家を天地と定めて、洗ひすゝぎに、濫觴つゝくりに、老の眼かすむ六七十を、孫の傅して暮らさんも宜し、いかにや與之助、汝が胸はと靜かなれど

も底に物ある母が詞の、ぢり〳〵と疳にもさはれば、をかしき仰せ、とんと私には呑こめませぬ、お手一つにて育ちたる厚恩のなみならぬを知れば、及ばぬ心に鞭ちてもと、これは朝夕の願ひ、さりながら、内縁にすがりて眞の袖の下にかくれ、これを立身のかげはしになどは懸けても思ひ寄りませぬこと、未熟なれども我がことは我れでなすべく、此綱なければ世に立たれぬかのやうな、心配は御無用に御座りますと決然こたふれば、母は其顏をじつと眺めて、さればよなと歎息の聲をもらしぬ。

其三

それは眞實か、さても若き料簡よな、されば こそ母が行末を案じて、亡き後までを氣遣ふはそれゆゑ、うき世を机の上の夢に見て、重き物は六寸の筆より外もたず、書物によまれて我心なき人はそれも道理か、其心にて抑しゆかば、事成就の曉は幾跌きの後なるべき、東照宮樣御遺訓に重荷を負ひて遠路を行くが如しとありけれど、恐らくは半道も三分一も得行かぬほどに投げ出して閉口せねばなるまじ、我れは我れによりて事を爲すとは、さても立派の言の葉ながら聞けよ與之助、汝ほどの博識は廣き東京に搜くほどにて、塵塚の隅にもごろ〳〵とあるべし、いづれも立身出世の望みを持たぬはなく、各自ことは異りて、出世の向きも種々なるべけれど、名を揚げ家をおこしてなど、これを誰しも基礎なり、汝の思ふ如く一筋繩に此望みの叶ふものとせば、世はえら者の巢に成りて、闇夜のはち合せ危かるべきを、十分が九分は屑にして、心寛くも手段の上手なる人が其一分の利は占むるぞかし、小と大との差別を知りたらば、田原が鞏となるを恥とは言ふまじき筈、其袖の下にかくれて、これに操らるゝと思へば口をしくもあれ、我が爲の道具につかひて、これを足代にとすれば何の恥かしきことか、却つて心をかしかるべし、誹はほまれの裏なれば、群雀の囀りかしましとても、垣のもとの諸聲は天まで屆かず、雲をけり風にのる大鵬の、嬉しきは此姿ならずや、近くたとへを我女同志にても見よ、彼の田原殿が奥方は京の祇園の舞妓とかや、氏ははるかに劣りし人とか、尋常一樣の娘にて過ぎなば、前垂れ襷の緣をはなれず、井戸端に米やかしぐらん、勝手元に菜切庖丁や握るらん、さるを卑賤しき營業より昇りて、あの髭どのを小き手の中に丸め奥方とさへ成り澄ませば、そしりは物のかげに隱れて名は公の席にも高く、田原夫人と並べ書けるが、公侯伯子の誰夫人にも劣ることか、慈善會、音樂會、名は聞きながら見ることの難き人さへあるに、幹事とかや何とかや、それは未だ小さし、事ある時はおほけなき御前にも出づるとぞ、これを我等が上に

比ぶれば、空に流るゝ銀河と、つちに埋るゝ溝川との違ひあり、小き貞婦孝女は遂に彰はるゝ事なくして、うき世の巾利は此たぐひの人なるぞや、なき人の上に批點もいかゝなれど、汝が心根に似たりける父樣の、我れが我れがと思召しは奇麗なりしが、人をも世をも一包みにする量なければ小き節につながれて、我れと我が身を愚になしつゝ、それはまだしも、先にも我が身が言ふ如く、遇はぬ浮世に何事の望みも捨てゝ、苔に雨きくたのしみを、茅が軒ばに味ひたらば、別に長閑けき月日ありて、それは又其筋に面白かるべけれど、かなしきは生にえの人の事ぞかし、すき間もる風霜夜さむけく、薄き衣に妻子の可愛さしみ〴〵と身にしみれば、一日半夜やすらけき思ひはなく、身はけがれざる積りにて汚き人の下に使はれ、僅かの月給に日歷にひとしき働きをして、長からぬ生涯を月もなく花もなく畢り給ひしは汝とても知れるが如し、されば汝が心根の清く尊く美くしく立派には聞えたれど、仕種は父樣の二の舞にて、笑止や小さき結搆人にて終りやせん、と言はゝ堪へぬ心に腹もたつべし、母は汝が爲をおもへば、怒る、はらたつ、何の憚りはせぬぞや、よしや汝が望みの判事試驗に、首尾よく及第して奏任のはしに列りたりとも、田舍まはりに幾年を渡り、猶その上に種々の規則にまばらるれば、花の都に名を揚げて世間の耳目を集むるほどの事は、保證の印のまかとゆして、無しと言ふとも

誤りはあるまじ、一生を秤にかけ尺にはかり、これほど〳〵限りある圖の中に、身は目に見えぬ細につながれ、人の言葉を守り人の指圖に働き、功は後の世に殘る事もなく、死しては知己に吊はれ子孫に祭らるゝそれ丈を差別にして、さのみ犬猫と變りもなく、夢と暮らし烟と消え、それにて汝は滿足なか、夢ならば彌勒の世までを夢につゝんで、嘘も誠も偽りも、美しきも醜きも一呑みに呑みつくして、此世の中に高く飛ぶ心は無きか、いかにぞや與之助、返事のなきは不承知か、口をしや我が思ふ半をも解し得ず、汝はまだいさゝかの情に引かるゝと見えたり、其恐かしき性根とは知らで思ひを碎きしは我があやまりよ、今は何ごとも口入れなすまじければ萬汝の勝手たるべし、否、お新故のめゝしさならずとは言譯、これに引かるゝ心ならずば、いつか一度は持つべき妻の、口約束ばかり何の大事かは、田原に不足は言ふまじき。答と責められて與之助、我れを白痴にしたりける母が詞と癇癪のむら〳〵と加へて、厭で御座ります、田原もいやお新もいや、諸事萬事氣に入りませぬと、有りし昔の悪あがきに、强情はりける時の面かげを其まゝ、折角のお近が談義は揉みくちゃにしてのけられたり。

其四

これは瀬川さま、ようこそと玄關に高き婢女が聲を、耳とく聞きて、膝にねぶれる小猫をおろし、よみさしの繪入新聞そこの茶だんすの上にのせて、お珍らしや何風に吹かれ給ひてぞ、谷中の道はお忘れなされしかと存じましたに、と障子の内より美くしき聲をもらせば、西北か、但し南か、天氣豫報にも見えざりし曇りの何處やらに出來て、肝癪にうやもやの雲が沸きたれば、お辰樣が扇の風にでも拂ひてほしく、お宿もとまで罷り出たる次第と例に似ぬ與之助がをかしき詞に、お辰座をたちて迎へながら、大分御機げんで御座んすの、梅見のお歸途か、橋本あたりのお名殘と見えまする、さりとはお土産もなしに御不心中やと笑へば、それ處の勢ひかと、與之助も笑ひて、さし出す友仙のふとんの素人めかぬを引寄せ火ばちの向ひ合せに座をしめれば、ほんにお顏色もよからず、御不快か、但しは例のぬゝ樣が我まゝからの肝癪に、母樣したゝか困らせ給ひて、お足の向くまゝ此方角へお越しなされしか、どの道うれしからぬお顏色と、圖ぼしをさゝれて其通りとも言ひかねけり。

むかし覺ゆる姥櫻の色はなけれど蔭ゆかしき美人の末の四十女、切髪姿に被布の好みも何處やら洒落て、瓦人なき後の世渡りは昔覺えの三味り流石とはゝかりて、月琴の師と聞くゝをかしき、お辰は長羇宇に一服すひて與之助に手渡しゝつ瀬川さま私の言ふは當りましたろ、よい加減になされませや、さもなくてさへ母樣の御苦勞は山ほどなるに、よい年しての大供樣が、髭くひ反らして甘ゆるは可愛けれど、すねるぢれる、何で御坐ります、お腹が立たば寢かしてお置きなされと片頬に笑みてたしなめれば、巽見は眞平、やう〳〵逃げのびて、此處で二の矢は御免蒙りたし、理屈は捨てゝ陽氣に面白く、我が常は知り抜き給ふお辰樣が匙加減に、嬉しくをかしと思ふ話を聞かせ給へといへば、それは造作もなき事、春さく堤の花よりも美しく、秋てる中洲の月よりも清く歌舞の菩薩が手を畫くす物の音も及ばねば、お前樣がお好きの畫や歌や何の〳〵、見れば嬉しく、聞けば床しく、ぢれも癖も皆をさまりて、思ひ出してさへ魂のふらつくやうな事が御坐んす、とは又何ぞと問へば、身邊の新聞をつきつけて、それ此處に、と指さすは新の字、これは解らぬこと禪僧が問答でもあるまじと笑へば、お辰眞面目に、眞言の秘密で御坐んすぞえ、其字を一目御覽じるよりお胸に現はれる影は可愛らしき島田髷にじやばらの結び下げ、兄樣此字は何と讀みますると御本を前に畏まりしお姿が見えます筈、何と無類にお嬉しかろと、言了りておほゝと笑へば、馬鹿なと一言苦しげに笑ふ。

戯言は戯言、お新樣といふ稚馴染の可愛らしき方があれば他處にお心の散らぬは無理ならねど、全躰あゝお孃をどうなさる思召しぞや、初春の三日の歌がるたに、其美しきお顏を見せま

したは私の科なれど、誠の罪は何處やらのお人と田原がことに話の移れば、それを今日は扳きにして貰ひたし、氣色のすぐれず頭の痛きに、ぶらりと家を出でたれど、さして面白き處もなければ、常に愛きことを知らず顔の、此宿には定めし腕のすくやうな事もとて來りけるものを、いぢめられては何の甲斐もなしと迷惑がれば、どうでも嬰兒樣は猿聖の嘶でなくばお氣に入るまじ、胸のすくやうなとても氣の利たもので一口といふ宿がらでなければ、ねゝ樣相應これで我慢なされませと、甘味にそへて差出す茶の浮かすはお手のものと知るや知らずや。

其五

我れながら解しがたき心のいづ方に向ひてすゝむらん、あとにも先にも今日までに逢ひみしは初春の三日、年始まはりの屠蘇の醉ひ、目もとにあらはれて心は夢ところげこみし谷中のやどに、うつくし人の寄り合ひて今宵は歌留多の催し、お迎ひの使ひをもあげたかりしに、ようこその御入來と喜ばれて、若きものゝならひ與之助いやならぬ心地のして、つひ其まゝにお仲間入りの源平合戰、組わけの三たびが三たび連れになりしはお辰が門下に隨一のお家がら、例の田原どのが愛子にお廣さまとて、父さま似の色は白からねど、娘ざかりは山茶も出ばなの色ふ

かく、派手ずきの母樣がお好みとありて、模樣も花やぎたる薄藤の中振袖、もれてぞにほふ八つ口の緋ちりめん、人目をうばふ織ものに、帶は繻珍か夏雄の彫りのばちんの金具は滝に鯉、はつきりとせし氣象はとりなり活潑とおもしろく、勝ちての喜び、まけての腹たち、我儘だほど憎からぬお人なりける、されば與之助とても其おもかげの空にうかべば、母が前に斷りたるほど實いやといふにはあらねど、男の身として少しうれしからぬ筋もあり、かつはお新がうらみの心にかゝれば、いづれにせよ胸のうちには屹とせし定まりもなく、何が何やら五里の霧中にさまよふやうにて、月も花もはるかの彼方におぼめきながら、ならべ得がたき處に悶はおこりて人しれぬ苦勞この間にあり、されば眞向よりの母が異見に疳癪の火の手つのりて、よしさらば立派に我戀を通して見すべし、馬鹿なことをと舊ひたちしは一時、今朝の勢ひにては谷中に足のむくべくもあらず、もとより此處は由緒のかげ、むらさきの一もと根ざしはほかならぬに、行かばかならず彼のことを言ひ出すべし、さては五月蠅しとて行かねばそれにても事のすむべきを、むしやくしやとせし思ひの晴るゝ處なければ、暫時にても此苦のわすらるゝやう、その一條は面倒なれどお辰が話のをかしきは聞きたくなきにもあらで、よし例の話の出でたらば、あたまから亂離荒廢にこなして、言葉のたくみをどれほどに并ぶるとも、知らぬ知らぬ

と亂暴に狼藉に蹴退けたらば、いかなお辰も閉口して二の句は出まじ、と心がまへをせしやらせぬやら、我れもわからぬ料簡にて谷中の扉をたゝきぬ。

行末は八重の汐路に大船うかべて、空や波なる青海原とても、源は山路の苔のつゆ、さてもわけなしのお弱年さまとにらむ目もとに何見えざらん、問はねどしるき與之助が心の宙宇に迷ふ有樣までそれと呑みこめば、思ひしには異りてお辰さのみ田原がことも語らず、案じたるよりは產むの安きもてなしに、恐れてよりつかざりし日ごろの馬鹿らしさ我れと笑はれて、母が前におこりたる疳癪の雲もやう〳〵散ずれば、おのづから詞に花も咲きて聲だかに笑ふやうにもなれば、時分をはかりてお辰、のう瀨川さま、人は何時どのやうな事で苦勞するやら知れませぬもの、うき世を切り髮の今日この頃、我身にかゝる浮雲さへ大方は拂ひつくして、心の月のたかく澄むやうにと願ひながら、さて左樣もならぬもの、見きくにつけて人の哀れぞと知らぬ顏して過ぐされねば、醉狂らしき心配に身さへやせて、一人やきもきと氣はもめども、肝心の御本尊さまがいたちの道きりでは困るでは御坐んせぬかと恨まれて與之助、それはお氣の毒さまと輕くすます言葉も出かねて、左樣いふ次第ではなしなどゝ言譯をなしける、お辰いよ〳〵眞面目に、弟子は子もおなじなれば我身も可愛きあのお孃の爲、早く埒のあかせましたけれ

ど、それは一筋、お前さまのお情實も酌まぬでは御坐んせぬ、まゝごとの昔より別れて今ではお前さまお一人をたよりの、お新さま可愛しとあるは御尤、言譯あそばすほどがをかしく、左樣ありてこそ嬉しきお心を喜んで居りまする、なれども田原さまが事とてあのまゝでは慢かれもすまじく、我れさへよくば他人は勝手と其やうな無茶は平常の御氣質とてお言ひになる譯が無ければ、どうでも二道にまよひて御苦勞なさるので御坐りましよ、おのづから母樣には仰せにくきことも私には御遠慮の入らぬ筈なれば、何ごともお打あけなされて御相談下さりませやと、をさな子に飯粒くゝめるやうな申分を、さすが亂暴に狼藉に言ひやぶらるゝものでなければ、與之助少し勝手のかはりて、しばらくは默然となりぬ。

次第に我が本陣へきりこまれて、いづれにか返答せねばならぬやうになれば、いつまで啞のまねも出來ねば思ひきりて與之助、我れはお辰さまがいつもの給ふゝ樣なれば、其やうな義理はりのむづかしきことは知らず、粹とやら通とやら鶯なかせし末の人こそ奥ふかきおもひやりは有るもの、何となりとも察してよきやうに計らひ給へ、我れは小豆まくらが相應なればと、美事とぼけた積りでやれば、こはんに左樣で御坐んしたもの、海山三千年の我れに比べて力まけのせし可笑しさ、知らざるを知らずとせよも生意氣らしけれど、ねゝ樣の小癪だては入らぬ事

なれば、以來は何事も我身にまかせてお小言は仰せられますなやと言へば、萬事よろしくお差圖をと、與之助はどこまでも戯言のつもりなりしが。

其六

その次の日お辰田原どのに車を飛ばせて何事を言上しけん、與方の眉ひらけて見えさせられしが、歸るとそのまゝ、呼出しに人の魂をふらつかせし昔より、書きなれたる長文の滯るところなく、我れながらをかしさを水いれの水にそゝいで、する墨のあとこまやかに、筋は立派に萬歳を祝して、きのふは與之助さまお入り嬉しく、然るべく取はからへと仰せのありけるまま、唯今例の。に參りて、與方まで委細申上げぬるに、お喜びのほどはさる方に推し給へ、猶この後のさま〳〵につきて、お打合せいたしましたき事の多ければ、みづから參上て、とはおもへど、少しさゝはる事のありて今日明日自由のきかねば、おはこびの願ひましたきよしをお近のもとまで申送りける、此文を受とりたるお近が喜びより、あきれはてし與之助が、あまりの事に戯れとも思はれず、さりとて青筋たてゝ怒りもせば、いよ〳〵笑はれて茶にされて、我が言條は何處にか立たすべき、母はもとより同意も同意、望みに望む所なれば、我がもしも厭な

どゝ言はゞ、お辰と同盟してどのやうの難儀を言出すやも測られず、彼方よりも此方よりもく〳〵と面倒を持ちこまれて、長く苦境に身を置かんより、今後のことは今後の處し方もあるものをと、詮方なしの斷念めにお辰がいふ嬰兒さまの本色か、うま〳〵深淵に引入れられしを悔みながら、手玉に取られて手も足も出ぬやうになりぬ。

お近はもと〳〵お辰とは意氣の合ふといふ中にもあらず、亡き良人が親友の寡婦さまといふばかり、平常は與之助の好きて通ふをさへ苦々しく言ひけるも、此度のはからひの如何に說きてか我手にさへ乘らざりしを鎭めて、うれしき順序のはこびける喜ばしさに、お新のことをさへ打あけて談合するやうになりける、狹き家のうちの出來ごとを、かくしたりとも遂には知れずに居まじく、知りたりとて故障のあるではなけれど、氣まづき思ひをさせるだけが厭なれば、おもてだちたる事の整はざるさきに、何とか好き手段もあらば、お新が爲の後來もわるからぬやう、人の妻にといひては未だ與之助が事情をしるまじき彼の娘が、應とはかならず言ふまじければ、行儀見習ひもをかしけれど、何とか名をつけて華族がたの大奥にでも一時の御奉公に出だすか、ともかくも一二年のほど家をはなしたらば、双方に忘れ草のつまるゝ種にもなりて、其後に聟をとるなり嫁にやるなり、無關係の人にならば事の易かるべしと、此やうの話をなし

ける、その中に與之助、此場合になりて我身の方はゆるぎの取れぬ事なるを知りつゝ、あかず惜しき心の十分に殘れば、取とめて我がものにの念は今さら出すべきにもあらねど、何心なく罪なき人を、寄り集りて術計のうちに陷れる如きを憐れめど、我が喙をはさみたらば其處を怪しくとられて、いよ〳〵お新を邪魔ものにさるゝ種ならんも知れねば、何事にまれ話の始まりて、いざといふ時に臨まば、お新をつゝきて當人より厭を言はする外に途はなし、お新の厭とかぶりを振りなば、誰れも無理にとは言ひ難きに、我れも共に詞をそへて理屈をつくり、老ばしの時日を延ばすほどには、天に風雨の變あるとおなじく、はからぬ處よりはからぬ事も出で來るものなれば、今までの事の目茶になりて、田原が事の彼方より破れて來らぬとも言ひ難しなどゝ、人は厭ふ破綻といふ事を空に願ひて、我心にもあらずはじまりたる緣なれば、萬づ申譏のやうに誠しからず、今日の我身の成りゆきの夢のやうなるに、いつぞは覺めて氣樂に愉快の舊にかへり、お辰、田原などゝいふ文字の腦裏をはなれて、大川に足を洗ひたるほど、さっぱりと爲したきものよと思ふに、生憎やお新があはれいぢらしのやうなる無邪氣の樣子にて、我れをいさゝかも見よげにとの親切より、衣類の洗ひそゝぎ扨は縫はりの暇なく、夢にも母子が心をさとりたらば斯くはなすまじき朝夕のやさしさ、其身の爲には鬼にも似たりける伯母を、知らぬ心の介抱なほざりならず、今日は谷中に行きて足の疲れぬといへば、少しおさすり致しましよと取つく憐れさ、常は何とも思はざりしことが目に映りて、何ともいはれぬ厭らしき氣もちの爲しける。

其七

とゞめんと願ふは與之助が心一つにて、出ださんとつとむるは多數なるに、八方にまはしたる手の屆きて、よろしき奉公口ふたつ見當りぬ、一つはお辰の手より出でゝ、霞が關にさる名高き舊諸侯の奥づとめ、むかしと違ひて御質素との表面なれど、衣類もち物の支度なみ〳〵の嫁入りよりは仰山なれば、御奉公人とても小商人小官吏などの娘小供はなく、よしある孃さま方の上つ方を見習ひにお上り遊ばすなれば、お行儀はもとより、志しがあらば諸藝に通じる事もなりて、三五年の後にはやさしき身代に及ぶまじき拜領ものもありて、よろづ富貴に結構なるお邸ごのこと、一つは瀨川が舊知己に折々は出入りも爲したりし黑澤何がしと呼ぶお畫師どの、浮世に大家名流の聞えも無けれど、斯道にあつき志しは却て其大家などゝいはるゝを厭へば、おのづから隱逸といふ風もある隱居さまにて、家をゆづりし息子の律義なるにかゝり見る煩は

しさもなければ、先祖が生國ときく甲斐の差手に、礒千烏君が千代をば八千代となく景色さぐりがてら、厭氣の出づるまであのあたりの山家にまぎれ引こもらんといふ、妻は此地に育ちたる人なれば、話しがたきもなき山猿の中に這入りて、さぞ淋しからん月日を思へば、いつそ家にといきりてお歸りを待つ方がよしとも思へど、年ごろ睦ましき中は月花のいづくにも手を拐へぬ時なく、寸の間もはなれざりしものを、今さら一人は遣りともなきに、我まゝなれども此處より一人手廻りの婢をつれたく、お新さんを良き口あらばとの頼みなりしが、あのやうに可愛くしかも柔順しき娘を、我子同樣に伴ひもしたらば、畵ごゝろもなき我山ずみの憂さも慰むべく、萬事に嬉しき連れなるべけれど、良人にしたがふ我れさへさのみ進みては行きともなき山の中へ、花の都を捨てゝ若き人の行かんともいはれまじく、又よき御奉公をと望まるゝに貧乏書師がお預かり申したしとは口巾たくてお願ひも申されねばと、壁訴訟のやうに妻なる人の來て語りたる、此二つが此頃の題になりけり。

その身一生の利害を說きて、はじめ奉公をと勸めたる時、いぶかしく怪しき事におもひて、俄かに承知はなすまじと思ひたるに、お新さのみは驚きもせで、思ひ設けたる如く出でゝ行くべきよしを合點しける、與之助かげに廻りて心を引き見れば、それは伯母さま兄さまのお傍にいつまでも暮らさるゝものならばそれに上こす喜びはなけれど、左樣あられぬが世のならひと聞けば、これも詮なきこと、うき世といふものゝ力はいかほどのものやら目には見えねど、かなしきも嬉しきも我が手業にあたはぬことゝあきらめぬる身は、つらき時はつらき時の來りぬと思ひ、嬉しき時は嬉しき時とおもふ、其ほかには何とも爲れぬでは御座りませぬか、と思ひきりのよきに與之助といめもならず、さらば同じき奉公といへども、立派にうつくしき與づとめの、いさゝか氣骨は折れるにせよ遊ぶにひとしき多人數の中にまじりて、絹布づくめに勤めらるゝ華族の奉公ならば、その身の爲の行末もよく、世間の聞えも宜かるべきに、お新はいかにぞと問へば、お言附ならば是非がなけれど私に擇ばして給はらば華族さまは厭といふ、さては黒澤の方がよしとか、我意に氣樂なるには相違なけれど、行々の事につきて何ほど頼もしき宿でもなく、それも東京にでも居ることならば氣やすさに任せて、もとより奉公などゝいふでは無く奥樣に細工ものでも習ふ料簡にて行くも宜けれど、今が今田舍にこもりて、はて白雲の雲水も同樣なる彼の人々につきて何處まで行かるべき、されば先方よりも遠慮して欲しとは明白に言はぬほどなるを、何故に又妙な處をも望むものかなといへば、黒澤さまはお畵師では御座りませぬか、兄さまもお畵はお好きなるに、私は畵が學びたう御座ります、畵をならびて如何

するつもりぞと再問へば、戀しき時にお姿をかきても慰められまする事故といはれて、與之助あとは聞くことの出來ず、一人胸のうちに泣きける。

かくと事の定まりぬる後は猶豫もなく支度のとゝのひて、一日なりとも長くとゝめんとおもふは與之助ばかり、表面よりは黒澤が出立の近づきぬと告ぐるに、田原が方は何といふ目だちたる事もなけれど、裏面の交通やう〳〵はじまりて、お近が胸にはひや〳〵とする事のなきにもあらねば、これは一日もはやくたゝせたき思ひ、かゝる時は是非無差別の日のかげにお近が念慮の勝をしめて、いよ〳〵明日のあけの一番に、上野發の汽車にてといふ段になりぬ、お新は何ごとを思ふらん、言はぬおもひは人しるによしなけれど、一語にても意味の有りける詞の與之助には利き刃にてえぐらるゝやうに胸のくるしく、寢られぬ夜半の殘燈のかげ薄れゆくまゝに、やがては鳥もなくらん、かねも鶏かすべし、いざと敷居をまたぐ時、汽車の笛の音ひゞく時、やう〳〵烟りにかげ消えゆくとき、いかならんと思ひやる與之助より、さし手が磯に千鳥を友として、かなしき戀のおもかげぞ描くらん、ふびんやお新が心の裡。

軒もる月

我が良人は今宵も歸りのおそくおはしますよ、我が子は早く睡りしに歸らせ給はゝ與なくや思さん、大路の霜に月氷りて蹈む足いかに冷たからん、炬燵の火もいとよし、酒もあたゝめんばかりなるを、時は今何時にか、あれ、空に聞ゆるは上野の鐘ならん、二つ三つ四つ、八時か、否、九時になりけり、さても遲くおはします事かな、いつも九時のかねは膳の上にて聞き給ふを、それよ今宵よりは一時づゝの仕事を延ばして此子が爲の收入を多くせんと仰せられしなり。

火氣の滿たる室にて頸やいたからん、振あぐる鎚に手首や痛からん。

女は破れ窓の障子を開きて外面を見わたせば、向ひの軒ばに月のぼりて、此處にさし入る影はいと白く、霜や添ひ來し身内もふるへて、寒氣は肌に針さすやうなるを、しばし何事も打わすれたる如く眺め入りて、ほと長くつく息月かげに煙をえがきぬ。

櫻町の殿は最早寢處に入り給ひし頃か、さらずば燈火のもとに書物をや披き給ふ、然らずば机の上に紙を展べて靜かに筆をや動かし給ふ、書かせ給ふは何ならん、何事かの御打合せを御朋

友の許へか、さらずば御母上に御機嫌うかゝひの御狀か、さらずば御胸にうかぶ妄想のすて處、詩か歌か、さらずば、さらずば、我が方に賜はらんとて甲斐なき御玉章に勿躰なき筆をや染め給ふ。

幾度幾通の御文を拜見だにせぬ我れいかばかり憎しと思召すらん、拜さば此胸寸斷になりて常の決心の消えうせん覺束なさ、ゆるし給へ我れはいかばかり憎きものに思召されて物知らぬ女子とさげすみ給ふも厭はじ、我れは斯る果敢なき運を持ちて此世に生れたるなれば、殿が憎しみに逢ふべきほどの果敢なき運を持ちて此世に生れたるなれば、ゆるし給へ不貞の女子に計はせさせ給ふな、殿。

卑賤にそだちたる我身なれば初めより此上を見も知らで、世間は裏屋に限れるものと定め、我家のほかに天地のなしと思はゝ、はかなき思ひに胸も燃えじを、暫時がほども交りし社會は夢に天上に遊べると同じく、今さらに思ひやるも程とはし、身は櫻町家に一年幾度の出替り、小間使といへば人らしけれど御寵愛には犬猫も御膝をけがすものぞかし。

言はゞ我が良人をはづかしむるやうなれど、そも〳〵御暇を賜はりて家に歸りし時、箪と定まりしは職工にて工場がよひする人と聞きし時、勿躰なき比較なれど我れは殿の御地位を思ひ合

せて、天女が羽衣を失ひたる心地もしたりき。

よしや此緣を厭ひたりとも野末の草花は書院の花瓶にさゝれんものか、恩愛ふかき親に苦を增させて我れは同じき地上に彷徨はん身の取あやまちても天上は叶ひがたし、若し叶ひたりとも汗は邪道にて正當の人の目よりはいかに汚らはしく淺ましき身とおとされぬべき、我れはさても、殿をば浮世に餞らせ參らせん事くち惜し、御覽ぜよ奥方の御目には我れを憎しみ殿をば嘲りの色の浮かび給ひしを。

女子は太息に胸の雲を消して、月もる窓を引たつれば、音に目さめて泣出づる稚兒を、あはれ可愛しいかなる夢をか見つる乳まゐらせんと懷あくれば笑みてさぐるも憎からず、勿躰なや此の子といふ可愛きもあり、此子が爲我が爲不自由あらせじ愛き事のなかれ、少しは餘裕もあれかしとて朝は人より早く起き、夜は此通り更けての霜に寒さを堪へて、袖よ今の苦勞はつらくとも暫時の辛防ぞしのべかし、やがて伍長の肩書も持たば、鍛工場の取締りとも言はれなば、家は今少し廣く小女の走り使ひを慨きて、其かよわき身に水は汲まさじ、我れを腑甲斐なしと思ふな、腕には職あり身の健かなるに、いつまで斯くてはあらぬものをと口癖に仰せらるゝは、何處やら我が心の顏に出でゝ卑しむ色の見えけるにや、恐ろしや此大恩の良人に然る心を

持ちて荷にも其色の顯はれもせば。

父の一昨年うせたる時も、母の去年うせたる時も、心からの介抱に夜も帶を解き給はず、咳き入るとては脊を撫で、寐がへるとては抱起しつ、三月にわたる看病を人手にかけじと思召しの嬉しさ、それのみにても我れは生涯大事にかけねばなるまじき人に不足らしき素振のありしか、我れは知らねど然もあらば何とせん、果敢なき樓閣を空中に描く時、うるさしや我名の呼聲、袖、何せよ彼せよの言附に消されて、思ひこゝに絶ゆれば恨をあたりに寄せもやしたる、勿躰なき罪は我が心よりなれど櫻町の殿といふ面かげなくば胸の鏡に映るものもあらじ、罪は我身か、殿か、殿だになくば我が心は靜なるべきか、否、かゝる事は思ふまじ、呪詛の詞となりて忌むべきものを。

母が心の何方に走れりとも知らで、乳に飽きれば乳房に顏を寄せたるまゝ、思ふ事なく寐入し兒の、頬は薄絹の紅さしたるやうにて、何事を語らんとや折々曲ぐる口元の愛らしさ、肥えたる腮の二重なるなど、斯る人さへある身にて我れは二心を持ちて濟むべきや、ゆめさら二心は持たぬまでも我が良人を不足に思ひて濟むべきや、はかなし、はかなし、櫻町の名を忘れぬ限り我れは二心の不貞の女子なり。

兒を靜かに寢床に移して女子はやをら立上りぬ。眼ざし定まりて口元かたく結びたるまゝ、疊の破れに足も取られず、心ざすは何物ぞ葛籠の底に藏めたりける一二枚の衣を打返して淺黄縮緬の帶揚のうちより、五通六通、數ふれば十二通の文を出して元の座へ戻れば、燈のかげ少し暗きを捻ぢ出す手もとに見ゆるは殿の名、よし匿名なりとも此眼に感じは變るまじ、今日迄封じを解かざりしは我れながら心強しと誇りたる淺はかさよ、胸のなやみに射る矢のおそろしく、思へば卑怯の振舞なりし、身の行ひは清くもあれ心の腐りの棄難くば同じ不貞の身なりけるを、卒さらば心試しに拜し參らせん、殿も我心を見給へ、我が良人も御覽ぜよ。

神もおはしまさば我家の棺に止まりて御覽ぜよ、佛もあらば我が此手元に近よりても御覽ぜよ、我が心は清めるか濁れるか。

封じ目ときて取出せば一尋あまりに筆のあやもなく、有難き事の數々、辱なき事の山々、思ふ、戀ふ、忘れがたし、血の涙、胸の炎、此等の文字を縱横に散らして、文字はやがて耳の側に恐ろしき聲もて呼くぞかし、一通は手もとふるへて卷收めぬ、二通も同じく三通四通五六通より少し顏の色かはりて見えしが、八、九、十通十二通、開きては讀みよみては開く、文字は目に入らぬか入りても得よまぬか。

長なる髪をうしろに結びて、古たる衣になへたる帶、寢れたりとも美貌とは誰が目にも許すべし、あはれ果敢なき塵塚の中に運命を持てりとも、汚き垢れは禁らじと思へる身の、猶何處にか悪魔のひそみて、あやなき物をも思はするよ、いざ雪ふらば降れ風ふかば吹け、我が方寸の海に波騷ぎて沖の釣舟おもひも亂れんか、凪ぎたる空に鵑啼く春日のどかになりなん胸か、櫻町が殿の面影も今は色くまで胸に浮べん、我が良人が所爲のをさなきも强て隱さじ、百八煩惱自から消えばこそ、殊更に何かは消さん、血も沸かば沸け炎も燃えばもえよとて、微笑を含みて讀みもてゆく、心は大海にあたりて濁世の垢を流さんとせし、某の上人がためしにも同じく、戀人が涙の文字は幾筋の滝の迸りにも似て、氣や失はん心弱き女子ならば。

傍には可愛き兒の寢姿みゆ、膝の上には無情の君よ我れを打捨て給ふかと、殿の御聲あり〳〵聞えて、外面には良人や戻らん更けたる月に霜さむし、たとへば我が良人今此處に戻らせ給ふとも、我れは恥かしさに面あかみて此膝なる文を取かくすべきか、恥づるは心の疚しければなり、何かは隱さん。

殿、今もし此處におはしまして、例の辱けなき御詞の數々、さては恨みに憎みのそひて御聲あらく、さては勿躰なき御命いまを限りとの給ふとも、我れは此眼の動かんものか、此胸の騷がんものか、動くは逢見たき慾よりなり、騷ぐは下に戀しければなり。

女は暫時恍惚として其すゝけたる天井を見上げしが、孤燈の火かげ薄き光を遠く投げて、おぼろなる胸にてり返すやうなるもうら淋しく、四隣に物おと絶えたるに霜夜の犬の長吠すごく、隙間もる風おともなく身に迫りくる寒さもすさまじ、來し方行く末おもひ忘れて夢路をたどるやうなりしが、何ものぞ俄にその空虛なる胸にひゞきたると覺しく、女子はあたりを見廻して高く笑ひぬ、其身の影を顧みて高く笑ひぬ、殿、我良人、我子、これや何者とて高く笑ひぬ、目の前に散亂れたる文をあげて、やよ殿、今ぞ別れまゐらするなりとて、目元に宿れる露もなく、思ひ切りたる決心の色もなく、微笑の面の手もふるへで、一通二通八九通、殘りなく寸斷に爲し了りて、熾んにもえ立つ炭火の中へ打込みつ打込みつ、からは灰にあとも止めず煙りは空に栅引き消ゆるを、うれしや我執着も遺らざりけるよと打眺むれば、月やもりくる軒ばに風のおと淸し。

うつせみ

(一)

家の間數は三疊敷の玄關までを入れて五間、手狹なれども北南吹ぬけの風入りよく、庭は廣々として植込の木立も茂ければ、夏の住居にうつてつけと見えて、場處も小石川の植物園にちかく物靜なれば、少しの不便を疵にして他には申す旨のなき貸家ありけり、門の柱に札をはりしより大凡三月ごしにもなりけれど、いまだに住人のさたまらで、主なき門の柳のいと、空しくなびくも淋しかりき。家は何處までも奇麗にて見こみの好ければ、日のうちには二人三人の拜見をとて來るものも無きにはあらねど、敷金三月分、家賃は三十日限りの取たてにて七圓五十錢といふに、それは下町の相場とて折かへして來るはなかりき、さるほどに此ほどの朝まだき四十に近かるべき年齢の男、紡績織の浴衣も少し色のさめたるを着て、至極そゝくさと落つきの無きが差配のもとに來りて此家の見たしといふ、案内して其處此處と戶棚の數などを見せてあるくに、其等のことは片耳にも入れで、唯四邊の靜にさはやかなるを喜び、今日より直に

お借り申しまする、敷金は唯今置いて參りまして、引越しは此夕暮、いかにも急速では御座りますが直樣掃除にかゝりたう御座りますとて、何の仔細なく約束はとゝのひぬ。お職業はと問へば、いえ別段これといふ物も御座りませぬとて至極曖昧の答へなり、御人數はと聞かれて、其何だか四五人の事も御座りますし、七八人にもなりますし、始終ごた〳〵して埒は御座りませぬといふ、妙な事のと思ひしが掃除のすみて日暮れがたに引移り來りしは、合乘りの幌かけ車に姿をつゝみて、開きたる門を眞直に入りて玄關におろしければ、主は男とも女とも人には見えじと思ひしげなれど、乘り居たるは三十許の氣の利きし女中風と、今一人は十八か、九には未だと思はるゝやうの病美人、顏にも手足にも血の氣といふもの少しもなく、透きとほるやうに蒼白きがいたましく見えて、折柄世話やきに來て居たりし差配が心に、此人を先刻のそゝくさ男が妻とも妹とも受とられぬと思ひぬ。

荷物といふは大八に唯一くるま來りしばかり、兩隣りにお定めの土產は配りけれども、家の內は引越らしき騷ぎもなく至極寂寞とせしものなり。人數は彼のそゝくさに此女中と、他には御飯たきらしき肥大女および、其夜に入りてより車を飛ばせて二人ほど來りし人あり、一人は六十に近かるべき人品よき剃髮の老人、一人は妻なるべし對するほどの年齢にてこれは實法に小

さき丸髷をぞ結ひける、病みたる人は來るよりやがて奥深に床を敷かせて、括り枕に頭を落つかせけるが、夜もすがら枕近くにありて悄然とせし老人二人の面やう、何處やら寂顔に似た處のあるやうなるは、此娘の若しも父母にてはなきか、彼のそゝくさ男を始めとして女中ども一同旦那様御新造様と言へば、應々と返事して、男の名をば太吉太吉と呼びて使ひぬ。

あくる朝風すゞしきほどに今一人車を乘りつけゝる人のありけり、紬の單衣に白ちりめんの帶を卷きて、鼻の下に薄ら髯のある三十位のでつぷりと肥りて見だてよき人、小さき紙に川村太吉と書て貼りたるを讀みて此處だ〳〵と車より下りける、姿を見つけて、おゝ番町の旦那様とお三どんが眞先に襷をはづせば、そゝくさは飛出していやお早いお出、よく早速おわかりになりましたな、昨日まで大塚にお置き申したので御座りますが何分もう、その何だか頻りに嫌になりなされて何處へか行かう行かうと仰しやる、仕方が御座りませぬで漸とまあ此處をば見つけ出しまして御座ります、御覽下さりませ一寸斯うお庭も廣う御座りますし、四隣が遠うございますので御氣分の爲にもよからうかと存じまする、はい昨夜はよくお眠になりましたが今朝ほどは又少しその、一寸御様子が變つたやうで、ま、いらしつて御覽下さりませ。と先に立て案内をすれば、心配らしく髭をひねりて、與の座敷に通りぬ。

(二)

氣分すぐれてよき時は三歳兒のやうに父母の膝に眠るか、白紙を切て姉様のお製に餘念なく、物を問へばにこ〳〵と打笑みて唯はい〳〵と意味もなき返事をする温順しさも、狂風一陣梢をうごかして來る氣の立つた折には、父様も母様も兄様も誰れも後生、顔ゞ見せて下さるな、と物陰にひそんで泣く、聲は脇を絞り出すやうにて私が悪う御座りました、堪忍して堪忍してと繰返し〳〵、さながら目の前の何やらに向つて詫るやうに言ふかと思へば、今行まする、今行まする、私もお跡から參りまするとて日のうちには看護の隙をうかゝひて驅け出すこと二度三度もあり、井戸には蓋を置き、きれ物とては鋏一挺目にかゝらぬやうとの心配りも、危きは病ひのさする業かも、此纖弱き娘一人とり止むる事かなはで、勢ひに乘りて驅け出す時には大の男二人がゝりにてもむつかしき時のありける。

本宅は三番町の何處やらにて表札を見ればむゝ彼の人の家かと合點のゆくほどの身分、今さら此處には言はずもがな、名前の恥かしければ病院へ入れる事もせで、醫者は心安きを招き家は僕の太吉といふが名を借りて心まかせの養生、一月と同じ處に住へば見る物殘らず嫌になりて、

次第に病ひの募ること見る目も恐ろしきほど凄まじき事あり。

當主は義子にて此娘こそは家につきての一粒ものなれば父母が歎きおもひやるべし、病ひにふしたるは櫻さく春の頃よりと聞くに、それよりの晝夜瞼を合する間もなき心配に疲れて、老たる人はよろ〳〵たよ〳〵と二人ながら力なさゝうの風情、娘が病ひの俄かに起りて私はもう歸りませぬとて驅け出すを見る折にも、あれ〳〵何うかして呉れ、太吉々々と呼立るほかには何の能なく情なき躰なり。

昨夜は夜もすがら靜に眠りて、今朝は誰れより一はな憑けに目を覺し、顏を洗ひ髪を撫でつけて着物もみづから氣に入りしを取出し、友仙の帶に緋ちりめんの帶あげも人手を借りずに手ばしこく締めたる姿、不圖見たる目には此樣の病人とも思ひ寄るまじき美くしさ、兩親は見返りて今更に涙ぐみぬ、附そひの女が粥の膳を持來りて召上りますかと問へば、いや〳〵と頭をふりて意氣地もなく母の膝へ寄そひしが、今日は私の年季が明ますかと問へば、歸る事が出來るで御座んしやうかとて問ひかけるに、年季が明るといつて何處へ歸る料簡、此處はお前さんの家ではないか、此ほかに行くところも無からうではないか、分らぬ事を言ふものではありませぬと叱られて、それでも母樣私は何處へか行くので御座りましやう、あれ彼處に迎ひの車が來て居ま

する、とて指さすを見れば軒端のもちの木に大いなる蜘蛛の巣のかゝりて、朝日にかゞやきて金色の光ある物なりける。

母は情なき思ひの胸に迫り來て、あれあんな事を、貴君お聞遊ばしましたかと良人に向ひて忌はしげにいひける、娘は俄に裝れかへりし而に生々とせし色を見せて、あのそれ一昨年のお花見の時ねと言ひ出す、何えと受けて聞けば學校の庭は奇麗でしたねえとて面白さうに笑ふ、あの時貴君が下すつた花をね、私は今も本の間へ入れてありまする、奇麗な花でしたけれども、う裝れて仕舞ました、貴君にはあれから以來御目にかゝらぬでは御座んせぬか、何故逢ひに來て下さらないの、何故歸つて來て下さらぬの、もうお目にかゝる事は一生出來ぬので御座んするか、それは私が悪う御座りました、私が悪いに相違ござんせぬけれど、それは兄樣が、兄が、あゝ誰れにも濟みませぬ、私が悪う御座りました、私が悪う御座りました堪して堪して堪してと胸を抱いて苦しさうに身を悶ゆれば、雪子や何も餘計な事を考へては成りませぬよ、それがお前の病氣なのだから、學校も花もありはしない、兄樣も此處にお出でなさつては居ないのに、何か見えるやうに思ふのが病氣なのだから氣を落つけて薗の雪子さんに成つてお呉れ、よ、よ、氣が附きましたかえと背を撫でられて、母の膝の上にすゝり泣きの聲ひくゝ聞えぬ。

(三)

番町の旦那様お出と聞くより雪や兄様がお見舞に來て下されたと言へど、顔を横にして振向うともせぬ無禮を、常ならば怒りもすべき事なれど、あゝ、捨てゝ置いて下さい、氣に逆らつてもならぬからとて義母が手づから與へられし皮蒲團を貰ひて、枕もとを少し遠ざかり、吹く風を背にして柱の際に默然として居る父に向ひ、靜に一つ二つ詞を交へぬ。

番町の旦那といふは口數少き人と見えて、時たま思ひ出したやうにはたゝと團扇づかひするか、卷煙草の灰を拂つては又火をつけて手に持て居る位なもの、絶えず尻目に雪子の方を眺めて困つたものですなと言ふばかり、あゝ此樣な事と知りましたら早くに方法も有つたのでしやうが今に成つては駟馬も及ばずです、植村も可愛想な事でした、とて下を向いて歎息の聲を洩らすに、どうも何とも、私は悉皆世上の事に疎しな、母もあの通りの何であるので、三方四方塀も無い事に成つてな、第一は此娘の氣が狹いからではあるが、否植村も氣が狹いからで、何うも此樣な事になつて仕舞つたで、私等二人が實に其方に合せる顔も無いやうな仕儀でな、然し雪をも可愛想と思つて遣つて呉れ、此樣な身に成つても其方への義理ばかり思つて情ない事

を言ひ出し居る、多少教育も授けてあるに狂氣するといふは如何にも恥かしい事で、此方から行くと家の恥辱にもなる實に憎むべき奴ではあるが、情實を酌んでな、これほどまで操といふものを取止めて置いただけ憐んで遣つて呉れ、愚鈍ではあるが子供の時から是れといふ不出來しも無かつたを思ふと何か殘念のやうにもあつて、眞の親馬鹿といふのであらうが平癒らぬほどならば死ねとまでも諦めがつきかねるもので、餘り昨今忌はしい事を言はれると死期が近よつたかと取越し苦勞をやつてな、大塚の家には何か迎ひに來るものが有るなどゝ騷ぎをやるにつけて母が詰らぬ易者などにでも見て貰つたか、愚な話しではあるが一月のうちに生命が危いとか言つたさうな、聞いて見ると餘り快くもないに當人も頻りと嫌がる樣子なり、まゝ、引移りをするが宜からうとて此處を捜させては來たが、いや何うも永持はあるまいと思はれる、殆んど毎日死ぬ死ぬと言て見る通り人間らしい色艶もなし、食事も丁度一週間ばかり一粒も口へ入れる事が無いに、そればかりでも身躰の疲勞が甚しからうと思はれるので種々に異見も言ふが、何うも病ひの故であらうか兎角に誰れの言ふ事も用ひぬには困りはてる、醫者は例の安田が來るので斯う素人まかせでは我まゝばかり募つて宜くあるまいと思はれる、私の病院へ入れる事は不承知かと何々聞かれるのであるが、それも何うあらうかと母などは頻にいやがるの

で私も二の足を踏んで居る、無論病院へ行けば自宅と違つて窮屈ではあらうが、何分此頃飛出しが始まつて私などは勿論太吉と倉と二人ぐらゐの力では到底引とめられぬ働きをやるから の、萬一井戸へでも懸られてはと思つて、無論蓋はして有るが往來へ飛出されても難儀至極なり、夫等を思ふと入院させやうとも思ふが何かふびんらしくて心一つには定めかねるて、其方に思ひ寄もあらば言つて見て呉れとてくる〳〵と剃たる頭を撫で〻思案に能はぬ風情、はあ〳〵と閑居る人も詞は無くて諸共に溜息なり。

娘は先刻の涙に身を揉みしかば、さらでもの疲れ甚しく、なよ〳〵と母の膝へ寄添ひしまゝ眠れば、お倉お倉と呼んで附添ひの女子と共に郡内の蒲團の上へ抱き上げて臥さするにはや正躰も無く夢に入るやうなり、兄といへるは靜に膝行寄りてさしのぞくに、黒く多き髪の毛を最惜しげもなく引つめて、銀杏返しのこはれたるやうに折返し折返し髷形に疊みこみたるが、大方横に成りて猥雑の姿なれども、幽靈のやうに細く白き手を二つ重ねて枕のもとに投出し、浴衣の胸少しあらはに成りて締めたる緋ぢりめんの帶あげの解けて帶より落かゝるも艶かしからで慘ましのさまなり。

枕に近く一脚の机を据ゑたるは、折ふし硯々と呼び、書物よむとて有し學校のまねびをなせ

ば、心にまかせて紙いたづらせよとなり、兄といへるは何心なく積重ねたる反古紙を手に取りて見れば、怪しき書風に正躰得しれぬ文字を書ちらして、これが雪子の手跡かと情なきやうなる中に、鮮かに認まれたるは村といふ字、郎といふ字、あゝ植村錄郎、植村錄郎、よむに得堪へずして無言にさし俯きぬ。

(四)

今日は用なしの身なればとて兄は終日此處にありけり、氷を取寄せて雪子の頭を冷す附添の女子に代りて、どれ少し私がやつて見やうと無骨らしく手を出ずに、恐れ入ます、お召物が濡れますと言ふを、いゝさ先させて見てくれろとて氷嚢の口を開いて水を搾り出す手振りの無器用さ、雪や少しはお解りか、兄樣が頭を冷して下さるのですよとて、母の親心附けれども何の事とも聞分ぬと覺しく、眼は見開きながら空を眺めて、あれ奇麗な蝶が蝶がと言ひかけしが、殺してはいけませんよ、兄樣兄樣と聲を限りに呼べば、こら何うした、蝶も何も居ない、兄は此處だから、殺しはせぬから安心して、な、宜いか、見えるか、え、見えるか、兄だよ、正雄だよ、氣を取直して正氣になつて、お父さんやお母さんを安心させて呉れ、こら少し聞分けて呉れ、

よ、お前が此樣な病氣になつてから、お父樣もお母樣も一晩もゆるりとお眠になつた事はない、お疲れなされてお痩せなされて介抱して居て下さるのを孝行のお前に何故わからない、平常は道理がよく解る人ではないか、氣を靜めて考へ直して呉れ、植村の事は今更取かへされぬ事であるから、跡でも懇に弔つて遣れば、お前が手づから香花でも手向れば、彼れは快く瞑することが出來ると遺書にもあつたと言ふではないか、彼れは潔く此世を思ひ切つたので、お前の事も併せて思ひ切つたので決して未練は殘して居なかつたに、お前が此樣に本心を取亂して御兩親に歎をかけると言ふは解らぬではないか、彼れに對してお前の處置の無情であつたも彼れは決して怨んでは居なかつた、彼れは道理を知つて居る男であらう、な、左樣であらう、核內一の人だとお前も常に褒めたではないか、其人であるから決してお前を恨んで死ぬ、其樣な事はある筈がない、憤りは世間に對してなので、既にそれは人も知つて居る事なり遺書によつても明かではないか、考へ直して正氣になつて、其後の事はお前の心に任せるから思ふまゝの世を經るが宜い、御兩親のある事を忘れないで、御兩親がどれほどお歎きなさるかを考へて、氣を取直して呉れ、え、宜いか、お前が心で直さうと思へば今日の今も直れるではないか、醫者にも及ばぬ、藥にも及ばぬ、心一つ居處をたしかにしてな、直つて呉れ、よ、よ、とら雪、

宜いか、解つたかと言へば、唯點頭いて、はいはいと言ふ。

女子どもは何時しか枕元をはづして四邊には父と母と正雄のあるばかり、今いふ事は解るとも解らぬとも覺えぬども兄樣兄樣と小さき聲に呼べば、何か用かと氷囊を片寄せて傍近く寄るに、私を起して下され、何故か身躰が痛くてと言ふ、それは何時も氣の立つまゝに驅出して大の男に捉へられるを、振放すとて恐ろしき力を出せば定めて身も痛からう生疵も處々にあるを、それでも身躰の痛いが知れるほどならばと果敢なき事をも兩親の願もしがりぬ。

おまへの抱かれて居るは誰何、知れるかえと母親の問へば、言下に兄樣で御座りましやうと言ふ、左樣わかればもう仔細は無し、今話して下された事覺えてかと言へば、知つて居まする、花は盛りにと又あらぬ事を言ひ出せば、一同顏を見合せて情なき思ひなり。

良しばしありて雪子は息の下に極めて恥かしげの低き聲して、もう後生お願ひで御座りまする、其事は言ふて下さりますな、其やうに仰せ下さりましても私にはお返事の致しやうが御座りませぬと言ひ出づるに、何をと母が顏を出せば、あ、植村さん、植村さん、何處へお出遊ばすのと岸破と起きて、不意に猛く正雄の膝を突きのけつゝ緣の方へと驅け出すに、それとて一同ばら〳〵と勝手より太吉おくらなど飛來るほどにさのみも行かず緣先の柱のもとにぴたりと坐し

て、斷忍して下され、私がわるう御座りました、始めから私が悪う御座りました、貴君に悪い事は無い、私が、私が、申さないが悪う御座りました、兄と言ふては居りまするけれど。むせび泣きの聲きこえ初めて斷續の言葉その事とも聞わき難く、半かゝげし軒ばの簾、風に音する夕ぐれ淋し。

(五)

雪子が繰かへす言の葉は昨日も今日も一昨日も、三月の以前も、其前もさらに異る事をば言はざりき、唇に絶えぬは植村といふ名、ゆるし給へと言ふ言葉、學校といひ、手紙といひ、我罪、おあとから行まする、戀しき君、さる詞をば次第なく並べて、身は此處に心はもぬけの殼になりたれば、人の言へるは聞分くるよしも無く、樂しげに笑ふは無心の昔を夢みてなるべく、胸を抱きて苦悶するは遣る方なかりし當時のさまの再び現にあらはるゝなるべし。

おいたはしき事とは太吉も言ひぬ、お倉も言へり、心なきお三どんの末までお嬢さまに罪ありとはいさゝかも言はざりき、黄八丈の袖の長き書生羽織めして、品のよき高髷にお根がけは櫻色を重ねたる白の丈長、平打の銀簪一つ淡泊と遊ばして學校がよひのお姿今も目に殘りて、何時

留のやうに御平癒遊ばすやらと心細し、植村さまも好いお方であつたものをとお倉の言へば、何があの色の黒い無骨らしきお方、學問はえらからうとも何うで此方のお嬢さまが對にはならぬ、根つから私は褒めませぬとお三の力めば、それはお前が知らぬから其樣な憎ていな事も言へるものゝ、三日交際をしたら植村樣のあと追ふて三途の川まで行きたくならう、番町の若旦那を悪いと言ふではなけれど、彼方とは質が違ふて言ふに言はれぬ好い方であつた、私でさへ植村樣が何だと聞いた時にはお可愛想な事をと涙がこぼれたもの、お嬢さまの身になつては辛からうではないか、私やお前のやうなおつと來いならば事は無いけれど、不斷つゝしんでお出遊ばすだけ身にしみる事も深からう、あの親切な優しい方を斯う言ふては悪いけれど若旦那さへ無かつたらお嬢さまも御病氣になるほどの心配は遊ばすまいに、左樣いへば植村樣が無かつたら天下泰平に治まつたものを、あゝ浮世はつらいものだね、何事も明すけに言ふて退ける事が出來ぬからとて、お倉はつく〳〵まゝならぬを痛みぬ。つとめある身なれば正雄は日毎に訪ふ事もならで、三日おき、二日おきの夜な〳〵車を柳のもとに乘りすてぬ、雪子は喜んで迎へる時あり、泣いて辭す時あり、稚兒のやうになりて正雄の膝を枕にして寐る時あり、誰が給仕にても箸をば取らずと我儘をいへれど、正雄に叱られて同じ膳の上に粥の湯をすゝる事もあり、

癒つて呉れるか。癒りまする。今日癒つて呉れ。今日癒りまする、癒つて兄様のお袴を仕立て上げまする、お召も縫ふて上げまする、それは辱し早く癒つて縫ふて呉れと言へば、左様しましたらば植村様を呼んで下さるか、植村様に逢はして下さるか、むゝ逢はして遣る、呼んでも來る、はやく癒つて御兩親に安心させて呉れ、宜いかと言へば、あゝ明日は癒りまするとの譯りもなく言ひけり。

正しく言ひしを心願みに有るまじき事とは思へども明日は日暮も待たず車を飛ばせ來るに、容躰ことゝく變りて何を言へどもいやゝとて人の顔をば見るを厭ひ、父母をも兄をも女子どもをも寄せつけず、知りませぬ、知りませぬ、私は何も知りませぬとて打泣くばかり、家の中をば廣き野原と見て行く方なき歎きに人の袖をもしぼらせぬ。

俄かに暑氣つよくなりし八月の中旬より狂亂いたく募りて人をも物をも見分ちがたく、泣く聲は晝夜に絶えず、眠るといふ事ふつに無ければ落入たる眼に形相すさまじく此世の人とも覺えずなりぬ、看護の人も勞れぬ、雪子の身も弱りぬ、きのふも植村に逢ひしと言ひ、今日も植村に逢ひたりと言ふ、川一つ隔てゝ姿を見るばかり、霧の立おほふて朧氣なれども明日は明日はと言ひて又そのほかに物いはず。

いつぞは正氣に復りて夢のさめたる如く、父様母様といふ折のありもやすると覺束なくも一日二日と待たれぬ、空蟬はからを見つゝもなぐさめつ、あはれ門なる柳に秋風のおと聞こえずもがな。

そゝろごと

雨の夜

庭の芭蕉のいと高やかに延びて、葉は垣根の上やがて五尺もこえつべし、今歳はいかなれば斯くいつまでも丈のひくきなど言ひてしを夏の末つかた極めて暑かりしに唯一日ふつか、三日とも數へずして驚くばかりに成りぬ、秋かぜ少しそよ〳〵とすれば端のかたより果敢なげに破れて、風情次第に淋しくなるほど雨の夜の音なひとれとそは哀れなれ、こまかき雨ははら〳〵と音して、蟋がくれ鳴くこほろぎのふしをも亂さず、風一しきり颯と降くるは彼の葉にばかり憑るかといたまし。雨は何時もあはれなる中に秋はまして身にしむこと多かり、更けゆくまゝに燈火のかげなどうら淋しく、寢られぬ夜なれば臥床に入らんも詮なしとて小切れ入れたる疊紙とり出だし、何とはなしに針をも取られぬ、未だ幼くて伯母なる人に縫物ならひつる頃、衽先、袴の形などむづかしう言はれし、いと恥かしうて是れ習ひ得ざらんほどはと家に近き某の社に日參といふ事をなしける、思へばそれも昔なりけり、をしへし人は苔の下になりて習ひとりし

身は大方もの忘れしつ、斯くたまさかに取出づるにも指の先こわきやうにて、はか〳〵しうは得も縫ひがたきを、彼の人あらば如何ばかり言ふ甲斐なく淺ましと思ふらん、など打返し其むかしの戀しうてそゝろに袖もぬれそふ心地す、遠くより音して歩み來るやうなる雨、近き板戸に打つけの騒がしさ、いづれも淋しからぬかは。老たる親の痩せたる肩もむとて、骨の手に當りたるもかゝる夜はいとゝ心細さのやるかたなし。

月の夜

村雲すこし有るもよし、無きもよし、みがき立てたるやうの月のかげに尺八の音の聞えたる、上手ならばいとをかしかるべし、三味も同じこと、琴は西片町あたりの垣根ごしに聞たるが、いと良き月に彈く人のかげも見まほしく、物がたりめきて床しかりし、親しき友に別れたる頃の月いとなぐさめがたうも有るかな、千里のほかまでと思ひやるに添ひても行かれぬものなれば唯うらやましうて、これを假に鏡となしたらば人のかげも映るべしやなど果敢なき事さへ思ひ出でらる。さゝやかなる庭の池水にゆられて見ゆるかげ物いふやうにて、手すりめきたる處に寄りて久しう見入るれば、はじめは浮きたるやうなりしも次第に底ふかく、此池の深さいく

ばくとも測られぬ心地に成て、月は其そこの底のいと深くに住むらん物のやうに思はれぬ、久しうありて仰ぎ見るに空なる月と水のかげと孰れを賊のかたちとも思はれず、物ぐるほしけれど箱庭に作りたる石一つ水の面にそと取落せば、さゝ波すこし分れて是れにぞ月のかげ漂ひぬ、斯くはかなき事して見せつれば朔なる子の小さきが真似て、姉さまのする事我れもすとて硯の石いつのほどに持て出でつらん、我れもお月さま碎くのなりとてはたと捨てつ、それは亡き兄の物なりしを身に傳へていと大事と思ひたりしに果敢なき事にて失ひつる罪得がましき事とぞもふ、此池かへさせてなど言へども未ださながらにてなん、明ぬれば月は空に還りて名殘もとゞめぬを、硯はいかさまに成ぬらん、夜な〳〵影や待とるらんと憐なり。嬉しきは月の夜の客人、つねは疎々しくなどある人の心安げに訪ひ寄たる、男にても嬉しきを、まして女の友にさる人あらば如何ばかり嬉しからん、みづから出るに難からば文にてもおこせかし、歌よみがましきは憎きものなれどかゝる夜の一言には身にしみて思ふ友とも成ぬべし。大路ゆく辻占うりのこゑ、汽車の笛の遠くひゞきたるも、何とはなしに魂あくがるゝ心地す。

雁がね

朝月夜のかげ空に殘りて、見し夢のなごりもまだ現なきやうなるに雨戸あけさして打ながむれば、さと吹く風竹の葉の露を拂ひて、そゝろ寒けく身にしみ渡る折しも、落くるやうに雁がねの聞えたる、孤つなるは猶さら、列ねし姿もあはれなり、思ふ人を遠き縣などにやりて明くれ便りの待わたらるゝ頃これを聞たらば如何なる思ひやすらんと哀れなり。朝霧ゆふ霧のまぎれに聲のみ洩らして過ぎゆくもをかしく、更けたる枕に鐘の音きこえて、月すむ田面に落つらんかげ思ひやるも哀れ深しや。旅寢の床、佗人の住家、いづれに聞ても物おもひ添ふる種なるべし、一とせ下谷のほとりに假初の家居して、商人といふ名も耻かしき、唯いさゝかの物とり並べて朝夕のたつきとなしゝ頃、樓端の庇あれたれども月さすたよりとなるにはあらで、向ひの家の二階のはづれを纔かにもれ出づる影したはしく、大路に立て心ぼそく打あふぐに、秋風たかく吹きて空にはいさゝかの雲もなし、あはれかゝる夜よ、歌よむ友のたれかれ集ひて、靜かに浮世の外の物がたりなど言ひ交はしつるはと、俄かに其わたり懋しう涙ぐまるゝに、友に別れし雁唯一つ、空に聲して何處にかゆく、さびしとは世のつね、命つれなくさへ思はれぬ。擣衣の音に交りて聞えたる如何ならん、三つ四つなど囃して小さき子の大路を走れるは、さも淋しき物のをかしう聞ゆるやと羨ましくなん。

嘉新人新言
きみかえんと
ちしゝうふ

蟲の聲

垣根の朝顔やう〳〵小さく咲きて、昨日今日葉がくれに一花みゆるも其はじめの事おもはれて憐れなるに、松虫すゞ虫いつしか鳴よわりて、朝日まちとりて籠馬の果敢なげに聲する、小溝の端、壁の中など有るか無きかの命のほど、老たる人、病める身などにて聞たらば、さこそ比べられて物かなしからん、まだ初霜は置くまじきを今年は虫の齡いと短かくて、はやくに聲のかれ〳〵に成しかな、くつわ虫はかしましき聲もかたちもいと丈夫めかしきを、いつしか時の間におとろへ行くらん、人にもさる類ひはありけりとをかし、鈴虫はふり出でゝなく聲のうつくしければ、物ぬたみされて齡ひの短きなめりと點頭かる、松虫も同じことなれど、名と實と伴はねばあやしまるゝぞかし、常磐の松を名に呼べれば、千歳ならずとも枯野の末まではあるべきを、萩の花ちりこぼるゝやがて聲せず成行く、さる盛りの短かきものなれば、暫時も似よと此名は負せけん、名づけ新ぞ知らまほしき。此虫一とせ籠に飼ひて露にも霜にも當てじといたはりしが、その頃病ひに臥したりし兄の、夜な〳〵鳴くこゑ耳につきて物佗しく厭はしく、あの聲なくば此夜やすく睡らるべしなど言へるも道理にて、いそぎ取おろして庭草の茂みに放

ちぬ、其夜なくやと試みたれどさらに聲の聞えねば、俄かに露の身に寒く鳴くべき勢ひの無くなりしかと憐れみ合ひし、其とし暮れて兄は空しき數に入りつ、又の年の秋、今日ぞ此頃などと思ひ出づる折しも、ある夜ふけて近き垣根のうちにさながらの聲きこえ出でぬ、よもあらじとは思へど唯其ものゝやうに懐かしく、戀しきにも珍らしきにも涙のみこぼれて、此虫がやうに、よし異物なりとも聲かたち同じかるべき人の唯今こゝに立出で來らば如何ならん、我れは其補をつと捉へて放つ事をなすまじく、母は嬉しさに物は言はれで涙のみふりこぼし給ふや、父は如何さまに爲し給ふらんなど怪しき事を思ひよる、かくて二夜ばかりは鳴きつ、其後は何處にゆきけん、假にも聲の聞えずなりぬ、今も松虫の聲きけばやがて其折おもひ出でられて物がなしきに、籠に飼ふ事は更にも思ひ寄らず、おのづからの野邊に鳴弱りゆくなど、唯その人の別れのやうに思はるゝぞかし。

ほとゝぎす

ほとゝぎすの聲まだしらねば、いかにしてか聞かばやと戀しがるに、人の訪ひ來て何かは聞えぬ事のあるべき、我が宿の大木にはときりてさへ鳴くものを、夜ふけ枕にこゝろし給へ、近く聞く時は唯一こゑあやしき音に聞きなされど、遠くなりゆく聲のいと哀れなるぞと敎へられき。時は舊き曆の五月にさへあれば、あのが時たゝ今と心いさみて、それよりの夜な〳〵目もあはず、いかで聞きもらさじと待わたるに、はかなくて一夜は過ぎぬ、そのつぎの夜もつぎの夜もおぼつかなくて何時しか曉月夜の頃にもなれば、など斯くばかり物はおもはする、いとつれなくも有るかなと憎む〳〵猶まつに弱らで一夜を待あかしゝに、ある曉のいとねぶたうて、物もおぼえずしばし夢結ぶやうなりしが、耳もと近くその聲あやまたず聞えぬ、まだ聞かざりし音をさやかに知るは怪しけれど疑ひなき夫れと枕おしやりて、居直れば又一こゑさやかにぞなく、故人がよみつる歌の事などさま〳〵胸に迫りて、ほと〳〵涙もこぼれつべく、ゆかしさのいと堪へがたければ闇の戸おして大空を打見あぐるに月には横雲少しかゝりて、見わたす岡の若葉のかげ暗う、過ぎゆきけんかげも見えぬなん、いと口惜しうもゆかしうも唯身にし

みて打ながめられき。明ぬれば歌よむ友のもとに消息して此ほこりいはゞやとしつるを、事にまぎれてさて暮しつ、夜に入れば又々鳴きわたるよ、こたびは宵より打しきりぬ、人の聞かせしやうに細やかなる聲はあらねど唯ものゝ哀れにて、げに戀する人の我れに聞かすなと言ひけんも道理ぞかし、おもふ事なき身もとすゝろに鼻かみわたされて、日記のうちには今宵のおもふことと種々しるして、やがて哀れしる人にとおもふ。かくて二日ばかり、三日の後なりけん、ゆくりなく訪ひ來し友あり、いと嬉しうて、今や此事かたり出でん、しばしゝてや慰かすべき、さこそは人の羨ましがるべきをと、嬉しきにも猶はゞかられつゝ、あらぬ事ども言ひかはすほどに、折しもかの杜鵑樒端に近う鳴く聲のする、あれ聞き給へ、此宿はこゝあの森にもあらぬを、此夜頃たえせず聲の聞ゆるが上に、ひるさへ斯くと打出したれば、友は得ときがたきおもゝちして、何をかのたまふ、とたゝに言ふ、かく〳〵と語れば、そは承けがたき事と打かたぶき打かたぶきするほどに、又も一聲二聲うちしきれば、あれが聲を郭公とや、いかにして然はおぼしつるぞ、いとよき御聞きざまと友は口おほひもしあへず笑みくつがへる、いつも曉よりなきいでゝ夕ぐれまでは御樒のものなるを、いかにして然は聞き給ひけん、物ぐるほしくもおはしますかなといよ〳〵笑ふに、さにはあるまじ、いかで山がらすを然はおもふべき、あの

鳴音聞き給へ、よもあやまらじと誇しうなりて言へば、月夜に寢ぼうけて鳴出づる時は常の蟲とも異りぬべし、今のなく音は何かは異ならん、あれ見給へ飛びゆく姿もさやかなるをと指さゝれて、あはれ此杜鵑いつも初音をなく物に成りぬ。覺めずは夢のをかしからましを。

この子

口に出して私が我子が可愛いといふ事を申したら、嘲笑樣は大笑ひを遊ばしましやう、それは何方だからとて我子の憎いはありませぬもの、取たて〻何も斯う自分ばかり美事な寶を持つて居るやうに誇り顏に申すことの可笑しいをお笑ひに成りましやう、だから私は口に出して其樣な仰山らしい事は言ひませぬけれど、心のうちではほんに〳〵可愛いの憎いのではありませぬ、掌を合せて拜まぬばかり辱ないと思ふて居りまする。

私の此子は言はゞ私の爲の守り神で、此樣な可愛い笑顏をして、無心な遊をして居ますけれど、此無心の笑顏が私に敎へて呉れました事の大層なは、殘りなく口には言ひ盡くされませぬ、學校で讀みました書物、敎師から言ひ聞かして呉れました種々の事は、それはたしかに私の身の爲にもなり、事ある毎に思ひ出してはあゝで有つた、斯うで有つたと一々顧みられまするけれど、此子の笑顏のやうに直接に、眼前、かけ出す足を止めたり、狂ふ心を靜めたはありませぬ、此子が何の氣も無く小豆枕をして、兩手を肩のそばへ投出して寢入つて居る時の其顏といふものは、大學者さまが頭の上から大聲で異見をして下さるとは違ふて、心から底から沸き

出すほどの涙がこぼれて、いかに強情我まんの私でも、子供なんぞ些とも可愛くはありません と威張つた事は言はれませんかつた。

昨年の暮押つまつてから産聟をあげて、はじめて此赤い顔を見せて呉れました時、私はまだ其時分宇宙に迷ふやうな心持で居たものですから、今思ふと情ないのではありますけれど、あゝ何故丈夫で生れて呉れたらう、お前さへ亡つて呉れたなら私は肥立次第實家へ歸つて仕舞ふのに、こんな旦那様のお傍何かに一時も居やしないのに、何故まあ丈夫で生れて呉れたらう、厭だ、厭だ、何うしても此縁につながれて、これからの永世を光りも無い中に暮すのかしら、厭な事の、情ない身と此やうな事を思ふて、人はお目出たうと言ふて呉れても私は少しも嬉しいとは思はず、只々自分の身の次第に詰らなくなるをばかり悲しい事に思ひました。

それですが彼の時分の私の地位に他の人を置いて御覽じろ、それは何んな諦めのよい悟つた方にしたところが、是非此世の中は詰らない面白くないもので、隨分とも酷い、つれない、天道様は是か非かなどゝいふ事が、私の生意氣の心からばかりでは有ますまい、必ず、屹度、何方のお口からも洩れずには居りますまい、私は自分に少しも悪い事は無い、間違つた事はして居ないと極めて居りましたから、すべての衝突を旦那さまのお心一つから起る事として仕舞つ

て、遇二無二旦那さまを恨みました、又斯ういふ旦那さまを態と見たてゝ私の一生を苦しませて下さるかと思ふと實家の親、まあ親です、それは恩のある伯父様ですけれども其人の事も恨めしいと思ひまするし、第一犯した罪も無い私、人の言ふなりに温順しう嫁入つて來た私を、自然と此様な運に搾へて置いて、盲者を谷へ擠すやうな事を遊ばす、神様といふのですか何ですか、其方が實に〳〵恨めしい、だから此世は厭なものと斯う極めました。

負けない氣といふはいゝ事で、あれで無くてはむづかしい事を遣りのける譯には行かぬ、ぐにや〳〵と柔かい根性ばかりでは何時も人が海鼠のやうだと斯う仰しやるお方もありますけれど、それも時と場合によつたもので、のべつに勝氣を振廻しても成りますまい、其うちにも女の勝氣、中へつゝんで諸事を心得て居たら宜いかも知れませぬけれど、私のやうな表むきの負けるぎらひは見る人の目からは淺ましくもありましやう、つまらぬ妻を持つたものだといふ感は良人の方に却つて多くあつたので御座りましやう、で御座いますけれど私に其時自分を省る考へは出ませぬゆゑ、良人のこゝろを察する事は出來ませぬ、厭な顔を遊ばせば、それが直ぐ氣に障りまするし、小言の一つも言はれましやうなら火のやうに成つて腹たゝしく、言葉灰しはつひしか爲ませんかつたけれど、物を言はず物を喰べず、隨分婢女どもには八つ當りもし

て、一日床を敷いて臥つて居た事も一度や二度では御座りませぬ、私は泣虫で御座いますから、その強情の割合に腑甲斐ないほど搔卷の襟に喰ついて泣きました、唯々口惜し涙なので、勝氣のさせる理由も無い口惜し涙なのでした。

嫁入つたは三年の前、其當座は極仲もよう御座いましたし雙方に苦情は無かつたので御座いますけれど、馴れるといふは好い事の惡い事で、お互ひ我まゝの生地が出て參ります、諸慾が沸くほど出て參りますから、それは〳〵不足だらけで、それに私が生意氣ですものだからつひ〳〵心安だてに旦那さまが外で遊ばす事にまで口を出して、何うも貴郎は私にかくし立を遊ばして、外の事といふと少しも聞かせては下さらぬ、それはお隔て心だと言つて恨みまするど、何そんな水臭い事はしない、何も彼も聞かせるではないかと仰しやつて相手にせずに笑つていらつしやるのです、あり〳〵隱してお出遊ばすのは見えすいて居りますし、さあ私の心はたまりません、一つを疑ひ出すと十も二十も疑はしくなつて、朝夕旦暮あれ又あんな嘘と思ふやうになり、何だか其處が可笑しくとぐらかりまして、何うしても上手に思ひとく事が出來ませんかつた、今おもふて見ると成るほど隱しだても遊ばしましたらう、何と言つても女ですもの、口が早いに依つてお務め向きの事などは話してお聞かせ下さるわけには行きますまい、現に今でも隱し

ていらつしやる事は夥しくあります、それは承知で、たしかに左樣と知つて居りまするけれど今は少しも恨む事をいたしません、なるほど此話しを聞かして下さらぬが旦那樣の價値で、あの位私が泣いても恨んでも取合つて下さらなかつたは旦那樣のおえらいので、あの時代のやうな遲蕃な私に萬一お役所の事でも聞かして下さらうなら、どのやうの詰らぬ事を仕出來すか、それでなくてさへ隨分出入の者の手などを假りて、私の手もとまで怪しい遣ひ物などをよこして、斯ういふ事情で酷く難儀をして居ります、此裁判の判決次第で生死の分け目に成りますなど〻言つて、原告だの被告だのといふ人が頼み込んで來たも多くあつたれど、それを私が一切受附けなかつたは、山口昇といふ裁判官の妻として、公明正大に陥つたのでは無く、家内の揉て居るに其やうの事を言ひ出す餘地もなく、言つて面白くない御挨拶を聞くよりか默つて居た方がよつぽど洒落て居るといふ位な考へで、幸ひに賄賂の汚れは受けないで濟んだけれど、隔ては次第に重なるばかり、雲霧がだん〳〵と深くなつて、お互ひ心の分らないものに成りました、今思へばそれは私から仕向けたので、私の仕樣が惡かつたに相違無く旦那樣のお心を何時とは無しにぐれさせましたは私が心の行き方が違つた故と今ではつく〳〵後悔の涙がこぼれまする。

絶頂に仲の悪かつた時は、二人ともに背き背きで、外へいらつしやるに何處へと問ふた事も無ければ、行先をいひ置かれる事も無い、お留守に他處からお使ひが來れば、どんな大至急要用でも封といふを切つた事は無く、妻とは言へ木偶がお留守居して居るやうに受取一通で遁拂つて、それは冷淡に投げて置いたものなれば、旦那さまの御立腹は言はでもの事、はじめは小言を仰しやつたり、異見を遊ばしたり、諭したり、慰めたり遊ばしたのなれど、いかにも私の強情の根が深く、隱しだてを遊ばすといふを栖に取つて、ちつとやそつとの優しい言葉ぐらゐでは動きさうにもなく執拗ぬきしほどに、旦那さま呆れて手をば引き給ふ、まだ家内に言葉あらそひの有るうちはよきなれども、物言はず睨め合ふやうに成りては、屋根あり、天井あり、壁のあると言ふばかり、野宿の露の哀れにまさつて、それは冷たい情ない、こぼれる涙の氷らぬが不思議で御座ります。

思へば人は自分勝手なもので、よい時には何事の思ひ出しも有りませぬけれど、苦しいの、厭のと言ふ時に限つて、以前あつた事か、これから遊へる事についてか、大層よさゝうな、立派さうな、結構らしい、事ばかり思ひます、左樣いふ事を思ふにつけて現在の有さまが厭で厭で、何うかして此中をのがれたい、此絆を斷ちたい、此處さへ離れて行つたならば何んな美しく良い處へ出られるかと、斯ういふ事を是非とも考へます、で御座いますから私も矢張その通りの夢にうかれて、此樣な不運で畢るべきが天樣では無い、此家へ嫁入りせぬ以前、まだ小室の養女の實子で有つた時に、いろ〳〵の人が世話をして呉れて、種々の口々を申込んで呉れた、中には海軍の潮田といふ立派な方もあつたし、醫學士の細井といふ色白の人にも極まりかゝつたに、引違へて旦那樣のやうな無口さま〳〵嫁入つて來たは何うかいふ一時の間違ひでもあらう、此間違ひを此まゝに通して、甲斐のない一生を送るは眞實情ない事と考へられ、我身の心をため直さうとはしないで人ごとばかり恨めしく思はれました。

其やうな詰らぬ考へを持つて、詰らぬ仕向けを致しまする妻へ、何のやうな結構な人なればとて親切で對はれましやうか、お役所から退けてお歸り遊ばすに、お出むかへこそ規則通り致しまするけれど、さし向つては一言の打とけたお話しも申上げず、怒るならお怒りなされ、何も御隨意と木で鼻をくゝるやうな素振をして居ますに、旦那さま堪へかねて、ふいと立つて家を出ばお出あそばさるゝ、行先は何れも御神燈の下をくゞるか、待合の小座敷、それをば口惜しがつて私は恨みぬきましたけれど眞の處を言へば、私の御機嫌の取りやうが悪くて、家のうちには不愉快で居たゝまれないからのお遊び、こんな事をして良人を放蕩に仕あげて仕舞ふたので

す、良人は美事家を外にするといふ道楽ものに成つて仕舞ひました。

旦那さまだとて金滿家の息子様が惡人たちに煽動られて、無我夢中に浮かれ立つとは申が違ふて心底おもしろく遊んだのではありますまい、いはゞ癇癪抑へ、憂さ晴らしといふやうな譯で、御酒をめし上つたからとて快くお醉ひになるのではなく、いつも若ざめた顏を遊ばして、何時も額際に青い筋が顯はれて居りました。

物いふ度がけんどんで荒らかで、假初の事にも婢女たちを叱り飛ばし、私の顏をば尻目にお睨み遊ばして小言は仰しやらぬなれども其お氣むづかしい事ど言ふては、現時の旦那様が柔和の相とては少しも無く、恐ろしい凄い、にくらしいお顏つき、其の方の側に私が憤怒の相で控へて居るのですから召使ひはたまりません、大方一月に二人づゝは婢女は替りまして、其都度紛失物が出來ますやら品物の破損などは夥しい事で、何うすれば此樣なに不人情の者ばかり寄合ふのか、世間一躰が此樣に不人情なものか、それとも私一人を歎かせやうといふので、私の身に近い者となると悉く不人情に成るのであらうか、右を向いても左を向いても癪もしい顏をして居るは一人も無い、あゝ厭な事だと捨てばちになりまして、逢ふほどの人に愛想をしやうでもなく、旦那様の御同僚などがお出になつた時分も御馳走はすべて旦那さまのお指圖無い

うちは手出しをもした事はなく、座敷へは婢女ばかり出して私は齒が痛いの頭痛のと言つて、お客の有無にかゝはらず勝手氣儘の身持をして呼ばれましたからとて返事をしやうでもない、あれをば他人は何と見ましたか、定めし山口は百年の不作だとでも評して、妻たる者の風上へも置かれぬ女と言はれましてしやう。

あの頃旦那さまが離縁をやると一言仰しやつたが最期、私は屹度何事の思慮もなく暇を頂いて、自分の身の不都合は棚へ上げて、此樣な不運な、情ない、口惜しい身と天が極めてお置きなさるなら、何うでも宜しい、何となり遊ばしませ、私は私の考へ通りな事して、悪ければ悪くなれ、萬一よければそれこそ儲け物といふやうな無茶苦茶の道理を附けて、今頃私は何に成つて居ましたか、思へば身ぶるひが出ます、よく旦那様は思ひ切つた離縁沙汰を遊ばさずに、能うも私を取止めて置いて下さつた、それはお癇癪の墓つて生やさしい離縁などをお出しなさるより何時までも檻の中へ置いて苦しませてやらうといふお考へであつたか其處は解らぬなれども、今では私は何事の恨みも無い、旦那さまへ對して何事の恨みも無い、あのやうに苦しませて下さつた故今日の樂しみが樂しいので、私がいくらか物の解るやうに成つたもあゝいふ中を經た故であらう、それを思ふと私の爲に仇敵といふ人は一人も無くて、あの輕忽とこまやく

れて世間へ私の身のあらを吹聽して歩いたといふ小間づかひの早も、口返答ばかりして役たゝずであつた御飯たきの勝も、みんな私の恩人といふて宜い、今このやうに好い女中ばかり集まつて、此方の奥様ぐらゐ人づかひの宜い方は無いと嘘にも喜んだ口をきかれるは、彼の人達の不奉公を私の心の反射だと悟つたからの事、世間に當てもなく人を苦しめる悪黨もなければ、神様だとて徹頭徹尾悪い事の無い人に歎きを見せるといふ事は遊ばすまい、何故ならば、私のやうに身の廻りは悪く心得ちがひばかりで出來上つて、一つとして取柄の無い困り者でも、心として犯した罪が無いほどに、これ此様な可愛らしい美くしい、此坊やをたしかに授けて下さつたのですもの。

此坊やの生れて來やうといふ時分、まだ私は雲霧につゝまれぬいて居たのです、生れてから後も容易には晴れさうにもしなかつたのです、だけれども可愛い、いとしい、といふ事は產聲をあげた時から何故となく身にしみて、いろ〳〵負け惜しみも言ひましやうけれど、そつくり誰れかゝ持つて行くとでも成つたら私は强情を捨てゝ取ついて、此子は誰れにも指もさゝせぬ、これは私の物と抱きしめたで御座りましやう。

旦那さまの思ひも、私の思ひも同じであるといふ事は此子が抑も敎へて呉れたので、私が此子

をば抱きしめて、坊は父様の物ぢやあ無い、お前は母様一人のだよ、母さまが何處へ行くにしろ坊は必らず置いては行かない、私の物だ私のだとて頬を吸ひますと何とも言はれぬ解けるやうな笑顔をして、莞爾々々とします樣子の可愛い事、とても〳〵旦那樣のやうな邪慳の方のお子では無い、これは私一人の物だと斯う極めて居まするに、旦那さまが他處からでもお歸りになつて、不愉快さうなお顔つきで此子の枕もとへお坐り遊ばして、覺束ない手つきに風車を立てゝ見せたり、振りつゝみなどを振つてお見せなされ、一家の内に我を慰めるは坊主一人だぞとあの色の黑いお顔をお摺り寄せ遊ばすと、泣くかしら恐ろしがるかしらと見て居ますに、いかにも嬉しい顔をして莞爾々々と私に見せた通りの笑みを見せるでは御座いませぬか、或時旦那さまは、髯をひねつてお前も此子が可愛いかと仰しやいました、當然で御座います、とてつんと致して居りますと、それではお前も可愛いなと例に似ぬ戯言を仰しやつて、高聲の大笑ひを遊ばした其お顔、此子が面ざしに爭はれないほど似た處が御座いました、私は此子が可愛いのですもの、何うして旦那樣を憎み通せましやう、私が善くすれば旦那さまも善くして下さります、たとへには三歲兒に淺瀨と言ひますけれど、私の身の一生を敎へたのはまだ物を言はない赤ん坊でした。

十三夜

(上)

例は威勢よき黒ぬり車の、それ門に音が止まつた娘ではないかと兩親に出迎はれつるものを、今宵は辻より飛のりの車さへ還して悄然と格子戸の外に立てば、家内には父親が相かはらずの高聲、いはゝ私も福人の一人、いづれも柔順しい子供を持つて育てるに手は懸らず人には褒められる、分外の慾さへ渴かねば此上に望みもなし、やれ〳〵有難い事と物がたられる、あの相手は定めし母樣、あゝ何も御存じなしにあのやうに喜んでお出遊ばすものを、何の顏さげて離縁狀もらふて下されと言はれたものか、叱られるは必定、太郎といふ子もある身にて置いて驅け出して來るまでには種々思案もし盡しての後なれど、今更にお老人を驚かして是れまでの喜びを水の泡にさせまする事つらや、寧そ話さずに戻らうか、戻れば太郎の母と言はれて何時何時までも原田の奥樣、御兩親に奏任の聟がある身と自慢させ、私さへ身を節約れば時たまはお口に合ふ物お小遣ひも差あげられるに、思ふまゝを通して離縁とならば太郎には繼母の憂き

目を見せ、御兩親には今までの自慢の鼻低かに低くさせまして、人の思はく、弟の行末、あゝ此身一つの心から出世の眞も止めずばならず、戻らうか、戻らうか、あの鬼のやうな我夫人のもとに戻らうか、あの鬼の、鬼の夫人のもとへ、えゝ厭々と身をふるはす途端、よろ〳〵として思はず格子にがたりと音さすれば、誰れだと大きく父親の聲、道ゆく惡太郎の悪戯とまがへてなるべし。

外なるはおほゝと笑ふて、お父樣私で御座んすといかにも可愛き聲、や、誰れだ、誰れであつたと障子を引明て、ほうお開か、何だな其樣な處に立つて居て、何うして又此おそくに出かけて來た、車もなし、女中も連れずか、やれ〳〵まあ早く中へ這入れ、さあ這入れ、何うも不意に驚かされたやうでまご〳〵するわな、格子は閉めずとも宜い私が閉める、兎も角も奥がいゝ、ずつとお月樣のさす方へ、さ、蒲團へ乘れ、蒲團へ、何うも埃が汚いので大屋に言つては置いたが職人の都合があると言ふてな、遠慮も何も入らない着物がたまらぬからそれを敷いて奥れ、やれ〳〵何うして此遲くに出て來たお宅では皆お變りもなしかと例に替らずもてはやされば、針の蓆にのるやうにて奥さま扱ひ情なくじつと涙を呑込んで、はい誰れも時候の障りも御座りませぬ、私は申譯のない御無沙汰して居りましたが貴君もお母樣も御機嫌よくいらつしや

りますかと問へば、いやもう私は嚔一つせぬ位、お袋は時たま例の血の道といふ奴を始めるが、の、それも蒲團かぶつて半日も居ればけろ〳〵とする病だから仔細はなしさと元氣よく呵々と笑ふに、亥之さんが見えませぬが今晩は何方へか參りましたか、あの子も替らず勉强で御座んすかと問へば、母親はほた〳〵として茶を侑めながら、亥之は今しがた夜學に出て行ました、あれもお前お蔭さまで此間は昇給させて頂いたし、課長樣が可愛がつて下さるので何の位心丈夫であらう、是れと言ふも矢張原田さんの緣が有るからだとて宅では毎日いひ暮して居ます、お前に如才は有るまいけれど此後とも原田さんの御機嫌の好いやうに、亥之はあの通り口の重い質だし何れお目に懸つてもあつけない御挨拶よりほか出來まいと思はれるから、何分ともお前が中に立つて私どもの心が通じるやう、亥之が行末をもお賴み申して置いてお呉れ、ほんに替り目で陽氣が悪いけれど太郎さんは何時もお悪戯をして居ますか、何故に今夜は連れてお出でゝない、お祖父さんも戀しがつてお出なされたものをと言はれて、又今更にうら悲しく、連れて來やうと思ひましたけれどあの子は宵まどひでもう疾うに寐ましたから其まゝ置いて參りました、本當に悪戯ばかりつのりまして聞わけとては少しもなく、外へ出れば跡を追ひまするし、家内に居れば私の傍ばつかり覘ふて、ほんに〳〵手が懸つて成ませぬ、何故彼樣で御座りませうと言ひかけて思ひ出しの涙むねの中に漲るやうに、思ひ切つて置いては來たれど今頃は目を覺して母さん母さんと婢女どもを迷惑がらせ、お煎餅やおこしの賺しも肯かで、皆々手を引いて鬼に喰はすと威かしてゝも居やう、あゝ可愛さうな事をと聲たてゝも泣きたきを、さしも兩親の機嫌よげなるに言ひ出かねて、烟にまぎらす烟草二三服、空咳こん〳〵として涙を襦袢の袖にかくしぬ。

今宵は舊曆の十三夜、舊弊なれどお月見の眞似事に團子をこしらへてお月樣にお供へ申せし、これはお前も好物なれば少々なりとも亥之助に持たせて上やうと思ふたれど、亥之助も何か極りを悪がつて其樣な物はお止しなされと言ふし、十五夜にあげなんだから片月見になつても悪し、喰べさせたいと思ひながら思ふばかりで上げる事が出來なんだに、今夜來て呉れるとは夢のやうな、ほんに心が屆いたのであらう、自宅で甘い物はいくらも喰べやうけれど親のこしらへたは又別物、奥樣氣を取すてゝ今夜は昔のお關になつて、外見を搆はず豆なり栗なり氣に入つたを喰べて見せてお呉れ、いつでも父樣と噂すること、出世は出世に相違なく、人の見る目も立派なほど、お位のいゝ方々や御身分のある奥樣がたとの御交際もして、兎も角も原田の妻と名告て通るには氣骨の折れる事もあらう、女子どもの使ひやう出入りの者の行渡り、人の上